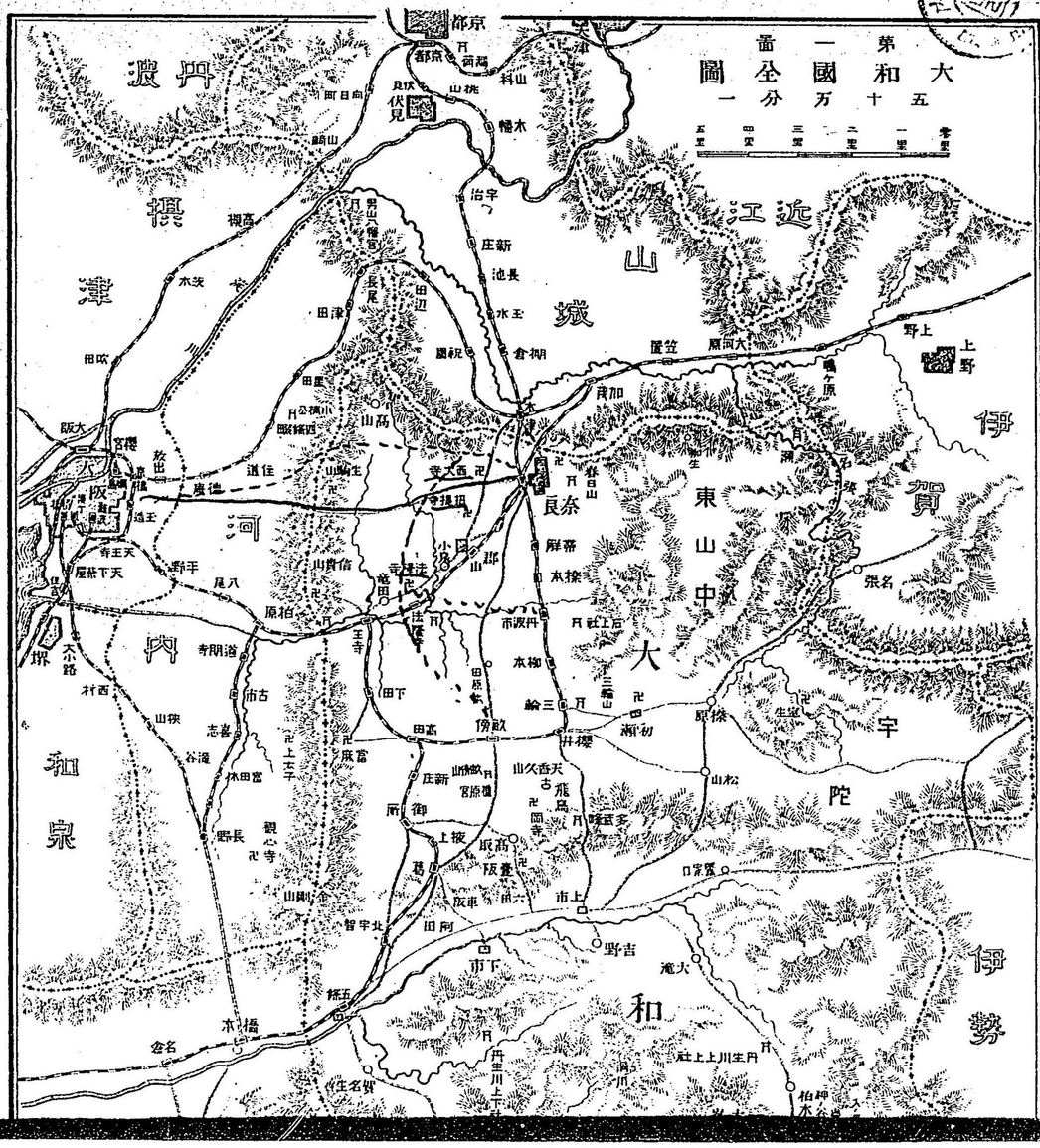
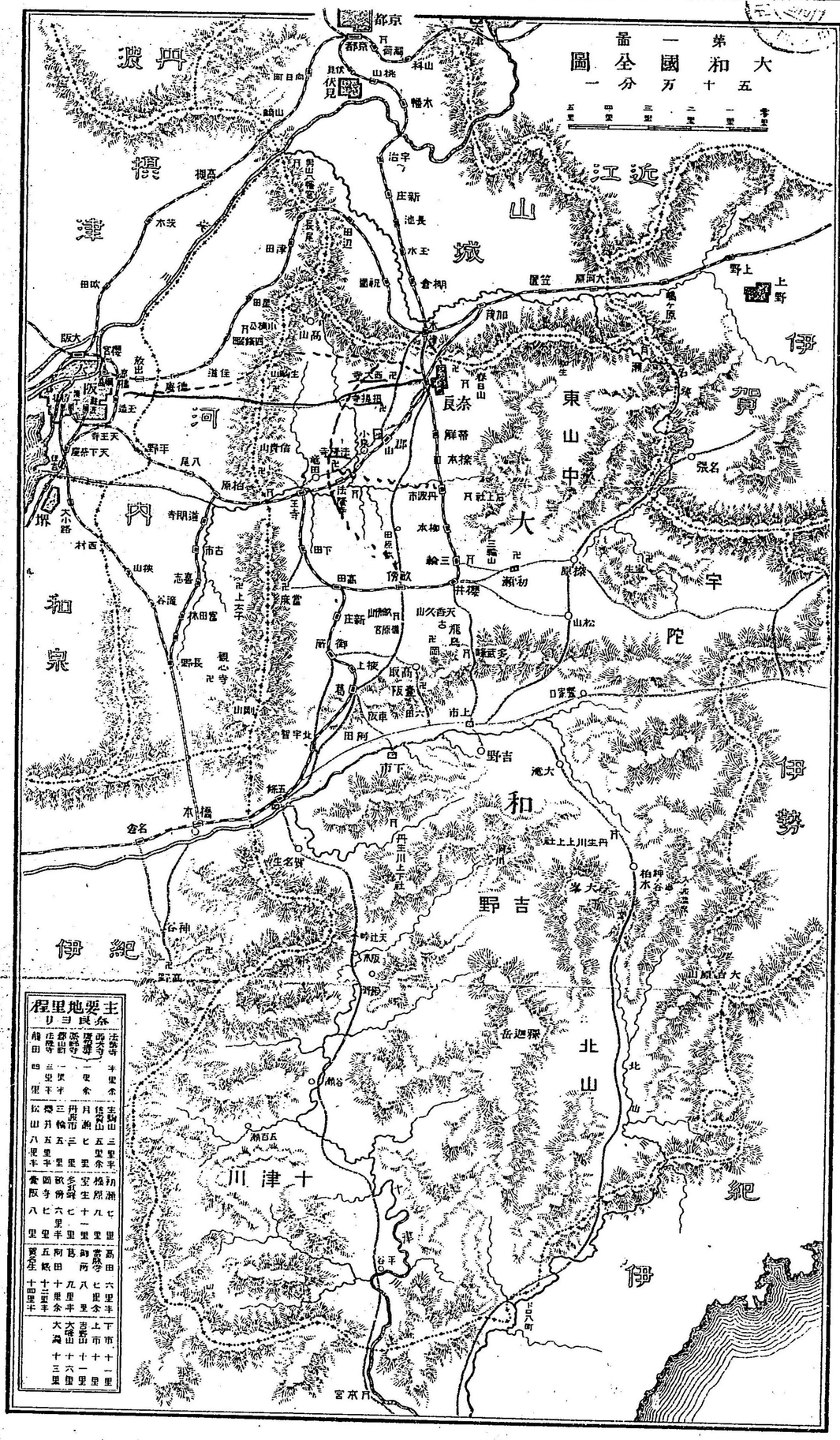
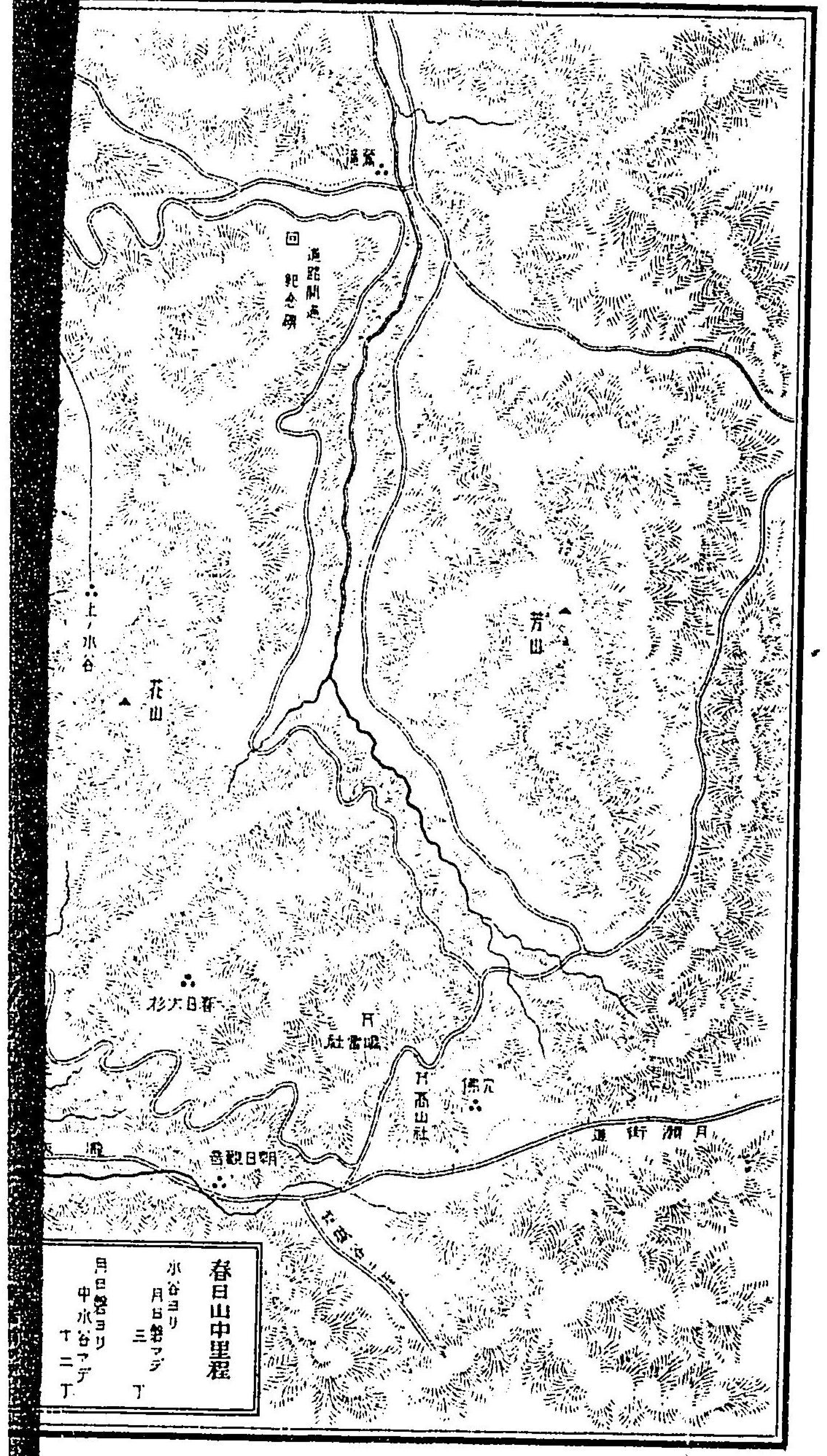

第一圖
大和國全圖
五十万分一
五里 四里 三里 二里 一里 零里
摂津
河内
和泉
近江
山城
伊賀
東山中
大宇陀
伊勢
和
京都
伏見
桃山
木幡
宇治
庄新
長尾
田辺
水主
倉橋
原河大
上野
野上
笠置
加茂
山高
寺大西
寺法隆
寺法輪
寺法起
寺法興
寺法
寺法隆
寺法
寺法
寺法

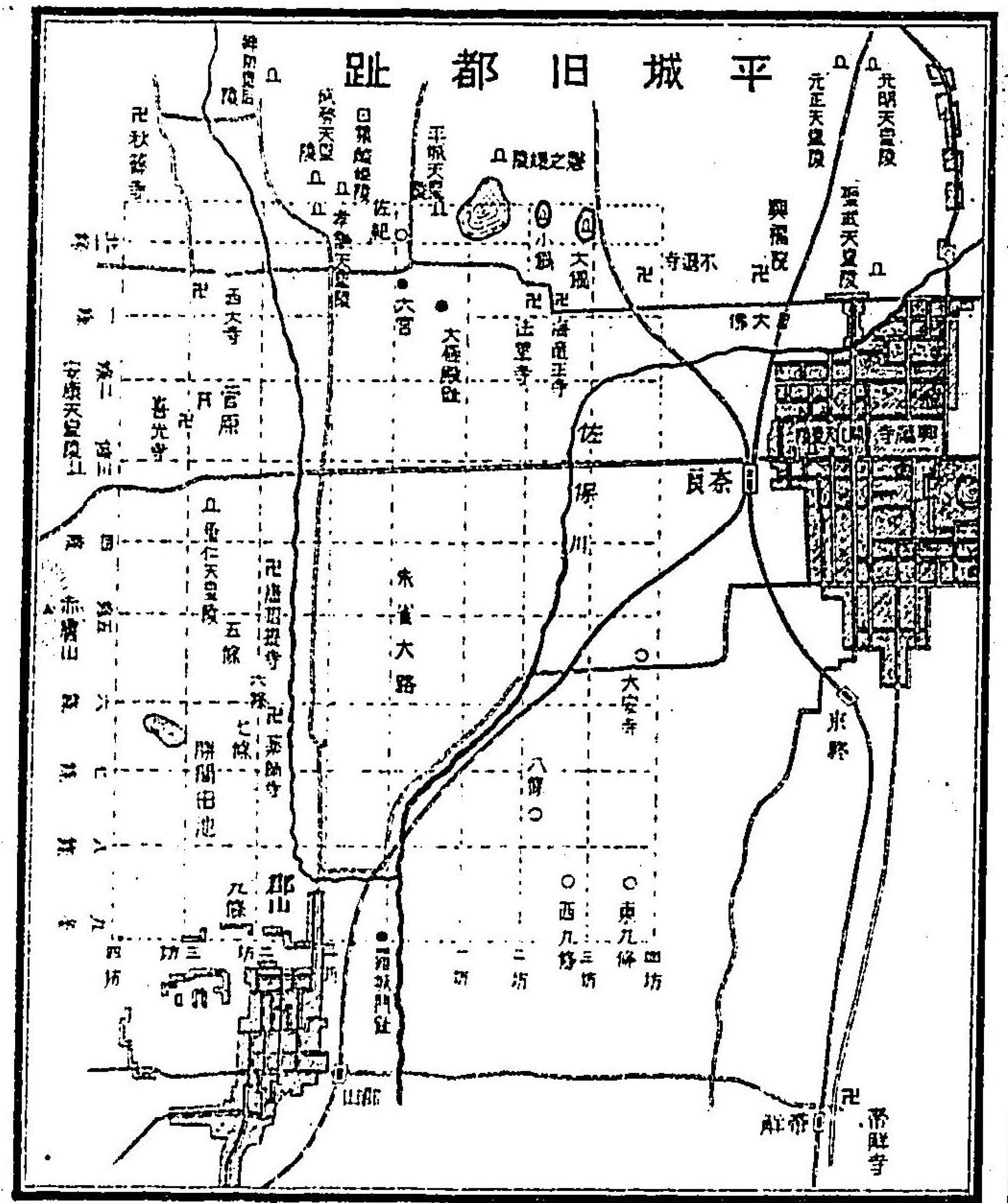
第一圖

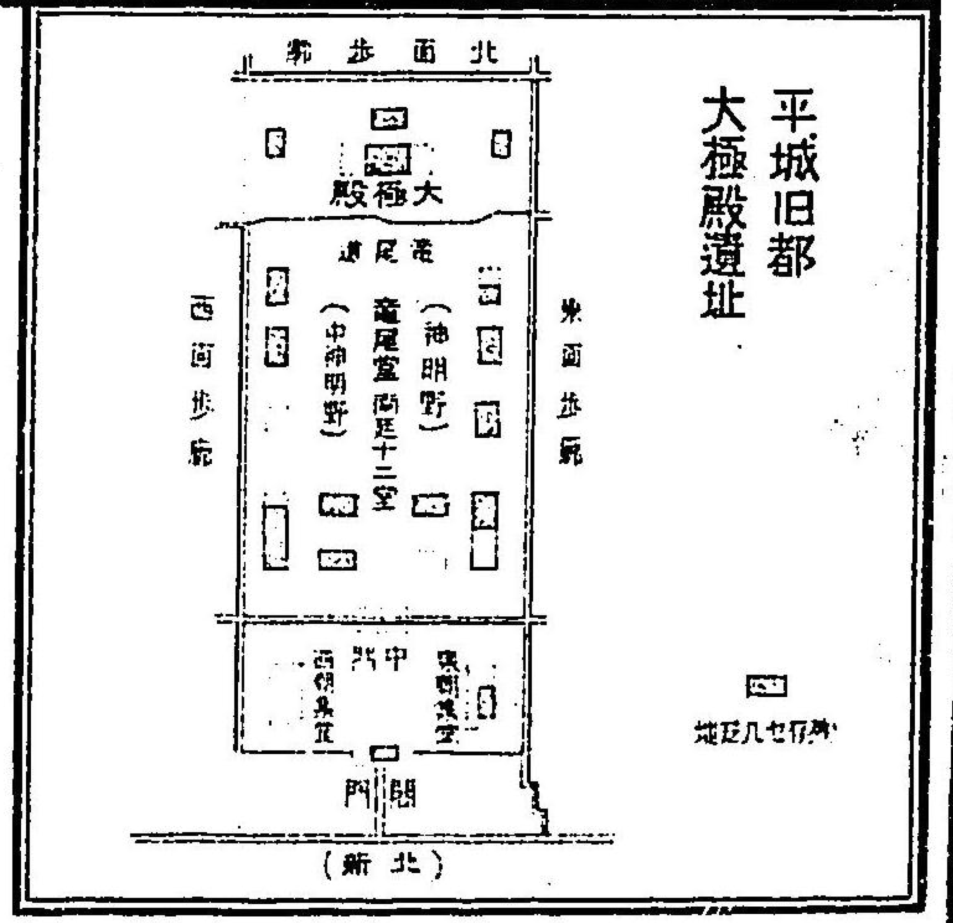
大和國全圖

五十万分一




春日山中里程

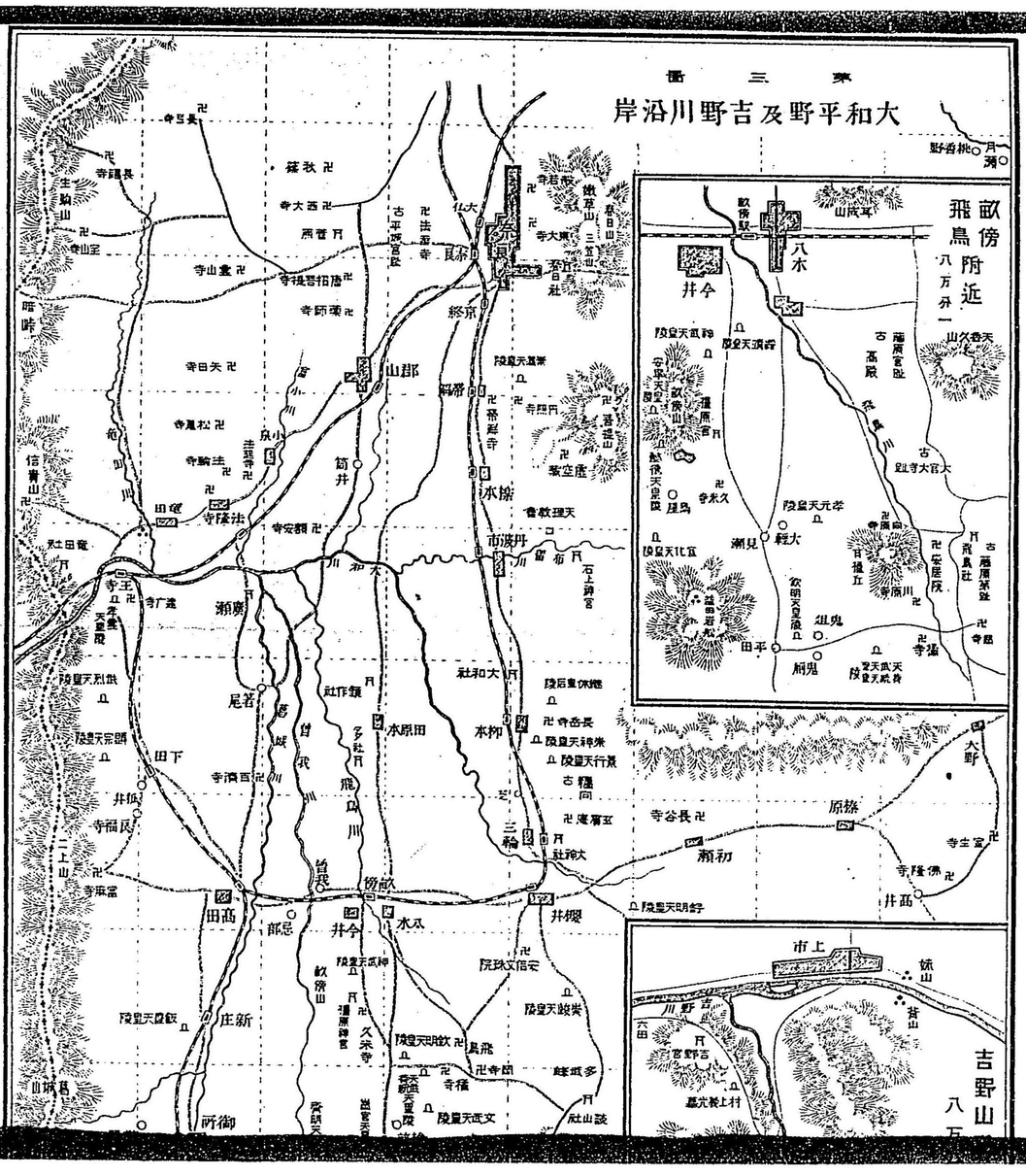

平城旧都址

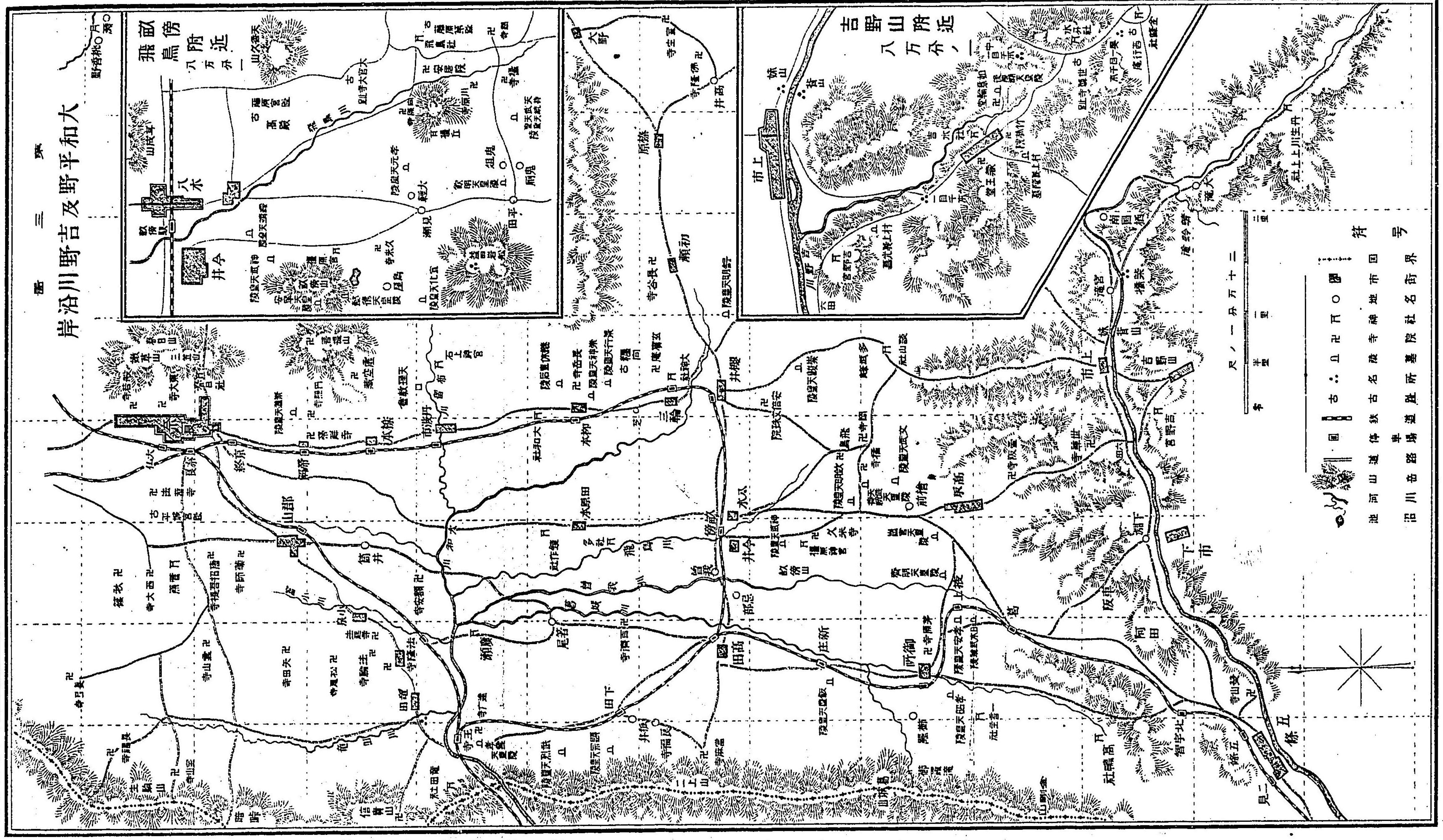

平城旧都
大極殿遺址

第貳圖
奈良公園及市街
二万分之一尺
春日山中里程
水谷ヨリ 月日磐マデ 三丁
月日磐ヨリ 中水谷マデ 十二丁
中水谷ヨリ 鳥居前マデ 八丁
鳥居前ヨリ 鶯滝マデ 十六丁
鶯滝ヨリ 高山マデ 二十丁
高山ヨリ 三本杉マデ 十九丁
三本杉ヨリ 春日大杉マデ 十三丁

第三圖

大和平野及吉野川沿岸




第三圖
大和平野及吉野川沿岸
飛鳥附近 八万分一
吉野山附近 八万分一
二十万分ノ一
五條
下市
上市
八木
今井
桜井
高田
御所
郡山
奈良

奈瓦遠景

南都八景

南圓堂藤　佐保川螢

猿澤月池　春日野鹿

三笠山雪　登彼坂雨

東大寺鐘　嶽橋行人

半空湧出両浮圖。　更有伽藍俯九衢。

十二帝陵低不見。　黒風白雨滅南都。　藤井竹外

菊の香や奈良には古き佛達　芭蕉

平城懐古　梁川星巖

登端嶺望古神京。　憶昔春風鼎覓旌。

固沼已荒槐柳合。　衣冠何在堆墳平。

一溪豐草動々鹿。　千樹殘花恰々鶯。

行盡借香山下路。　流泉鳴珮最關情。

わきも子がねくたれ髪を猿澤の
池の玉藻と見るぞ悲しき　柿本人麿

月を手に取りはづしてやそこが毛の
三本たらぬ猿澤の池　讀人不知

借香野色幽宜夏　采女池光艶厭春
東大寺連西大寺　南圓堂接北圓堂　關根痴堂
小原竹香

興福寺は七堂伽藍、はじめは、山階寺といひ、中比は馬屋寺と號す。東金堂、中金堂、食堂、講堂、南圓堂には、補陀落の藤をうつして、順禮の札を納め、東圓堂には、いにしへの、八重櫻を殘して、花垣の庄を領す。西金堂の樂をあらため、南大門に移して薪の能をはじむ。七度半の使に、四座の猿樂をめす、雨天には紙なふんで試み、夜陰には薪を積でたく、保生が鉢の木に名人の號なをり大倉が芭蕉に、達人の名をあらはす、（南都風）

奈良七重七堂伽藍八重櫻　　芭蕉

綿百畝　　願主　大法師　聖勝　生年五十一

建保三年卯月廿六日　　法橋康辨作（雲判）（龍燈鬼胎中墨書）

佛工系圖

一代 定朝 ― 二代 覺助 ― 三代 賴助 ― 四代 康助 ― 康朝 ― 五代 康慶 ― 六代 運慶 ― 七代 湛慶

快慶（安阿彌）

八代 康運（改名定慶）

九代 康勝

十代 康辨

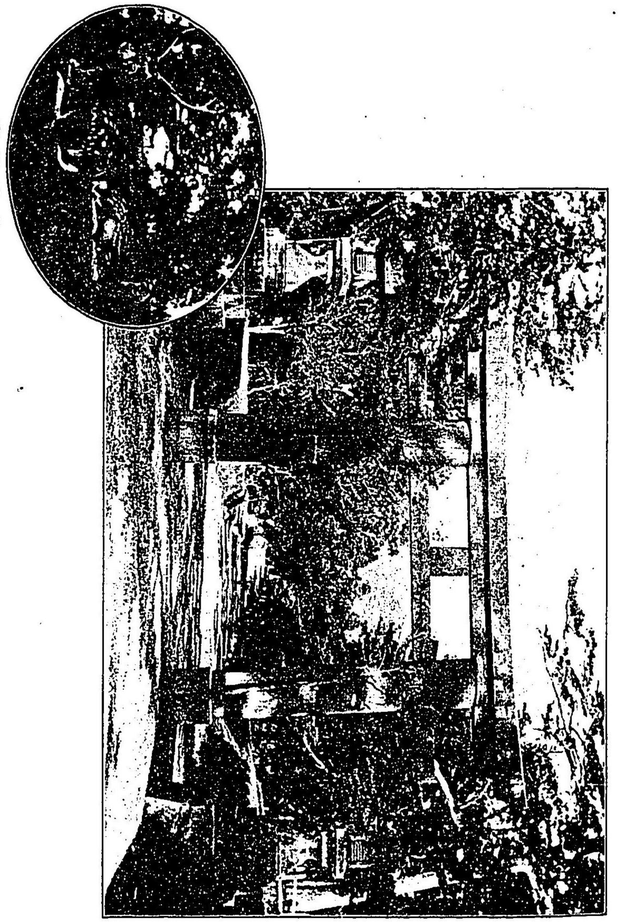
興福寺華原磬

享保十二年三月十一日傳來の華原磬并泗濱浮磬可被備天覽之旨以南曹辨中御門宣誠被仰出其旨別當尊昭權別當光範上洛三月廿九日巳之刻兩磬并妙鐘の像浩涼殿中壇御叡覽也

（興福寺年代記）

正倉院御物の外に忘るべからざる當代鑄銅の名品は、興福寺の鉦鼓並に鐃なり。これを華原磬と名づけしは、華原は支那の名石を產する地名にして、其の石にて作りし磬の世に賞せられしより起りしものなり。されど此の物たる全く鉦鼓にして磬に非らず、唯其の佳名を取りて假りに負はしめたるものなるべし。高さ六尺二寸五分ありて、全體銅鑄物なり。金鼓は四つの龍のからめる中につるされ、中央の柱は狛犬の背に由りて支へられたり。其の形狀よく整ひ鑄造亦巧にして、實に端嚴にして雄麗なる趣を顯せり。

（日本美術略史稿）



華原磬

鹿野日華

冷承三年二月八日丙申天晴今日春日祭也……近衛使自南門退出舞人等於此處懷中冠騎馬取松明作法如恒至于一鳥居邊參入之時未及二鳥居五六町前驅取松明馬副二人張口隨身二人雜色六人各取松明在馬後參入之間興福寺東北邊並二三十頭迎來前行至于二鳥居邊退出之時又四五頭自二鳥居至于一鳥居云々此事極吉祥也有盛歟　（山槐記）

禁制

一春日山内諸屋亂妨強盜事

一於山内甲乙剝取事

付自寺内至社頭并野田高畠出入遊亂事

一神鹿殺害山林伐用事

右條々令停止訖若有違犯之輩者速可被處罪科者也仍下知如件

永祿十年十一月　日

義　澄　（三好左京太夫）

滋佛の日に生れあふ鹿の子かな　芭蕉

鹿を追ふ獵師なければ奈良の町　閒屋酒舟

西も東も山を見るかな　蜀山人

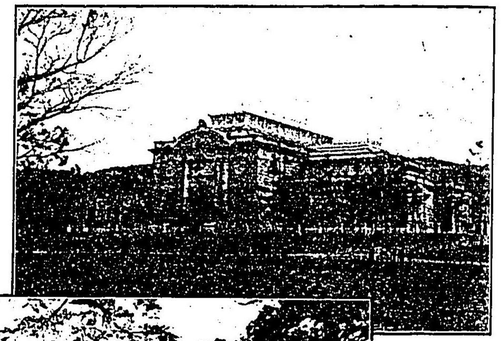
春日野の飛火のどもり出でゝ見よ

いいいくかありてわわわかなつまん

行く人のくはへ煙管の吸殼も

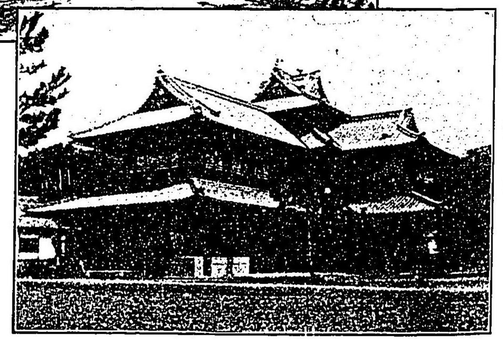
横に飛火の野邊の春風　梅園靜嵐

子に臥して鹿におこされ奈良の宿



博物館

物産陳列所



倶樂部

古梅園のぬしは古き知己なれば
其墨のほまれを賞して　貞　柳

月ならで雲の上まですみの煙る
これはいかなるゆえんなるらん

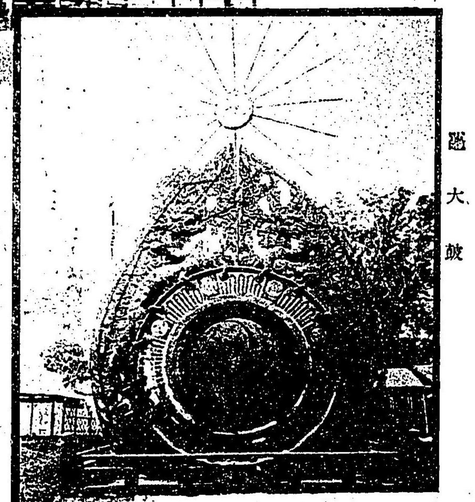
天正八年九月廿六日淵川左近丞
惟任日向守滞留中ニ安土へモ両
人へモ菓子結構ニ令用意被遣其
外両人ハ大油煙廿挺又霜酒以下
度々音信有之　（妙喜院宗英記）

奈良團扇もとの都の風ぞ吹く　袁　立

元直にも奈良の物とて澁々に
手をうちは賣捧々商ひ　雲樂齋

奈良漬は奈良に限らず何處でも
かすがあるから奈良漬といふ　鵜柄仙口

春日本社



鐘大

春日社南門

華大蔵……口徑は七尺にわたり胴部を黒塗となして龍と鳳凰の彫刻を表裏につくることに後の世のよくし難き風致をも具へていとめでたく造られたるものなり尚同社に蔵せる他の類とよせ見る時は優に勝れる夫等の音の古く祭の庭に神の御霊み慰めまつりてなほ春の晨伶人が衣手に散る花に和しあるは月の秋にあはれ人の心み澄ましめしなと思はれてさらに溫古の情趣たゝ難かるものあり（國華）

春の日も光ことにや照すらん
玉くしのはにかゝる白ゆふ　藤原俊成

春日山水屋の水の末までも
神にまかせて身を頼む哉　衣笠大臣

めつらしやけふの春日の八乙女な
神もうれしと思はざらめや　藤原忠房

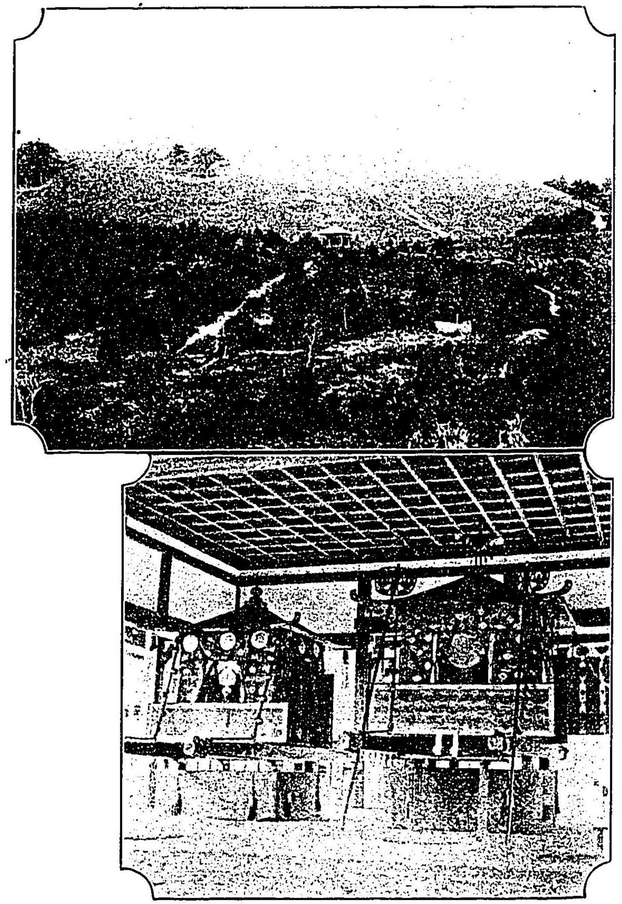
大杉

鶯瀧

昨日こそ年はくれしか春霞　山邊赤人
春日の山にはや立ちにけり

名のみして山はみかさもなかりけり　紀貫之
朝日夕日のさすに任せて

三笠山春は音にて知られけり　西行法師
氷をたゝく鶯の巡



嫩草山

鳳凰殿　手向山神社

今も猶要やこもれる春日野の若草山に霞のな〜　崇尊親王

神々と春日茂りてづゝら山　鬼貫

「春日野の飛火の野守出でゝ見よ、彫さす月の三笠山、薄雲かゝる藤山のわかむらさきの名にしおふ木々の梢ものどかなる春の日影ののどけさよ「二月の初申なれや春日山「峯もよむまで、いたゞきまつれや佐保姫の袖もかざしの玉かづら「かけてぞ祈る春日野の「若草の山、水屋の御彫「みどりもめぐみも春たつ雲の羽袖なかへすや山かづら　（謠曲）

來十六日可有東大寺八幡宮神輿路次警固事
可敬仰遣武家之旨天氣所候也

左大辨忠光

西園寺大納言殿

三月堂本尊

二月堂

三月堂

南都東大寺の法華堂は聖武天皇時代建築の遺物なり其外形は古來屢修繕せられて多く古式を失へりと雖其内部は依然として千餘年の面觀を存し柱、組物、虹梁、天井の手法悉く當代の嗜好を表示し其の構架亦能く當代建築の眞相を現せり

（美術畧史稿）

水取や籠りの僧の香の音　芭蕉

水取や非をうち回る僧の息　一茶

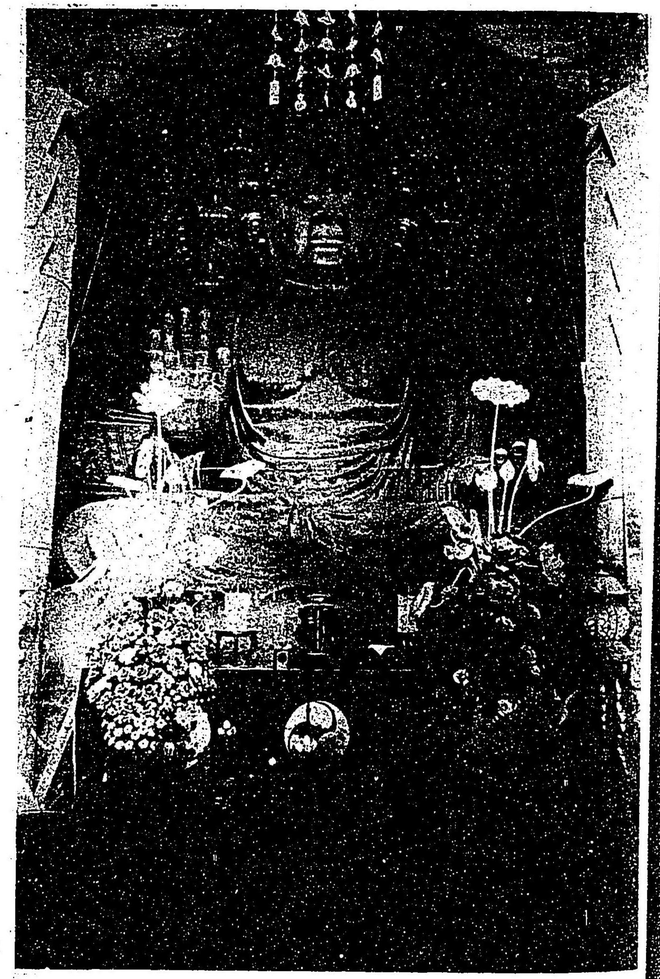
水取や瀬々の温ひも此日より　蕪太

大佛殿

殿佛大

奈良の諺に曰く勢は東大寺形は平等院隣は園城寺といふ　（寶文記）

總木數合二万六千七百二十三本
此代銀三千九百七十四貫六百三十一匁六分九厘
此金六万六千二百四十三両三分銀六匁六分九厘
大佛殿大虹梁十三間物二本ノ内
松一本長十三間物　元口　四尺三寸
末口　三尺三寸七分五厘
丈ニシテ八丈四尺五寸　（大佛殿再興記錄）



奈良大佛像

金銅盧舎那佛像一軀　結跏趺坐

高五丈三尺五寸　面長一丈六尺　廣九尺五寸　完髮（肉髻イ）高三尺
眉長五尺四寸五分　目長三尺九寸　鼻長三尺二寸　口長三尺七寸
頤長一尺六寸　耳長八尺五寸　頸長二尺六寸五分　肩徑長二丈八尺七寸一分
胸長一丈八尺　臂長一丈九尺　肱至腕長一丈五尺
掌長五尺六寸　股長一丈三尺　腰長二丈三尺八寸五分　膝前徑三丈九尺
膝厚七尺　中指長五尺　足心（下イ）一丈二（三イ）尺
螺形九百六十六個　高各一尺二寸　徑各六寸
銅座高一丈　徑六丈八尺　上周廿一丈四寸（尺イ）　基周廿三丈九尺
石座高八尺　上周三十四丈七尺　基周三十九丈五尺
用熟銅七十三万九千五百六十斤　自鍍一萬二千（千イ）六百十八斤
鍍金一萬四百卅（五十イ四十イ）六兩　水銀五萬八千六百廿兩
炭廿（廿一イ）萬六千（六千ナシイ）六百五十六斛

備考　實測寸法の前記と異なるもの及び漏れたるもの左の如し　（朝野群載）

鼻前徑二尺九寸四分　中指周三尺二寸　手掌幅六尺八寸
同高一尺六寸　同長五尺八寸　右御手頸周一丈三尺五寸
耳長八尺五寸　小指長四尺四寸　右御足裏直徑一丈
股長一丈八尺　無名指長五尺三寸　同大指三尺二寸
左御手大指周四尺八寸　頭指長五尺四寸　同周四尺二寸
同長四尺四寸　手掌六尺五寸六分

東大寺彌勒菩薩木像

戒壇院四天王塑像

東大寺華嚴五十五所繪卷

四天王像　　東大寺戒壇院

此四天王像は塑像にして各高さ五尺四寸あり四体とも同時代の作にして……何れも一様の名作なり。又四体とも皆彩色を施されしものなれども今は剝落して僅に其痕を留むるのみ、又眼睛には黑曜石を欵せり。

（美術畧史稿）

金剛力士大佛師康慶法眼注進云、二王作者總大佛師運慶金剛運慶、力士淸慶但子息等加造手

（東寶記）

正倉院

南大門

鏡池

正倉院

小杉榲邨

さてこの寶庫の構造は南より北へ三區にして總長十七間はかり一かまへのひろさ凡五六間奥ゆき五間はかり二階造りにていと高き瓦葺なり下の板間の裏より敷地石ずゑのわたりまで八九尺も有りぬべし外部より見れば床の下の高き非俗に中二階などいふものゝ如くこれを以ても其したゝかなるを思ひはかるべきなり……さて其樣式の大畧をいはんに三稜の大材を疊みかさねて外部はあだかも御箱といふものゝ形したるを四隅は非樓といふものゝ如くあせ合せたればこれをあせくらもいふなり既く藤貞幹の好古小錄に校倉は烈日にあたれども土蒸の氣なく又雨にあひても濕氣を含まず故に其藏むる所のもの數百年を經といへども魚食の患なし古人の遠慮往々此の如しといへるは實に然り

新藥師寺本尊藥師如來

般若寺額

般若寺十三重塔

新藥師寺は東大寺の末寺也聖武天皇御眼を煩はせ給ひし時光明皇后御祈願の爲造らせ給ひ天皇御眼の病忽愈させ給ふ依之本尊如來の御目もきら〳〵敷作らしめ給ふといひ傳へしと

（和州寺社記）

賴山陽

門巍般若寺猶存。
猶思延秋避戰奔。
貝葉應爲裝五色。
眩迷肉眼護龍孫。

先考宋人行末者吳朝明州住人也而來日域經歲月即大佛殿石壇四面廻廊諸堂垣塀荒……三年建立一丈六尺石卒都婆二基以一本廻過去慈考以一本現在慈母……弘長元年辛酉七月十一日伊行吉

（笠卒搭婆銘）

96-209

大和巡

目錄

總説　大和巡遊概説　頁一

奈良　五

奈良公園　春日神社　七

猿澤池　九

興福寺　一〇

金堂　新能　南圓堂　北圓堂　東金堂　五層塔　東室（寶物）　大湯屋　大御堂（十三鐘）　八重櫻　一〇

奈良帝室博物館　一五

氷室神社　一五

春日神社　一六

一の鳥居　春日野　淺茅原　春日若宮御旅所　物產陳列所　俱樂部　車舍屋　二鳥居　殿戸神社　答到殿　白藤池　春日若宮　手水屋　若宮祭殿　春日本宮　祭殿　寶物　水谷川　洞紅葉　氷池舊趾　水谷神社　月日の磐

三笠山　一三

大杉　蟠蟠窟　本宮神社　七本杉

春日山　一三

中水谷　上水谷　盤瀧　高山神社　春日大杉　泥阪街道　石佛

嫩草山　一三

武藏野

手向山神社　一三

東大寺　一四

三月堂　二月堂　開山堂　三昧堂　鐘樓　大湯屋　大佛殿　本尊大佛　銅燈籠　鏡池　東南院（寶物）　南大門　眞言院　勸學院　戒壇堂　轉害門

正倉院　三〇

公園外社寺名勝　三一

佐保川　殿若寺　御陵　極樂院　元興寺　十輪院　瑞城寺　福智院　頭塔　新藥師寺　百毫寺　名家遺人遺跡

奈良郡山附近

興福院、不退寺、海龍王寺 三七
法華寺 三八
大極殿址 三九
諸陵六 四〇
秋篠寺 四〇
西大寺 四一
菅原 四二
菅原神社 菅原寺 垂仁天皇陵
唐招提寺 四三
藥師寺 四五
大安寺 四七
郡山城址 四七
富小川附近 四七
松尾寺、矢田寺、竜山寺、玉龍寺、長弓寺

法隆寺附近及生駒谷

法隆寺 四九
南大門、中門、金堂、五層塔、講堂 五〇
上御堂、西圓堂、聖靈院、綱封藏(寶物)、食堂、東院、夢殿、武殿院、舍利殿、佛法堂 五四
中宮寺 五五
法輪寺 五五
法起寺 五五
廣瀨神社 五六
龍田川 五六
達磨寺 五六
龍田神社 五七
信貴山朝護孫子寺 五七
生駒山寶山寺 五八

月瀨

圓成寺、柳生、神野寺、來迎寺 五九

上街道

帶解、櫟本 六一
丹波市 六一
石上神宮 六二
大和神社 六三
柳本、纒向、三輪 六四
大神神社 六五
長谷寺 六六

宇陀地方

室生寺 六八
櫻井、飛鳥、畝傍附近 六九
櫻井、安倍文殊院 七一
談山神社 七二
飛鳥附近 七三
岡寺 七三
橘寺 七四
弘福寺、飛鳥大佛 七四
向原寺 七五
天香久山 七六
耳成山 七六
八木 七七
畝傍山 七七
神武天皇陵 七七
橿原神宮 七八
久米寺 七八
益田岩船、見瀨平田邊 七九
高取 八〇
壺阪寺 八〇

高田御所附近

當麻寺 八二
御所 八二
櫛羅瀧、金剛山 八四
一言主神社、高鴨神社 八五
茅原寺、葛 八五
阿田桃園 八六
向原寺 八六

五條附近

賀名生皇居址 八七
榮山寺 八七

吉野地方

吉野山公園　八九
下市、丹生川上下社　八九
六田淀、上市　九一
吉野宮　九一
口の一目千本　九二
金峰山寺　九二
吉水神社　九三
山口神社　九四
如意輪寺　九四
竹林院、中千本、吉野水分神社　九五
金峰神社　九六
大峰　九六
吉野川上流沿岸　九七
妹脊山、宮瀧　九七
國樔、大瀧　九八
丹生川上上社　九九
大臺原山　九九
ぢろ八町　九九
吉野山林　一〇〇
産業　一〇一

附一表

宮趾一覽
御陵一覽
古代建造物一覽
國寶一覽

巡遊順序及日時概定

巡遊順序

(甲)

奈良
奈良郡山附近
法隆寺附近
當麻寺
御所附近
五條附近
吉野
畝傍附近
飛鳥附近
多武峯（飛鳥ヨリ上ル路險）
初瀬
室生
三輪奈良間
月瀬

(乙)

奈良
奈良郡山附近
法隆寺附近（當麻寺ノ次ニスルモヨシ）
奈良三輪間
初瀬
室生
多武峯（或ハ直ニ先吉野ニ出ヅベシ）
飛鳥附近
畝傍附近
壺阪又ハ葛
吉野
五條
御所附近
當麻寺（法隆寺ヲコノ次ニスルモ可ナリ）

日時概定

奈良公園
- 春日大佛　半日餘
- 等社寺
- 三笠山　登降一時間半
- 春日山中　半日以上

奈良公園外社寺諸陵　半日

奈良郡山附近
- 平城宮趾
- 諸大寺　半日以上
- 矢田、松尾、霊山寺等　半日

法隆寺附近
- 法隆寺
- 廣瀬神社　半日
- 龍田川

信貴山、龍田神社、達磨寺　半日

生駒山寶山寺　半日

月瀬笠置　一日

上街道
- 石上、大和三輪三社　半日
- 柳本陵
- 初瀬　三時間以上（三輪櫻井ヨリ往復トモ）

室生寺　一日以上　全上

多武峯　半日　全上

畝傍飛鳥附近　半日以上　全上

壺阪　四時間以上（畝傍ヨリ往復トモ）

當麻寺　三時間（高田下田ヨリ往復トモ）

御所附近　半日

金剛山　一日

葛温泉、阿田桃園　半日以上

五條附近

賀名生　半日

吉野　一日以上

吉野地方

吉野山公園 八九
下市、丹生川上下社 八九
六田淀、上市 九一
吉野宮 九二
口の一目千本 九二
金峰山寺 九二
吉水神社 九三
山口神社 九四
如意輪寺 九四
竹林院、中千本、吉野水分神社 九五
金峰神社 九六
大峰 九六
吉野川上流沿岸 九七
妹背山、宮瀧 九七
國樔、大瀧 九八
丹生川上上社 九九
大臺原山 九九
ぢろ八町 九九
吉野山林 一〇〇

産業

一〇一

附表

宮址一覽
御陵一覽
古代建造物一覽
國寶一覽

巡遊順序及日時概定

巡遊順序

(甲)

奈良
奈良郡山附近
法隆寺附近
當麻寺
御所附近
五條附近
吉野
畝傍附近
飛鳥附近
多武峯（飛鳥ヨリ上ル路險）
初瀬
室生
三輪奈良間
月瀬

(乙)

奈良
奈良郡山附近
法隆寺附近（當麻寺ノ次ニスルモヨシ）
奈良三輪間
初瀬
室生
多武峯（或ハ直ニ先吉野ニ出ヅベシ）
飛鳥附近
畝傍附近
壺阪又ハ葛
吉野
五條
御所附近
當麻寺（法隆寺ヲコノ次ニスルモ可ナリ）

日時概定

（車行最短ノ時間ヲ概示ス）

奈良公園
- 春日大佛
- 等社寺 半日餘
- 三笠山 登降一時間半
- 春日山中 半日以上

奈良公園外社寺諸陵 半日

奈良郡山附近
- 平城宮趾
- 諸大寺 半日以上
- 矢田、松尾、霊山寺等 半日

法隆寺附近
- 法隆寺
- 廣瀬神社 半日
- 龍田川

信貴山、龍田神社、達磨寺 半日

生駒山寶山寺 半日

月瀬笠置 一日

上街道
- 石上、大和
- 三輪三社 半日
- 柳本陵
- 初瀬 三時間以上（三輪櫻井ヨリ往復トモ）

室生寺 一日以上 全上

多武峯 半日 全上

畝傍飛鳥附近 半日以上 全上

壺阪 四時間以上（畝傍ヨリ往復トモ）

當麻寺 三時間（高田下田ヨリ往復トモ）

御所附近 半日

金剛山 一日

葛温泉、阿田桃園
五條附近 半日以上

賀名生 半日

吉野 一日以上

四季の遊樂

梅　月瀬、春日野
桃　阿田、
櫻　吉野、奈良公園
　　初瀬、多武峰
　　柳本陵、郡山城趾
柳　猿澤池、六田渡
藤　春日野、南圓堂
　　葛瀧、橿原神宮、
躑躅　神野山、月瀬
牡丹　初瀬、
若菜　春日山、三輪山
　　吉野山、大和三山
早蕨　數草山、

鮎取　吉野川、
納涼　猿澤、桃尾瀧
　　櫛羅瀧、大瀧
　　靖給瀧、吉野山
　　多武峰、信貴山
　　生駒山、葛温泉
　　榮山寺、五條城山
蛍　佐保川、
月　猿澤池、三笠山
　　高圓山、吉野山
　　五條城山、
虫　春日野、
松茸　矢田山、法隆寺山

鹿　春日野、
　　重坂山、其他各地
萩　春日野、五條城山
紅葉　龍田、多武峰
　　初瀬、奈良瀧坂
　　手向山、洞紅葉
雪　春日山、三笠山
　　金剛山、二上山
　　三輪山、吉野山
　　四時奈良公園吉野公園
　　初瀬山、多武峰
　　五條城山、榮山寺、
　　吉野川、妹背山、
　　柴橋大瀧
どろ八町、室生

年中行事

一月六日—八日　天理教會節會
九日　初瀬佛名會
舊十四、十五日　初瀬會式
舊廿六日　天理教會
春季大祭
舊初午　松尾寺、
　　岡寺
舊一日—三日　法隆寺修二會
二月四日　年越春日
十一日　橿原神宮祭
三月一日—十四日　二月堂
二日—十二日　初瀬法華經千部會
十日—十六日　藥師寺花會式
十二日　水取
十三日　春日祭
十五日　二月黑髭祖師子、
　　春日御田植
廿一日　彼岸矢田寺
室生寺大師忌
廿二日—廿三日　法隆寺聖靈會
若草山燒？

四月一日　大和神社
三日　神武天皇祭
四日　廣瀬龍田祭
舊八日　久米寺練供養
九日　大神神社祭
舊十四、十五日　當麻寺練供養
舊廿三日廿四日　矢田寺練供養
五月二日　東大寺聖武天皇會
十七日　招提寺鑑眞會
六月一日　丹生川上下社祭
八月十八日—廿五日　西大寺光明眞言
九月舊十五日　石上神宮祭
　　彼岸矢田寺
廿七日　吉野宮祭
十月八日　丹生川上上社祭
舊廿六日　天理教秋季大祭
十一月一日　二日鹿角切
十七日　談山社祭
十二月九、十日　初瀬佛名會
十七日　春日若宮御祭
毎月一日　十六日　生駒山寶山寺
毎月初寅　信貴山

大和巡

總叙

第五回内國勸業博覽會　奈良縣協賛會編纂

皇祖神武天皇の日向に居給ふや「東に美地あり青山四周す其地必天業を恢弘して天下に光宅するに足るべし蓋し六合の中心か」と宣らせ給ひ日本武尊の「大和は國のまほろばたたなづく青垣山籠れる大和し美し」と歌ひ給ひしは大和北部の平野を言へるなり。其東西三四里、南北六七里に亘り峰巒四方に繞りて別に一境を開き諸水盡く大和川に集りて土地肥沃禾穀豊熟し戸口繁殖して工商の業亦盛なり。天武天皇の「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」と賞し給ひ平城朝詩人の「高嶺嵯峨として奇勢多く長河渺漫として廻流を作す」と詠せしは南方吉野の地なり。二郡の面積國の三分の二を占め吉野の十二峰其中央を縱斷して山嶽至る處嶮峻を極め山林の業最盛にして多く杉檜の良材を出し水の一半を吉野川に落し一半を北山十

津の二水に分ちて之を熊野川に落せり。平野の東部は東山中とよび其南を宇陀地方となす二地亦自別境をなし諸水皆木津川に入りて淀川となる。國は殆、本邦の中心に位して北は山城に接し西は河内、東は伊賀 伊勢に境し南方の大部分は紀伊に包圍せらる、其面積二百方里、畿内を二分して殆と其半を有せり。

史上の事蹟に至りては此國殊に顯著なるものあり、殆日本史上古の一半を占領せり。神武天皇の日向より東征して群兇を討滅し給ひ橿原に宮柱太しく立てゝ皇基を定め給ひしより列聖のこの國に都し給へるもの前後二十餘に及びぬ。四道將軍を置き熊襲蝦夷を征して國威を伸張し給ひしは磯城、纒向の宮の朝なり。文藝始めて韓國より渡來し工藝亦著しく進歩したるは輕、泊瀬の宮の朝なり。小墾田の朝には聖德太子出でゝ佛法を興隆し給ひ始めて支那と交通を開き飛鳥の朝には中臣鎌足出でゝ逆賊を殲し大化革新の基をなせり。淨見原、藤原の御代には制度の改修歩を進め平城の御代には始めて大規模の都城を仰ぎ文物亦燦然として觀るべきものありき。此間千四百年、時に帝都を他に遷されたるものなきにあらざれども久しく政教文物の中心にして內外の屬目する所なりしかばヤマトの名は遂に日本全國の大號にも用ゐらるゝには至りしなり。平安遷都の後政治の中心は北に移りしも古國の威靈は猶長くこれを失はず、河內は既に久しく我弟の如くなりしに山城はこゝに我子たるの觀あり、其地域相接するを以て其關係父たる日向叔父たる出雲よりも親密なりき。武家の世に推移するに及び緇衣の徒干戈にたづさはり南北朝の亂の際には吉野の山南朝の行在所となり山の險と人の患と五十餘年の皇運を保護したりき。戰國の世に至り筒井順慶各地に割據せる豪族を統一して國の大部を支配し豐臣秀長代りて和泉紀の三州を領せしが德川氏の世に及び太平三百年小藩境を接へ幕末天誅黨の亂ありし外事の言ふべきものなくして以て明治の維新に及べり。

祭政の一致は我國上古施政の綱領なれば敬神の事蹟は列聖にこれを仰ぐ。神武天皇島見山に霊時を設け給ひ崇神天皇笠縫邑に神器を祭り給ひしより大社巨祠の創設最多く延喜式の載する所、二百八十六、全國の十の一餘を有して其數第一位にありき而して今猶十の官幣大社あり。佛教欽明の朝に渡來せしより朝廷の尊崇最厚く蘇我稻目が

尚原の家を捨てゝ佛寺とせしを始めとして伽藍の創立歴代相踵ぎ平城朝に至りてその盛を極めぬ。飛鳥の三大寺今や其昔を見ずと雖、平城の七大寺猶其五を存し幾多の古伽藍世人の信仰厚きもの亦少からず。

我國山川風土の美は國民固有の美性靈腕を陶冶し加ふるに韓唐技術の長所を鎔化してこゝに我國美術の精粋は發揮せられぬ。而して其非常に發達したる時期の帝都は大和に在りしかば文物隆盛の美觀は皆この一國に聚められたるが如し。中にも法隆寺藥師寺を始め千年以外の建築を存するに至りては天下獨大和あるのみ。これ等の寺院また最多く優秀の佛體精巧の寶器を殘し當時美術極盛の一斑を窺ふべきものあり。殊に正倉院の如きは平城朝の服飾器具儼乎として當時のまゝに存するあり亦驚くべからずや。山水秀麗にして氣候温和に禾穀豐饒にして森林鬱茂せる天與の美國は飾るに吉野、月瀬の花を以てし彩るに龍田、談山の楓を以てし三笠山上の月、葛城峰頭の雪、清趣時に隨ひて生するものあり。況んや宮趾陵墓項背相接し巨洞大刹前後相望み山河到る處に千年の歴史を語り風物自高崇の感興を喚ばざるはなし、人は言ふ、日本は世界の公園なりと、而して大和は日本の公園なり。人は言ふ、日本は世界の寶庫なりと而して大和は日本の寶庫なり。

大和巡遊概説

大和は名勝の國なり歴史の國なり宗教の國なり美術の國なり巡遊の目的人によりて自異なるべしと雖何人も先足を入れざるべからざるは奈良の地なり。春日山を包含する本邦唯一の大公園は山川景勝の賞すべきもの多きのみならず春日社東大寺興福寺等の天下に聞ゆるあり、優秀なる美術の社寺博物館に求むべきあり、少くも此地に一日もしくは二日を費すべきなり、更に半日を費さば平城宮趾に昔を忍びて西郊に眞言律宗の本山なる西大寺、天平時代の大建築を存する律宗の本山唐招提寺、天智時代の三重塔を存する法相宗の本山藥師寺等の伽藍を巡拜するを得べし。奈良の西南三里餘に法隆寺あり亦法相宗の本山にして千三百年前の建築を存し佛体寶器の優秀なるもの擧げて數ふべからず。其西に龍田あり紅葉を以て著れ附近廣瀬、龍田の二大社あり又信貴

山、生駒山に上るべし。奈良の東七里に月瀬あり梅花を以て稱せらる。奈良を南すれば五里にして三輪に至る天下最古の神社と稱する大和の一の宮大神神社あり。石上大和の二社はその途中に拜すべきなり。三輪より東に入れば一里半にして長谷寺あり新義眞言宗の本山にして世人の信仰厚く其東四里に室生寺あり亦名刹なり。三輪の南に接して櫻井あり其南一里半を上れば多武峰にして關西の日光の稱ある談山神社あり。櫻井の西方一里半に畝傍山あり皇祖が雄國の大業を建て給ひし靈地にして橿原神宮、神武帝陵を始め古陵宮趾相連れり。東南一里を距る飛鳥の方面古跡亦最多く岡寺、橘寺の二寺あり、南方一里に高取あり壺阪寺は其南なる山上にあり、西方一里半に高田あり中將姫の曼荼羅に名高き當麻寺は其西なる山麓にありて天平時代の雙塔を遺せり。鐵道高田より分岐して五條に至る、附近に天平の堂宇を存する榮山寺、賀名生皇居趾、阿田桃園等あり。櫻花と史蹟とを以て天下に鳴る吉野山は奈良を距る十一里の南方にあり。今公園となれり必遊展を着けざるべからず。これ等奈良以外諸名勝の大概を通覽せんには馬車人車の便あるを以て平野地方は僅に二日もしくは三日を費して足るべしと雖月瀬、室生、吉野、五條附近等に至らんには更に各一日を加へざるべからず。此他猶社寺陵墓の多き名區史蹟に富める仔細に之を探討せんには幾旬の日子も猶足らざるの感あるべし。

大和の國をおもひて詠める　眞淵

神ろぎの、神の御代より、天つ嗣、日つぎしらしゝ、御まの尊、わが大君の、とつ乙とは、
をゝしゝたけく、うちたば、直くたひらに、見し給ひ、きこし給へば、八十國も、いよ
ゝ眞廣く、百の臣も、いや榮はえさ、空みつ、大和の國は、白雲の、とにたちわたり、山見
れば、山いや高し、里見れば、里たひらけし、春花の、うらぐはし國ぞ、こゝをしも、うべ
敷きましき、八十國は、うべも榮えつ、古の、其いづみ代の、たりみよを、今も見るかも、
日高見の國を

おほたからわが心さへゆたけしもやまと國ばらはる見てしより

奈良

綠樹翠鬱たる春日山は東方に聳えて温乎たる嫩草山と相並び市街山麓に軒を連ねて堂

塔祠宇樹林の間に隱現し景色の絶佳なる一幅の畫圖を展ぶるが如きものこれを奈良となす。この地二千餘年前既に開化天皇の都を定め給ひしことあり、平城朝の時に當りて西郊一面の地に未曾有の大都を構へられしかばこの邊は都邑の一隅に屬し大祠巨刹の境域となりて社家僧坊軒を接し優秀の山容地態は神祇佛陀の威靈を保護して別に一天地をなせり。平安遷都以來都城の建築大方は跡を留めざりしも東方社寺の境域は依然として舊時の面影を存し威嚴儼然として猶永く朝廷權家の尊崇を絶たず、南都の名空しく存して北嶺と相對稱せられぬ。應仁の頃までは猶田舍の狀態に過ぎざりしが後民戸も次第に增加し工商の業を營むものさへ多くなりて一市街を形づくるには至れるなり。筒井順慶大和を領し中坊氏をして政刑を掌らしめしより德川氏の末に至るまで奉行所の支配に屬せり。維新の後所管屢變更せしが明治二十年奈良縣を再置せられ大和一國の治所となり工商の業亦日に發達するものあり。況んや近時美術を論じ工藝を說くもの日に盛なるに方り千古優秀の建築彫刻等を多く存せる奈良は名勝古跡を以て著るゝ外更に我邦に於ける美術上重要の地位を占むるに至り既に帝室の博物館をさへ開設せられぬ。しかも維新の當時は佛法破壞の刼風に建築彫刻の失はれたるもの數を知らず、興福寺の五層塔をさへ一炬に付せんとしたることありといふ。今の盛況に思ひ比ぶれば實に世を隔てたるが如き感なくんばあらざるなり。

奈良公園　春日神社

奈良公園は春日山を包含して面積五百町の外に出で春日神社は三笠山を合せて面積百餘町地域相接し景勝相依り自一境をなせり。春秋の風色は猿澤池畔に柳櫻をこきまぜる、春日の境內に紫の藤波の匂へる、水谷溪畔手向山邊に紅葉を染め出せる皆時に隨ひて賞すべく春日野に千年の老杉根を交へ神鹿優々として遊べるが如きは一種言ふべからざる神韻を認むべく嫩草山の綠草氈を敷けるが如き處に徜徉を試むる亦最妙なるべし。一步山中に入れば到る處幽邃淸冷或は近く大杉蝙蝠窟等を探るべく或は遠く鶯瀧に塵氣を洗ふべし。神社は春日の外又手向山、氷室あり寺院には東大寺、興福寺諸堂あり博物館正倉院官衙學校等皆收めて其中にあり、境域の廣き規模の大なる天然の

美と人工の妙と相映發して人をして無限の感興を起さしむるもの天下何れの處にか比儔を求むべき。今は先程を猿澤池に起してこの形勝を探らむ。

猿澤池（奈良停車場の東九町）

猿澤池は周回百八十六間、乃字の狀をなし柳樹四邊を繞り、興福寺の堂塔を見添へて風景頗佳に月色は奈良八景の一に數へられたり。多く魚鼈を養ひ餌を投ずれば群り來る。其西邊に采女社あり、平城朝に仕へたる采女の寵衰へて身を投じたるを祭れりといひ其時衣を掛けたりとて衣掛柳の名を殘せるもの東岸にあり、大和物語に記せる傳說なり。

興福寺

興福寺は猿澤池の北方にあり。藤原氏の始祖大織冠鎌足、蘇我入鹿を誅伐せん祈願の爲、丈六の釋迦を作り夫人鏡女王山城の山階寺を建立し給ひ天武天皇の朝に高市郡の廐坂に遷し建てしが平城の朝に及び鎌足の子不比等更に勝地を卜して今の處に大伽藍を造營し藤原氏の氏寺ともはしたりしなり。其初めは境内方四町あり昌泰の頃僧堂塔雜舍百七十五字を有したりといふ。藤氏の繁盛に伴ひ朝廷の東大寺を興隆し給へるに對して一門の尊敬を集め伽藍の宏大莊嚴なる人目を驚かせりしに爾後屢風火雷震の災厄に罹り且は中世以降一山の僧徒富勢を恃みて干戈を執り爲に兵燹に罹れることさへありて其興廢一ならず。今は境内縮小して堂宇亦多くは廢滅したるも猶優秀なる佛体寶器を存し現に法相宗の本山たり。

金堂は興福寺境内の中央にあり不比等の創始する處なるも屢火災を經て今のは假建立なり、釋迦如來を本尊とし脇士日光月光菩薩四天王立像の外に法相六祖坐像（善珠、立賢、行賀、喜操、常騰、信叡）釋迦如來坐像、帝釋天、多聞天立像等を安す。金堂の北方に講堂趾あり南方に南大門趾あり。

薪能　往昔毎歲二月七日より七日間、南大門の前庭にて春日神事の猿樂を演せり。庭上薪を積みて篝となすなもて薪能の名あり。幕府の時は能料として三百石を充てられ頗盛なりき。

南圓堂　弘仁四年藤原冬嗣（不比等の曾孫）の遺願によりて創立する所。今のは寛保元年の造立にして八角造り一面三間二尺五寸あり。西國三十三所の第九番にして不空

羂索觀音座像を本尊とし春日大佛師實眼作と傳ふる四天王、安阿彌作と傳ふる千手觀音立像及び、阿彌陀如來坐像等を安す。堂前の藤花は奈良八景の一なり。其北方に西金堂趾あり。

三重塔は南圓堂の南方一段低き處にあり、康治二年鳥羽天皇の皇后待賢門院の本願によりて建立する所、今猶創建のまゝに存し內陣の佛畫堂內綵繪の模樣等猶當時壯嚴の面影を見るべきものあり。

北圓堂は南圓堂の北方にあり、養老五年元明元正二帝、右大臣長屋王に勅して不比等追善の爲に造營せしめ給ひしもの、今のは寛治六年の再興にして八角造り、一面二間三尺あり。境內最古の建築にして三重塔の建立に先だつこと五十年。其建築藤原時代に於て優等のものに屬せり。本尊彌勒菩薩、釋迦如來坐像は定朝の作と傳へられ四天王立像は延曆のものとなす。

東金堂　金堂の東方にあり、西金堂は之と對して南圓堂の北にありしなり。神龜三年聖武天皇太上天皇の御爲に創始せる所、今のは應永三十三年の再建にして本尊藥師如來兩脇士銅像、梵天帝釋、十二神像、運慶の作と稱する四天王、維摩文殊像等を安す。

堂前の花の松は高さ十四間、東西十八間、南北二十二間に廣がれり

五層塔　天平二年光明皇后の創立し給ふ處にして今のは應永三十三年の再建に係り東金堂と共に能く東山時代の趣味を發揮せるものといへり。高十五丈一尺。方四間五尺。

東室は興福寺事務所にして寶藏あり。彫刻の優秀なるに釋迦十大弟子六軀、八部衆八軀あり。皆乾漆にして建陀羅國の佛工文答師の作と傳へられ世親無著の二像最寫生の妙を得たり。其他春日大佛師定慶の作と傳ふる金剛密迹二力士の雄健なるあり、空海の作と傳ふる板彫十二神將の奇古にして比類罕なるあり、康辨の作に係る龍燈鬼、天燈鬼の巧妙なるあり、釋迦如來地藏菩薩、聖觀音の立像、厨子入彌勒菩薩座像等の優秀なるあり、佛畫に絹本の二天王像と慈恩大師像あり。銅器にして古來最有名なる寶器を華原磬となす天平六年文答師の來朝せる砌其國王の獻する所といふ。鉦鼓にして

龍を飾れる臺に釣られ其作頗る精妙なり。銅燈臺扉は南圓堂のものにして銘文は橘逸勢の筆と稱し一説に空海の筆といへり。銅鐘は元觀禪院のものにして神龜四年の銘あり、其他有名なる泗濱浮磬、境内より發掘せる銀椀、古版木、古文書等貴重の寺什擧げて數ふべからず。

大湯屋は東室の南方にあり應永年間の假建にして屋内に口徑四尺五寸、胴廻六尺一寸、高さ四尺一寸、厚二寸五分の大釜あり、一つは外にありて土中に埋れたり、元、興福寺僧徒の浴室にして又衆議所たりしなり。

大御堂　菩提院といひ俗に十三鐘といへり。往還を隔てゝ南方にあり。天平年間僧正玄昉の建立にして今のは應永年間の再建とす。十三鐘とて寺僧勤行の合圖に六ッ時と七ッ時とに打ちし鐘は此處にありしを今は南圓堂の前に移せり。十三歳の子が石子詰にあひしといふ俗説は妄誕なり。

興福寺の北方なる裁判所はもと興福寺別當一乗院門跡の住房たりし所、縣廳は勸學院のありし所なり。師範學校は觀禪院の舊趾にして門内なる八重櫻は東圓堂の趾に空しく「古の奈良の都の」名殘を留めたり。師範學校の東の街道に猿澤橋、雲井阪あり共に奈良八景の一に數へらる。

奈良帝室博物館

奈良帝室博物館は明治二十五年六月初めて工事に着手し廿七年十二月竣工せり。總坪數四百六十四坪餘、中央館一室、左右館二室、長方形六室、方形四室を有し歴史、美術、美術工藝の三部に分れ古社寺の寶物名家の逸品を陳列す。殊に古代の彫刻物に至りては遺品の多き此國の上に出づる所なきを以て其陳列せらるゝもの皆優秀ならざるはなし。域内に春日の二基の塔址あり東なるは藤原良房（或は云ふ烏羽院）西なるは藤原忠實の建立に係れり、此邊古の飛火野の地にして烽火を置きし所といふ。

氷室神社

博物館の北方にあり仁德天皇鬪雞稻置大山主命額田大中彦皇子を祭る、仁德天皇の御世額田大中彦皇子都介野に遊獵して氷室を見給ひ鬪雞稻置大山主を召して問ひ給ふ所あり氷を齎し歸りて天皇に獻し給ひしは朝廷献氷の始なり、爾後毎年鬪雞の氷室より

献氷するを例とせり。和銅三年遷都に及び氷室を吉城川上卽氷池の舊趾に設け神殿を其傍に作りたるもの是本社の創始にして貞觀二年今の地に遷坐せるなり。寶物に陵王面あり。

春日神社

春日神社は三笠山の麓に鎭坐ます官幣大社にして西、一の鳥居より東三笠山の全部を合せて境内に屬せり。其鎭坐の年代に就いては異說頗多けれども今の處に社殿の創建せられたるは神護景雲三年なるが如し。第三殿枚岡神は殊に藤原氏の祖先なれば一門の氏神として尊敬を集め歷代帝王の行幸さへありて社頭歲を逐ひて繁榮し中世武家の八幡社を尊奉せしより兩社を伊勢神宮に合せて三社と稱し一般の信仰亦薄からず。本社は一の鳥居を距る十餘町の東にありて南面し若宮は其南にありて西面せり。深く人界を離るゝにあらねど樹林鬱茂して神靈の尊嚴を感せしむること他に多く類を見ず。

春日野は一の鳥居より三笠山、嫩草山の麓に至る一帶をよぶ、路の右傍は淺茅原にして小亭の設けあり其東圓窓亭邊多く梅樹を植ゑ、雪消澤は其近傍にありて若菜摘みけむ名殘を留めたり。路の左傍には春日若宮の御旅所、物產陳列所、倶樂部等あり、一歩進むに隨ひて老杉枝を交へ群鹿友を呼び境愈幽に景愈妙なり。先路の右傍に建物を見るは車舍屋にして貴族御社參の時車を置く所、二鳥居を過ぎて左に被戸神社あり、社前の石燈籠は被戸形と稱し名品の一なり。石燈籠は社殿に近づくに隨ひて多く或は古に或は雅に風致を添ふるもの少からず、近時幾分を減じたるが如きも其數猶二千に近しといふ、毎年節分の夜盡くこれに燈を點す頗美觀なり。着到殿の邊より右に入れば社内を流るゝ御手洗川を引きて落せる白藤瀧あり。其入口の左側に雲卜の銘ある燈籠あり亦名品の一なり。

春日若宮は天兒屋根命の子天忍雲命を祭る。長承四年の創立にして前に拜屋あり其前なる拜殿は又神樂所ともいひ白衣緋袴の巫子常に祇候して優美なる倭舞を奉奏する所なり。

手水屋　若宮の南なる石階の下にあり、御供所にして大國主命と其妃とを祭れり。俗

に走元の大黒とも夫婦大黒とも呼べり。神木燈籠は手水屋の東なる路傍にあり、保延年間攝政關白藤原忠通の寄附する所といふ。若宮と本宮との間にある燈籠を御間形といひ火屋だけは木をもて造れり。三笠山に上らんには若宮より奥に入るべし（二十頁參看）

●若宮祭禮は世に御祭と稱し。保延三年關白藤原忠通時の饌饗を遂ひて祭禮を執行したるが始めにて幕府の世には祭祀料玄米二百石を賜はり御旅所を作る假殿の用材實の鳥獸等は大和全國より賦出し祭儀の行列には國中の諸藩旗本皆加はり古來頗る大なりければ「保延祭は見事な事よ」の童謡を傳へたり。祭儀今は十二月十七日に行ふ、猶古式を換して遠近の人來集し社頭の雜沓いはんかたなく私祭なれども當國第一の大祭たり。

●春日本宮　南門を北に向ひて入る。左方の廊下に小春日神社あり、これ本社創建の前より鎭坐せる地主神なれば本社造營の際には先これまをりするを例とすといへり。門を入れば正面なるを幣殿といひ勅使奉幣所にして直會殿といふ。こゝに鳴蟬燈籠とて釣金に蟬を附着し回轉すれば蟬聲を發するものあり。社内の結構廻廊の如きも地盤の自然に隨ひて高低あり、殿宇は屢修造を經たるも其形式古態を存し其配置亦頗趣致あるを見る。本殿は樓門の内にありて四社相並べり。第一殿は東方にありて武甕槌命を祭り常陸鹿島より御遷坐、第二殿は經津主命を祭り下總香取より御遷坐、第三殿天兒屋根命、第四殿比賣神は河内枚岡より御遷坐ましませり。樓門なる鬼形の釣燈籠に慶長十八年の銘文あり、樓門前の木柵は稻垣といひ、田植神事に稻を掛くる所なり。大宮の西方にて直會殿の北に續けるは大宮造營の時の遷宮所にして遷殿とよび大宮の西廊に懸れる登廊は斜方形に作りなして捻廊架といひ、今のは左甚五郎の作と傳ふるものなり。

●祭禮　嘉祥三年始めて本社の祭禮あり。貞觀元年以來春二月と冬十一月何れも上申日に執行せられ申祭と稱し儀式加茂の祭に同じかりき。明治十九年以後三月十三日に定められ祭儀舊に復し勅使參向ありて頗壯嚴を見る。

●寶物は祭器に鐙大鼓一對、木造舞樂面皇仁、新鳥蘇、地久、納曾利、皇嵯八仙、を始め多く舞樂の裝束樂器等あり。武器に友成の作に係る赤銅造太刀、耳木菟短刀、菊作短刀、源義經の所用と稱する籠手一雙、又其寄附に係るといふ兜及び緋威甲冑等あり。

回廊を出でゝ北すれば水谷神社に至る。素戔嗚命外二神を祭れり、昔時は毎歳四月鎭花祭典ありて神樂及能藝ありき。水谷神社の後を流るゝは水谷川にして春日山中上水谷に發源し下流は東大寺南大門前を流るゝ吉城川となる。橋を渡りて北すれば嫩草山にして直に右すれば洞紅葉なり老樹溪流を覆ひ綠蔭夏を知らず紅楓秋を愛づべし。其東に氷池の舊趾あり、これ古氷を結ばしめたる處にして六月朔日朝廷供御の料としたるものなり。此處に日月の形を刻める磬あり、月日の磬といふ。春日山中に入らんにはこれより東に上るべきなり。（二十一頁）

三笠山　大杉、蝙蝠窟、七本杉、

安倍仲麿の詠歌に名高き三笠山（御蓋山）は其形の笠に似たるよりよべるなり。これに登らんには若宮より奥に入る。二町許にして紀伊神社あり、こゝに奥院形と稱する燈籠を据う。行くこと四町ばかりにして大杉あり。周り三十尺高さ六十二尺ありて頗壯觀なり。又上ること三町許、右に少し入れば蝙蝠窟に至る。これ春日底を堀取りし趾にして中央口廣さ處幅五六間、奥行亦相如けり、口の高さ二間許ありて奥に至れば

低し。元の道に返りて更に四町許上れば頂上に本宮神社の小祠を拜すべし。傳へ云ふこれ天兒屋根命の始て鎭坐し給へる處と。社の西の下方に七本杉あり長さ十二間許ある杉の老樹地上に倒れたるに其枝直立して七本の立木とはなれるなり其大なるは周り一丈二尺に及ぶものあり其南方標石のある處より直下すれば本宮社の舊道にして直に大宮と若宮との間に出づべく北すれば氷池月日磬に至るべし。

春日山　鷲瀧、香山、瀧阪、

通稱春日山といふもの春日山芳山、花山の三峯に分れ芳山最高くして其高さ千七百尺餘あり、古來神靈の宅として狩獵伐木を禁し給ひしかば一山鬱蒼として四時佳色あり。月日磬より新道を上ること二十町許中水谷を經て阪路の頂點鳥居前に至る。左すれば殆平に歩みて嫩草山頂に出づべく右に上れば上水谷に至るべし、清泉湧き出で長一間餘の水鉢あり銘して西金堂長尾水船文和二年云々といふ。之より更に下ること十六町鷲瀧に至る高七間幅一間半許、綠蔭清風湧きて最暑を避くるによし更に左すれば二十町にして高山神社に至る社前亦水船ありて銘して東金堂施入高山水船也正和四年

五月云々といふ、北方數十歩に鳴雷神社あり、中世香山龍王社と稱し社前の池に旱魃の際雨を祈れりといふ。之を下りて新路を右に取れば三本杉を經て春日の大杉に還るべし此間三十二町あり途中より右に七町許上れば春日山中第一の大杉周三十六尺なるあり。

●●瀧阪街道溪流に沿ひ景致幽雅最紅葉を賞すべし沿道附近岩石の佛像を刻せるもの頗多し、楼葬深く封するの間に古人奇古の技術を探る亦一種の趣味あるべし。

香山の南東二町餘に二窟の諸佛を牛肉彫にせるあり之より瀧阪街道を横ぎりて南方十町許細徑を分け行けば地獄谷に聖人窟を見るべし、高さ九尺幅十一尺奥行八尺正面の岩壁に釋迦觀音彌陀を刻せり左右は鉄損して明に見る能はず、之に並びて又一の岩窟あり。元の街道に出で三町許下れば朝日觀音と稱彌陀釋迦地藏を牛肉彫にせる岩石あり。又四町許下れば寝佛とて大日如來を刻せる石路傍にあり、此上方亦佛体を刻せる岩石あり。これを西すれば新薬師寺の傍に出づべし。

嫩草山

昔て火を噴き灰を雨らしゝ一個の火山、今は一面の芝生青毬を敷けるが如く緑樹森嚴なる春日山と照映して一段の風致を添ふるもの是を嫩草山となす。段別三十三町高さ千百尺餘あり山容三層をなし俗に呼んで三笠山といふ、上るに隨ひて光景遠く開け大和の平野、山城の連山皆一眸の中に收めて眺矚最佳なり。此山東大興福両寺の境界なれば所屬の爭より遂に南都五大寺の預りとなり雙方立合の上之を燒拂ひて和解せしことありしより今に至るまで毎春芝草を燒拂ふを例とせり。「今日はな燒きそ若草の妻も籠れり我も籠れり」の歌に名高き武藏野はこの西麓をいふとぞ。

手向山神社

手向山は嫩草山の北に隣り紅葉に名あり。縣社手向山神社其麓に鎮座ましませり。初め聖武天皇の大佛を造らんとし給ふや豐前なる宇佐八幡の神慮を窺ひ其加護を祈り給ひしより天平勝寶元年像成るに及びこゝに鎮祭して其守護神とはし給ひしなり。初め宮南梨原宮に鎮座し後大佛殿の東南に移り建長二年更に今の處に移り給ひぬ、鎮祭の當時八幡大神に一品比賣神に二品を授け給ひしは神に授品せる始なりといへり。往古の勅祭は天文八年まで行はれ轉害會と稱し附近六國の殺生を禁斷したりき。寶庫の祭器は皆これに用ゐられたるものにして中には往古鎮祭當時のものを存するあり。風葦、葱花葦は古式を

存して史家の參考に資すべく木造舞樂面十五面、天平年間の作と稱する四枚居木、黑漆螺鈿の唐鞍等最優秀なり。南方に若宮あり仁德天皇を祭る社前の石壇下にある春日祇の燈籠には文治二年僧勇專奉納の銘あり世に八幡形とよぶ。

東大寺

東大寺は南都七大寺の一にして八宗兼學、華嚴宗の總本山たり。時は文物最隆盛を極めたる平城朝に於て最佛法を尊敬し給へる聖武天皇の行基、菩提、良辨と共に力を戮せて創始し給へる所、奈良といへば直ちに世人の想ひ起す大佛は實に其本尊なり、元水田一万町寺封五千戸を寄せられ境域方八町に亘り大日本總國分寺として朝廷の尊崇最厚かりき。其規模たる大佛殿中央に南面して步廊之を繞り南に南大門あり、北に大講堂趾あり、西に正倉院戒壇院等あり、東に二月堂、三月堂、四月堂、開山堂、鐘樓等山に據りて相並べり。東西に對立せる七重の高塔は最壯觀を添へたるべきも久しく再建を見ず、今の京都街道に開ける三門も唯一の轉害門を殘すのみ、舊時に比すれば境域亦大に縮小せりと雖猶嚴乎たる大伽藍たり。

三月堂　は天平五年良辨僧正の開創したるものにして大佛の建立に先だつ十五年、實に奈良第一の古建築たり。桁行十間餘梁行十四間餘、屢修繕を經て前方の如き鎌倉時代に補ひ建てたるものなれども內部はよく其舊觀を存し貴重の建物なり。堂內安置する處乾漆若しくは塑像の鉅作にして皆天平の盛時に成れる優物とす。本尊不空羂索觀音（乾漆長一丈二尺、傳良辨作）と日光月光二佛（塑造形長六尺八寸）中央の壇上にあり、本尊の寶冠は無類の物となす。其左右にあるもの梵天帝釋二天（乾漆、長一丈三尺二寸、傳行基作）金剛密迹二力士（乾漆長一丈、傳行基作）辨財天、吉祥天（塑造長六尺八寸）四天王（乾漆長一丈）あり。執金剛神（塑像長五尺五寸）は背面の厨子中に安置し古來秘佛にして良辨の念持佛と稱す亦神品たり。

二月堂　又羂索堂と云ひ天平勝寶四年良辨の高弟實忠和尙の建立する所、今の堂は寬文九年德川家綱の再興に係れり、本尊は十一面觀音の銅像にして別に人身の暖みありといふ秘佛の小觀音あり世人信仰最深し。毎年三月朔日より二七日の間修二會の行法あり、實忠和尙の行ひ始めし處、其十二日に大松明を下の廊より堂上に持ち上りて僧の籠所より昇る道を照すを以て俗に大松明といひ又廊の下なる若狹井といふ閼伽井よ

り同日夜半に七荷半の水を汲取り堂内に納めて香水となすを以て御水取（おみずとり）といふ。此行法元は二月に行はれしより二月堂とは呼べるなり。

開山堂　若狭井の西南にあり、寛仁三年の造立にして良辨堂ともいひ傳自作の良辨僧正坐像を安置せり、東面に實忠和尚の木像あり。三昧堂は開山堂の南に隣り俗に四月堂といふ。鐘堂は其下方にあり、鎌倉時代の建築にして柱の配置、組物の手法巧妙を極め雄健莊重の態度を見る。鐘の高さ一丈三尺六寸、口徑九尺一寸廻二丈七尺厚八寸、費す處熟銅五万二千六百八十斤、白鑞（はくらう）二千三百斤、天平勝寶四年鑄造のものといふ。

念佛堂は其東にあり、地藏菩薩坐像千手觀音立像を安す。行基堂其北にあり、淨土堂其西北にあり本尊阿彌陀、傳自作の俊乘上人坐像を安す。行基堂の下に大湯屋あり、建久年中の建築を公慶上人の修造せる者、昔時僧徒の浴室たりしといふ、大釜水二十八石を容るべきものあり。

大佛殿　是東大寺の金堂にして回廊を繞らし正面に中門東西に樂門ありもと天平十九年に功を起し天平勝寶三年其大体の構造を終れる安前の大建築なりき。治承年間平重衡の兵燹に罹り建久六年源頼朝大檀那となり重源勸進して再興ありしを永祿年間亦三好松永の戰亂に遇ひて再烏有に歸しぬ。今のは元祿年間公慶上人の勸進により再興せるものにして其十四年に工を起し寶永五年に至りて落成せり。其規摸舊時のに比すれば頗縮小せるものあり、其砌の面積は七割一分建物の面積は六割六分内陣面積は四割四分となれり。

	當初	現今
	二重　十一間	二重　七間
高	十五丈六尺	十五丈六尺
東西長	二十九丈	十八丈八尺
廣	十七丈	十六丈六尺
基砌高	七尺	六尺餘
東西砌長	三十二丈二尺	二十二丈三尺
南北砌長	二十丈六尺	二十丈二尺

本尊大佛　聖武天皇天平十五年を以て盧舍那（しやな）佛（ぶつ）建立の大願を發したまひ始め近江の

恒樂京に造らんとし給ひしが之を中止して更に平城京に移し給ふことゝなり天下に勸財して幾多の經營を重ね天平十七年より天平勝寶元年に至る三年間に八度の改鑄を經て初めて成就したるもの、高五丈三尺五寸、面長一丈六尺廣九尺五寸、目長三尺九寸、口長三尺七寸他之に稱ふ、銅坐大小五十六枚高一丈彫刻の圖樣天平の筆意を窺ふべきものあり、實に我國に於ける古今の大作にして時の佛工長は國中連公麻呂、冶工長は柿本男玉、高市眞國、高市眞麻呂等なりき。四年四月開眼供養あり、此日天皇上皇行幸し給ひ文武の百官之に供奉し儀式の盛なる前古未だ曾て見ざる所なりしといふ。佛頭は治承の兵火に燒け落ちしを宋の佛工陳和卿之を修補し永祿に再落ちしは筒井氏の一族山田道安之を修補したり、

大佛殿前に銅燈籠あり八角にして高さ一丈三尺、火屋に菩薩走獸等を鑄出し燈柱には經說を彫れり。天平年間の鑄造にして陳和卿の修造を經たり、

大佛殿中門前に鏡池あり、一に八幡池といひ八幡祭日に生を放ちき。

東南院は池の南にあり。初め聖寶僧正の住坊たり後、後白河法皇、後醍醐天皇こゝに幸し給ひて御坐所となりしことありき。天皇殿あり聖武天皇を奉祀し、校倉あり寶物を藏す。佛像に良辨念持佛と稱する彌勒菩薩坐像、金銅の誕生釋迦佛及灌佛盤、觀音、釋迦、多寶塔如來の銅像、胎內木札に治承二年の銘ある多門天像、快慶作僧形八幡神像等あり、樂器に伎樂面四十四面、舞樂面九面の如き漆器に大講堂の所用と稱する黑漆螺鈿の卓、黑漆密陀の花鳥畫箱の如き鍍金の舍利塔、舟形後背、聖寶僧正の所用といふ玳瑁如意（一に五獅子如意）の如き天平年代の所製と稱する染革の如きあり。繪畫には華嚴五十五所畫讚の掛幅同圖の古繪卷物、香象大師畫像、俱舍曼荼羅、蔡山の十六羅漢、芝琳賢、古硎の繪卷物等あり。經卷には大毗婆娑論、賢劫經等を始め優品多く聖武天皇宸翰と稱する西大門額、東大寺要錄及續錄其他古文書、佛書等珍什頗多し。

南大門は東大寺の總門なり一度大風に倒れたるを正治元年修造せるものといふ、外部の二王は西方金剛力士運慶作、東方密迹力士湛慶或云快慶作といふ、共に長二丈六尺五寸二王中の大作たり。北面に陳和卿作と稱せる石造獅子の名品あり高五尺八寸五分。

眞言院は南大門の西北にあり、勸學院は大佛殿の西にありて空海の灌頂道場を開きし所、戒壇堂は其西方に在り堂内に戒壇あり初め唐僧鑑眞大佛殿の前庭に造り天皇皇后大子大臣等皆受戒せられしがやがて此處に移されたりといふ。堂内に塑造の四天王立像あり天平時代傑作の一なり。大佛の西廊の外を北すれば正倉院の前に出づ、これより東すれば知足院に至るべく、西すれば轉害門に出づべし。此門佐保路門とも景清門ともいふ、手向山祭禮を行はれし處にして舊都一條通の東端に當れり。

正倉院

正倉院はもと東大寺の境内なりしを王政復古の後帝室の有となりたり。これ孝謙天皇光明皇后より聖武天皇七々の忌辰に當り冥福を祈らせ給はんため大佛に獻納せられし御物を藏めんとて造らせ給へるもの所謂校倉にして三稜の大材を疊みて四隅を井樓の如く合せたり、長さ十七間許ありて三戸前に分れたれば三藏ともいひ古來勅封にして開閉頗嚴重なり。其藏する處の寶器無慮三千點、劍鏡、武器、樂器、佛具、服飾品、文房具、翫弄具、圖書、藥品、香料等あり。中には傳來の者なきにあらねども多くは當代に製作せられたるものにして當時各種工藝美術の發達を知るべく歷史の參考に資すべし、中にも關帝待の香木は足利義政織田信長等の寸片を切りて珍賞したることあり、鵜毛の屏風と共に古來俗間にも喧傳せられたり此無二の寶庫が一千一百餘年の今日に至るまで天災兵火に罹らず保存せられたること鬼神の呵護ともいはまし。

今は公園外に於ける奈良市内の社寺名勝を探るべし

轉害門を北すれば三町にして佐保川を渡る、鶯の瀧は其水源にして下流を奈良川ともいふ、螢を以て奈良八景の一に數へられたり。其北方に北山十八間戸あり鎌倉極樂寺の忍性菩薩が病者乞丐の徒を集めて入浴せしめたる所なり。

般若寺は眞言律宗にして轉害門の北方九町にあり、白雉五年孝德天皇不豫の御爲に蘇我日向臣の創始したりしを聖武天皇の時官寺となしたるもの、屢興廢を經て今は大に衰へたり。金堂には本尊文殊菩薩を安し經藏には今觀音を安す樓門は鎌倉時代の建築に係れり。十三重石塔は聖武天皇の建て給ひしものにして高五丈餘あり、今其前に

笠卒塔婆として上に石蓋を戴ける石二基並び立てり、これ弘長元年宋人伊行吉其父母の爲に建つる所にしてもと寺の南方にありしをこゝに移したるなり。寶物には蟻蹴天皇宸翰と稱する寺門扁額、骨ヶ大塔宮の隱れ給ひしといへる黑塗辛櫃等あり。

元明天皇陵は般若寺を五町許北して四町許西に入りたる所にあり陵上碑石ありといふ文に曰く大倭國添上郡平城之宮馭宇八洲太上天皇之陵是其所也養老五年歲次辛酉冬十二月癸酉朔十三日乙酉葬元正天皇陵は其西方四町にあり又其西南六町の山中に聖武天皇皇太子墓あり四隅に隼人石を据ゑたり、世に七匹狐といへるものこれなり。聖武天皇陵仁正皇后陵は相並びて其東南四町許にあり（地佐保村法蓮に關す轉害門の西方五町大佛骨東塔の東方三町）陵上骨ヶ肩間寺を建立したることあり。松永久秀の築ける多門城は此邊を籠め佐保川を前にして構へたるものなりといふ。開化天皇陵は猿澤池の西方五町許にあり（奈良停車場より東四町）其東に漢國社あり園神大物忌命韓神少彦名命を祭り南方に率川坐大神御子神社あり大神神社の攝社にして神武天皇の皇后外二神を祭り俗に子守の社と稱す共に推古天皇の朝の創立なり。

極樂院は猿澤池の南方二町許にありもと元興寺の子院にして律宗に屬し本堂に本尊阿彌陀如來（乾漆、佛體文會、稻首動作）を安す。寶物五重塔高一丈五尺餘百濟の工匠が元興寺の塔を建立する時雛形として作れるものなりといへり、又智光威得と稱する曼荼羅圖あり。

元興寺は極樂院の南方三町にあり、初め蘇我馬子、聖德太子と相議りて高市郡飛鳥に創始したるを元正天皇の時此處に移したるものにて七大寺の一に居り規模頗宏大なりしが今は廢頽して見るべきものなし、唯彫刻に十一面觀音、藥師如來等の像あり。今華嚴宗に屬す。

十輪院は元興寺の東二町にあり、眞言宗にして聖寶の開基に係る。空海亦こゝに住し朝野魚養に就きて筆法を學べりといふ。魚養書を能くす藥師寺の大般若經は其筆する所なり、寺內に其墳墓あり。禮堂は奈良朝の宮殿の一部を賜はりしものといへど今のは鎌倉時代の建築なり。護摩堂の本尊は空海の作と稱する石彫の地藏菩薩にして石窟中に安置し石の扉には諸佛像を刻せり。

壥城寺は十輪院の南三町にありて阿彌陀を本尊とし紀寺と稱す。行基の開基にして紀有常の再興する所といふ。（或は云ふ天智天皇の御宇百濟高麗の僧聖等の建立する所に係るも今天台宗なり。）

福智院は鍋城寺の北三町にあり。天平八年玄昉の創始せる清水寺の趾に就きて建長年間大乗院覚信僧正の再興したるもの、本堂地蔵堂は稽文會の作と稱する夾紵漆の地蔵（高一丈三尺五寸）を安す。

頭塔は福智院の東三町にあり、塚上の五輪は玄昉の首塚と稱す、塚の周圍に佛像を刻せる石多し。

新薬師寺は頭塔の東七町、華厳宗に屬す。聖武天皇御眼病平癒祈願の爲行基に詔して建立せしめ給ひしものにして本堂は天平年間東大寺大佛殿造營の殘木を以て建立せりといふもの、創立のまゝに存せり。本尊薬師如來坐像長六尺傳行基作といふもの、十二神將塑像傳鳥佛師作と稱す、（本皆淵寺のものなりしを此處に移せるなりと）其他聖武天皇御祈念佛と稱する薬師如來銅像、千手觀音像絹本の佛涅槃圖等あり皆優秀なり。

百毫寺は新薬師寺の東南九町にあり（東市村に屬す）眞言律宗にして阿彌陀如來を本尊とす地藏堂又閻魔堂と稱し小野篁作と稱する閻魔王坐像を安す。後方に鎧ものは高圓山にして春日離宮のありし處、名所にして月に萩に古來詠歌多し。

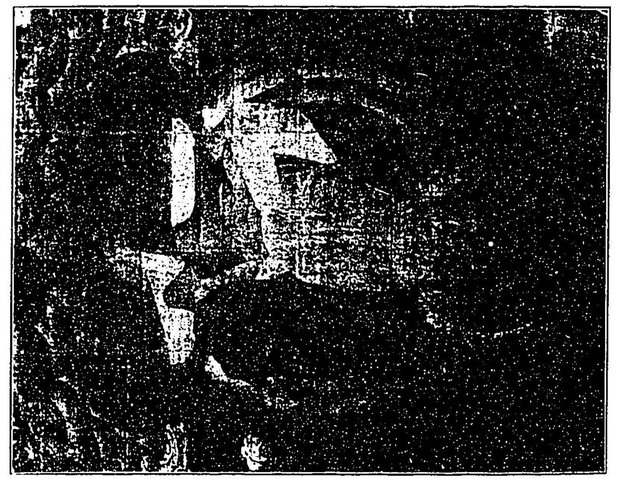
奈良の市内幾名家遺人の遺跡を求むれば東山公に仕へし有名なる茶人珠光嘗て北袋に住す、其汲めりといふ井は菖蒲池の稱名寺にあり。明智光秀も唱和したる連歌師紹巴は嘗て南市に住み、節用集の著述を以て有名なる饅頭屋宗二は林小路に住めりといふ。百萬辻子に住みたる百萬は謠曲に其名を留め東向中町に住べる大石瀬左衛門は四十七士の列に加はりぬ。創王寺院の趾は嫩草山の麓に其の谷の名を殘し鎗槍の鑑賞藏院の趾は博物館に其處を失ひぬ。大佛の修造に大功ありし宋の陳和卿は水門に住し創工包永も彫工狭藤とは大字に其名を殘し、甲冑の製造に妙を得たる岩井與左衛門の宅も猿樂四座の一なる金春の屋敷とは相並びて漢國社の北にありき。其他一々は擧ぐるに遑あらざるなり。

南都賦

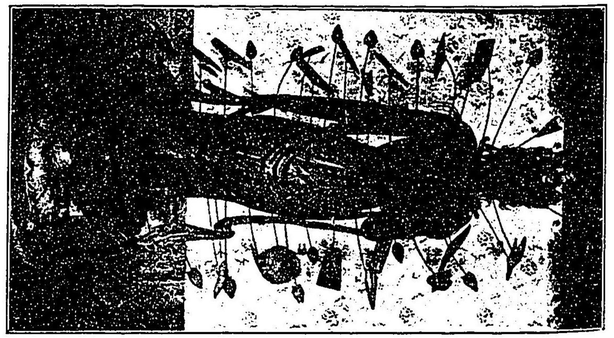
汝邨

あをによし奈良の都は御さふらひ三笠山の麓なり、元明天皇和銅二年藤原の宮より此京に移さる、大宮殿、大佛殿、佛殿をあがめて、王法を輔く。若宮のやしろ、月日の宮、臨殿、尾上の宮、鏡の神は橘の廣嗣をまつり、浄雲の宮は鹿島立の始とす。氷室、率川、東大寺の八幡、二月堂に若狭井あり、三月堂、四月堂釣鐘は久我の入道の詩をもとめ、大門の折釘は、源頼朝の幕を張る。興福寺は七堂伽藍、はじめは山階寺といひ中比は厩戸寺と號す東金堂、中金堂、食堂、講堂、南圓堂には補陀落の藤をうつし順禮の札を納め東圓堂にはいにしへの八重櫻を殘して花垣の庄を領す。西金堂の樂をあらため、南大門を移して薪の能をはじむ。七度半の使に四座の猿樂をめす、雨天には紙を踏んで試み夜陰には薪を積んで焚く、保生が鉢の木に名人の號を取り、大介が芭蕉に遊人の名をあらはす。水屋の能、若宮の能、春日祭、御祭、葉鞘に大衆の顔をつゝみて大

鞘巻につらなり、錦を巻て松の下に弓矢の立合を御ふ、頭屋の兒は水に履をかけ、赤衣の仕丁は鞘を横ふ、大名馬、大名槍、大太刀持、小太刀持、競馬、流鏑馬、長谷川薫は、甲冑を帯し、射手の兒は綾掛笠に弓矢を掛つ、關白代は、束帯して藤の花をかざし、バチヨの兒は供つれて、腰に木履をつくる。ハイタンの神子、奈良の神子、紙男、氷室付の樂人、トカミ、柏手は、仕丁の宿老、頭屋の御幣、田樂のピンヅロ、春は二月の雪をちらし、冬は霜月の花をさかす。手向山に菅家の紅葉を詠じ、武藏野に業平の若草をよむ、雪消の澤、野守の池、御多洗川、佐保川、一位、二位、五位の橋、馬出、麻、故郷の橋、鶯の淵、青龍の淵、森は神垣、手分の杜、地獄谷、干手谷、餓塚、逢火塚むら雨のたえ間には鹿井波に晴を祈り、雉の羽音には、若草山に眠をさます、鹿は春日野に臥し、魚は猿澤の池に浮ぶ。衣掛柳、良辨杉、夜泣の地蔵、文使の地蔵、元興寺の鐘は、鬼の手の痕になだれ、十三鐘は、七ツ六ツの間につゝ。角寺、紀寺、般若寺には大塔宮松院は願をおこす、興福石は伊勢の御の眺望をなし柳絲花紅の碑は紹巴翁のしるしとかや、菊原陵、泗濱石、鹿苑待の伽羅、鶴の毛の屏風、柳生家の剣術、寶藏院の十文字、法花寺の作り犬、西大寺の豎心丹、法輪院の噴、力饅頭、奈良漬、奈良こんがう、奈良團扇、墨、曝、世に名高く、打箔、中趣は此京より起る岩井が具足、文殊が打物、膠、絲背、粗、皺の皮、土風呂、灰、炮烙、櫟、水練、なら茶は、ヤヂウと名づけ、蛀食を硯水といふ、油煙取、五合鰯宣、乞丐坂の石、磯多村の木格子、赤きものは頭屋の赤仮にたとへ、痩たる人は金堂の鉦打といふ。木辻の待宵、鴨川の別れ、情に萬金を盡し、思ひに一命を輕んず。日は七日、月は八朔、町々に御門の名ありて、五條三條の巷をわかち莫冬の朝起、春秋のなりはひ諸國にすゞれ、諸人にこえたり。是皆舊都のありかたき、遺風なるべし。



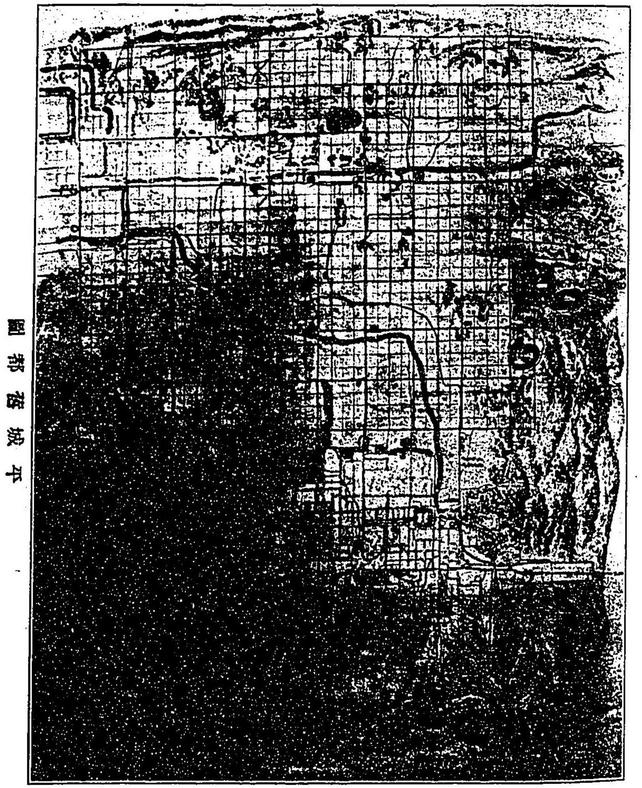
幅畫來如陀羅阿寺同



像大菩觀面一十像本寺藥法

十一面觀世音……意匠手訣とも精妙を極め全身を右脚に支へて稍体を斜ならしめ左足は踏み出だして輕く指端を上げ右手は印を結び左手は膝下に垂れて衣端を拈す、其配合妙に宜しきを得て自ら優美の趣を顯はせり。特り顏面は正眼嚴然として大光普照救世を誓ひ大悲を衆生に施さんとするの風貌を具ふ。彫刻に於ては故らに細巧を用ゐず、然かも刀鋭く而滑かにして非常なる熟練を表はせるものなり。實に聖武天皇時代遺物中最優等の像と稱すべきなり。

（美術略史稿）



圖部藤原平

朕祗奉上玄、君臨宇内、以菲薄之德、處紫宮之尊、常以爲、作之者勞、居之者逸、遷都之事必未遑也、而王公大臣咸曰、往古已降、至于近代、揆日瞻星、起宮室之基、卜世相土、建帝皇之邑、定鼎之基永固無窮之業斯在、衆議難忍、詞情深切、然則京師者百官之府、四海所歸、唯朕一人猶逸豫、苟利於物其可還乎、昔殷王五遷、受中興之業、周后三定、致太平之稱、安以遷其久安宅、方今平城之地、四禽叶圖、三山作鎭、龜筮并從、宜建都邑、宜其營構、資須醫事情奏、亦待秋收後令造路橋、予來之義勿致勞擾、制度之宜令後不加

（和銅二年二月遷都詔勅）

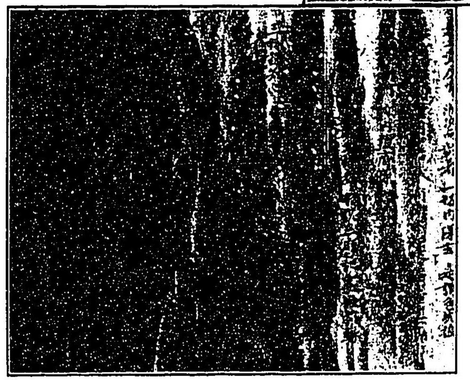
あをによし奈良の都は咲花の　（万葉）
にほふが如く今さかりなり

ならの帝の御歌

ふるさとゝなりにしならの都にも　（古今）
色はかはらず花は咲きけり

西大寺舍利塔

秋篠寺技藝天



西大寺經卷

技技藝天、體度豐滿にして贅肉なく容貌窈窕にして婀娜ならず一見愛すべく馴るべきが如くにして諦視すれば畏るべく敬すべし而して狎るべからず天女の妙相茲に極まる　（國華）

長き夜のいこまおろしや爽からん　（壬二）

秋篠の里に衣うつなり

さりともと西の大寺たのむかな　（夫木集）

そなたの願ともしからしな

以前資財記自寶龜十一年九月至于同年十二月份綱已綱衆僧共相商量依本納帳訂會勘宗錄顯如件

寶龜十一年十二月廿五日

少都維那修行滿位證處

（西大寺流記資財帳）

木造地藏菩薩

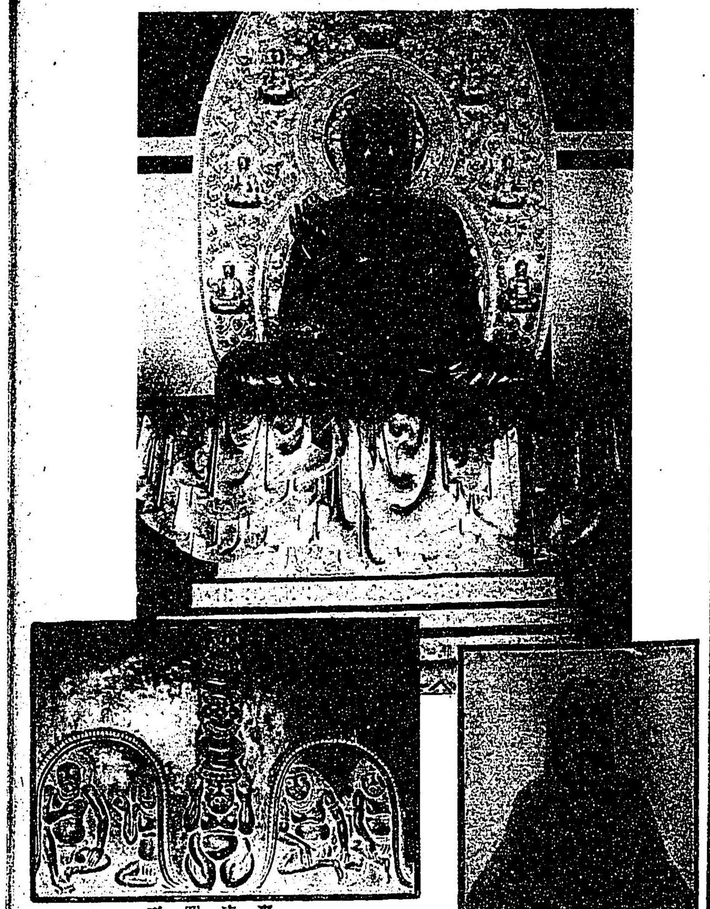
寶金寺禮拜堂

延暦二十二年正月戊戌律師御燈
大法師如寶言、招提寺者斯大唐
和尚鑑眞爲聖武帝所建也、天平
寶字三年、勅以沒官地賜之名曰
招提寺、又以越前國水田六十町
備前國田地十三町宛給供料令學
式法　（日本後紀）

此御堂元亨三年癸亥春三箇月
之間成上葺畢以此次同六月候
西方飾作費之作者惣王三郎大
夫正重　（金堂鴟尾銘）

南都招提寺の講堂は平城宮の朝集殿と云傳ふ予其結構を見るに朝集殿の結構に非ず金堂の結構を詳にするに間架結構疑ふべくもなき朝集殿なり（漢非及土壇は當時金堂となして設くる所朝集殿の結構に非ず）材の美も諸堂の及ぶべきに非ず講堂を朝集殿といふ說は古來より誤りを傳へたるものと見ゆ　（好古小錄）

わかばして御目の雫拭はゞや　芭蕉



藥師寺本尊

臺座圓形

神功皇后像

金堂一宇二重二間五間四面柱高一丈
九尺五寸佛壇長三丈三尺廣一丈六寸
高一尺八寸以馬瑙爲飾石以瑠璃爲地
敷之以黃金爲繩墨以蘇芳造高欄以紫
檀爲內殿天井障子以鐵繩釣天蓋寶四
端交互白鏹寶珠及半月等不可稱計
（流記抄）

藥師佛并に脇士日光佛月光佛
銅鑄物にして中尊は蓮座とも一丈四尺脇士は蓮座とも一丈三尺あり。此像は當代の傑作にしてしかも東洋造像術の一大發達を告げたる標識とも認むべきものなり。……今此の藥師三尊佛の樣式を案するに全体は支那唐朝の式にて姿勢雄偉にして手足衣文何れも寫眞に成り裝飾は餘り繁雜ならずしてしかも配合の宜しきを得たり。蓮座も形狀よく調ひて絲には青龍白虎朱雀玄武又蒲萄草の撚樣あり。側板には邪鬼形が鑄出せり　（美術界史稿）

藥師寺吉祥天

同寺三重塔

同塔水煙

高さ凡十六丈空輪の長さ五丈ほと有とそ。さても九輪の心柱なくゝみて屋の上におほひたるを露盤といふ。方五六尺もあらんか。高さは二尺はかりあり。露盤のうへに上のひらきける鉢のさましたるものゝふちに手をかけていきみて露盤にのほる。年ころ開わたりぬるなは擦といふよし順朝臣の和名抄に見えたれいふはあやまりなり。世人の露盤の銘を九輪の第一胸の上にあり。銘はその下にあれはいとよく見ゆ。かねにゑりたるものなればいもあさやかなり。すへて此度のことは夢のことおはゆるにこれはましていへはおろかなり。此銘文は世人もあまねくしりたることなるは日本紀をたかひてかの親王の御手にてはいかにやあらんといにし年いふかりおもへりしが或人の是はその折からの實錄ならし日本紀撰定の時にいたりては筆をまけさせ給はんもよりところ有へきにやとそいはれし

（道の幸）

この吉祥天女の像は布に畫きしものにして、長さ一尺八寸あり。今より九年前藥師寺内の鎮守八幡宮より發見せらる。正に聖武天皇時代の作なるべし。その裙又は手の溪處々剝損せるも容姿優美にして容色亦華麗なり。面相は日本樣にして前の樹下美人の畫に類せり。此の吉祥天女の衣服は紫より佛像式の莊嚴なれども深紫の衣淺綠の裙など此の時代の內親王女王などの服制に似たり。或は當代高貴の肖像に憑りて畫きしものなるやも圖るべからず。

（美術略史稿）

維清原宮殿宇
天皇即位八年庚辰之歲建于之月以中宮不念創
此伽藍而鋪金未遂龍駕騰仙太上天皇崇前緒
遂成斯業照先皇之弘誓光後帝之玄功道濟郡生
異体嚴勅式於高閣致勸貞金
巍巍蕩蕩藥師如來大發誓願廣濟慈哀
猶猶聖王仰延哀助爰飾靈宇莊嚴調御
亭亭寶刹波波法城福崇億劫慶溢萬齡

（三重塔擦銘）

奈良郡山附近（平城舊都域）

大化革新の後制度文物日を逐ひて面目を改め都域の規模亦舊時の簡樸に安んじて屢所を遷すを便とせざるものあり、元明天皇和銅二年遷都の大詔を下し給ひ經營百方茲に古來曾て見ざる大都域は構へられぬ。地は添上添下（今の生駒郡）両郡に跨りて東に春日高圓の諸山を眺め北に佐保、佐紀の諸山あり西に生駒の連山を望む、所謂三山鎭を作し四禽圖に叶ふの處にして南北三十町東西二十五町、縱横九條の大路を通じ其中央南北に通せるは朱雀（すざくおほぢ）大路にして左右の両京を分ち宮城は其北端にありて諸官省皆具備せざるはなかりき。七朝七十餘年の間「さゝ花の匂ふが如く今盛なりし奈良の都も桓武天皇都を平安に遷し給ふに及び幾ばくもなくして都域道路變じて田畝となり「世の中は常なきものと今ぞ知る」の嘆あらしめぬ。然れども一面の平野猶舊時を回想すべきものあり轉害門より西する街道は一條通に當り三條通亦今に其線を改めず二條より九條に至る地名は各所に其形見を殘して條坊

の田塍の間に存するもの少かちず大極殿趾の儼として今に犂鋤を入れざるあり、郡山の東方には都域の正門たりし羅城門趾の存するあり、平城朝佛教隆盛の間に構へられたる西大寺、唐招提寺、藥師寺等の大伽藍は右京の西端にありて南北に相望めり、左京の大安寺亦七大寺の一なりしも今は僅に遺趾に小堂を設けたるのみ。今は先一條通を西して此平城舊都域の名勝を探らむ。

興福院（佐保村法蓮、浄土宗）は聖武帝陵の西方六町にあり、もと聖武天皇の御學問所を和氣清麿に賜ひて寺院としたるものにして寛文年間生駒郡興福院より今の處に移せるなり。

不退寺（同村、興福院の西方八町、真言宗）平城天皇の皇居なりしを御孫在原業平の寺院とせられたるものにして業平の作と傳ふる聖觀音像及び五大明王を安し寶物に金銅舍利塔を藏す。（塔の鐵層以下を殘せるに鎌倉時代の模様を見るべきあり）

海龍王寺（佐保村法華寺不退寺の西方六町、律宗）法華寺と共に藤原不比等の屋敷跡なりしを伽藍としたるものにして始め僧玄昉を棲ませたりき。本堂に十一面觀音文殊菩薩（佛運慶作）を安し西金堂内に高一丈五尺の五重塔を置く、塔は西大寺の雛形にして叡尊の作る所と傳ふ建築家の稱して天智式と呼ぶものに屬す。寶物に毘沙門天畫像（佛空海筆）寺門勅額（佛聖武天皇宸筆）等あり。

法華寺（佐保村法華寺、古義真言宗）

法華寺は海龍王寺の西方にあり光明皇后の御願により聖武天皇の東大寺を造營して女人不入とし給ひしよりこゝに尼國分寺を建て男子不入の地とし給ひしなり、今の本堂は豐臣秀頼の再興にして片桐且元奉行たりき。本尊十一面觀音は高三尺二寸、傳へて文答師が光明皇后の尊影を摸したるものといふ當代製作中優秀なるものゝ一にして古來秘佛として尊重せられき。其他佛体に天平時代唐土傳來といふ乾漆の維摩居士坐像、佛頭、二天頭等あり繪畫に絹本彌陀三尊及童子像三幅あり古來光明皇后御臨終の際に掲げ奉れるものといひ千年以外優秀のものたり、此他寶什に浮牡丹摸様の青磁香爐唐銅花瓶等を藏す。

極樂寺（西方にあり浄土曼荼羅圖（佛清海筆）曼荼羅）を藏す、もと超昇寺のものにして極樂院當麻寺のと共に大和の三曼荼羅と稱せられたるものなり。

大極殿趾　都跡村佐紀

法華寺の西方七町許、芝地あり東西廿一間、南北七間、田面より高きこと六尺許これ實に大極殿の舊趾にして今大極の芝とよぶ後方に小安殿あり前面に龍尾道あり十二堂、中門、朝集殿、閤門、步廊等の遺趾歷々として今猶見るを得べし。其西北三町に雜木繁茂する處を大宮とよぶこれ內裏の趾なり。其西方に棕櫚の樹の生ふる所「ダイの宮」といふ內裏宮の訛稱なりといへど其何の趾なるかを詳にせず。

諸陵　平城天皇陵は大極芝の北方三町にあり磐之媛仁德天皇皇后陵は其東なる佐紀池の北方にあり池の東に二個の大なる車塚の並べるは大鍋山小鍋山といひ古來元明元正二帝の陵と傳說したりしものなり。日葉酢媛垂仁天皇皇后成務天皇、孝謙天皇の三陵は相並びて平城天皇陵の西方七八町の處にあり、神功皇后陵は又其北方五町許にあり。野見宿禰が始めて埴土を以て人馬等の形を作りて殉死に代へたるは日葉酢媛陵なり。

秋篠寺　平城村秋篠、

秋篠寺は神功皇后陵の西方九町にあり、光仁桓武兩帝の本願にして寶龜十一年善珠僧正の開基に係り勅封一百戶を賜へる大伽藍なりしが後兵火に罹り漸次衰廢して今は僅に講堂を殘すのみ。藥師如來を本尊とし始め法相宗なりしが今淨土宗に屬せり。佛像の優秀なるに十一面觀音、技藝天僧運慶作救脫菩薩僧法橋作梵天僧安阿彌作大元帥明王僧法橋作帝釋天等の立像あり

香水閣　佛へ云ふ皆山城國小栗栖の常曉阿闍梨當寺に沒德して曉の閼伽を結べる際井中に大元帥明王の影浮びしより其上に堂宇を建てたるなりと

西大寺　伏見村西大寺、秋篠寺の南十町許、奈良より一里十町、

西大寺は眞言律宗の本山にして七大寺の一なり。天平神護元年孝謙天皇の勅願に成り僧常騰の開基に係る。屢火災に罹りて衰頹せしを鎌倉時代の碩德叡尊諡して興正菩薩といふ再興して律宗の大道場とせり。其後堂塔亦燒失し今のは皆其後の造營に係れり。本堂は寶曆二年の造立にして叡尊作と傳ふる釋迦如來を本尊とし文殊、彌勒、四佛等を安し愛染堂には愛染明王を本尊とし自作と稱する行基菩薩の像を安す。觀音堂は本堂の東方にあり十一面觀音立像長一丈六尺を本尊とし四天王像を安す四天王は天平神護元年孝謙天皇玉

手を以て熟銅を攪り給ひて成りしといへる靈像の形見にして邪鬼は當時のものを殘し頗優秀なり。寶物は空海筆と傳ふる十二天畫像、十六羅漢扉風、金銅舍利塔四種（一は龜山天皇の勅封を稱し二は叡尊感得を稱し一は瓶形のものなり）金光明最勝王經（跋云天平寶字六年吉濟豐虫敬寫）大毘盧遮那經（跋云天平神護二年吉備由利寄寫）資財流記帳（寶龜十一年十二月勘奏）古文書等珍什頗多し。豐心丹は當寺より發賣す其處方は道宣律師唐土より傳來する所といひ一說には畠山某の傳ふる所なりしを當寺大衆の其爲に働きたる賞として處方に三百石を添へて寄附したるものともいへり。奥院は西方三町にあり五輪塔婆を立つ興正菩薩の墓といへり。

菅原

（都跡村菅原、西大寺の南八町奈良より一里五町）

菅原はもと此邊の大名なりしが今は西大寺の南方なる伏見村の大字たり。菅原氏の祖野見宿禰の土師姓を賜ひしより子孫長く此處に住へり、其始めて菅原の姓を奏請せしは菅公の曾祖古人なり。菅原神社は菅原氏の祖廟にして天穗日命野見宿禰に菅公を配祀し菅原寺は喜光寺ともいひ行基菩薩の寂せる所なり。其南方四町なる車塚の大陵は垂仁天皇陵にして池中に田道眞守の墓あり。田道眞守は垂仁天皇の詔を奉し。非時香果を常世國に求めて歸りしに天皇既に崩御したまひしかば號哭して死せりといふ。西方十町許に安康天皇陵あり。

唐招提寺

（都跡村五條、垂仁陵の南五町奈良を距る一里餘）

唐招提寺は律宗唯一の本山にして古の十五大寺の一、西大寺衰微の後には當寺を七大寺に加へたることもありき。天平勝寶八年聖武天皇を始め皇族大臣に菩薩戒を授けたる唐の高僧鑑眞天皇の御爲に新田部親王の舊宅に就きて創建する所、屢沿革を經て東西兩塔の如きは既に失はれたりといへども金堂は當時の建築を存し北に講堂あり東に禮堂舍利殿相並び西方に戒壇跡あり鼓樓鐘樓は金堂、講堂の間に東西相對し地藏堂、開山堂等北方にあり、佛体亦多く優秀なるものを遺し淸閑幽雅の靈境なり。

金堂　七間四面にして土壇の上に立ち棟の兩端に鴟尾を上げたり、當時創建のまゝに存し堂内裝飾の繪畫等猶見るべきものあり、今存せる天平時代の建築中最宏壯なる堂宇なり。

講堂　傳說には平城宮の朝集殿を賜りて移し建てたるものといへども内陣廻り天井の

外は多く鎌倉時代の修繕に成れり。唐軍法力作の獅動菩薩を本尊とし十一面觀音二軀、釋迦（厨子入）藥師、寶生如來等優秀なる佛像を安す。

舍利殿は佛舍利三千粒を本尊とし禮堂は釋迦（赤栴檀像（傳毗首羯磨作））を本尊とす其他地藏堂には地藏菩薩立像（傳空海作）獅子吼菩薩立像、衆寶王菩薩立像を安し開山堂には紙製鑑眞和尚像、中興覺盲和尚坐像あり、鑑眞は渡海大師ともよび天平勝寶六年遣唐使藤原清河等の請に應じて來朝し聖武天皇を始め菩薩戒を受くるもの萬を以て數へたりといふ、其墓は寺の後方にあり。

寶物は佛像に如來形、天部形立像、佛頭鍍金の銅板佛等あり、繪畫に絹本の大威德明王像あり、繪卷に東征傳繪卷あり、鑑眞和尚東海の傳記を圖せるものにして永仁六年遣行の筆に係れり。畫帖に宋元以下大家の筆を集めたるものあり。經卷に鑑眞筆と傳ふる紺紙銀泥の金剛經あり、其他唐招提寺の勅額、佛畫の扉八枚、火焔付の羅大鼓二個、舍利塔等優秀の寶器を藏するもの少からず。

西方に赤屋山あり陶器を出す昔て小堀遠州七窯の一なりき、郡山城主柳澤甚山公之を再興したるも今廢ならず。

藥師寺

（都跡村西京招提寺の南四町、郡山より廿五町）

藥師寺は法相宗二本山。もとは天武天皇八年皇后の御病平愈を祈らん爲藥師の像を作り給ひ高市郡（今の白橿村喜殿）に草創し文武天皇の世に成功したりしを元正天皇養老二年に至りて文に移し建て聖武天皇天平年中造營成りたるものといふ。七大寺の一にして往時は盛大を極めたりしが屢災厄に罹り慶長五年の再興を經たり。今は當時の建造物に唯一の三層塔を見るのみ。

金堂　延寶二年再興に係る。佛壇は大理石といひ長九間幅二間高一尺八寸あり養老年中百濟國王の貢獻する所と傳ふ本尊藥師如來坐像臺坐共一丈四尺脇士日光月光佛立像臺坐共一丈三尺共に金銅にして行基の作と稱す。天武天皇即位八年より前後十七年を經て造像の功を竣へたるもの、面貌莊重威容儼然當代金工中無類の傑作たり。臺坐の模樣の如きも奇古言ふべからざるものあり。

講堂　亦銅造藥師三尊を安す優秀の作なり。

三重塔　毎層裳層ありて六層の觀をなす。高さ十一丈五尺、天智時代に屬する建築唯一の標本なり。塔尖の水烟は天人の空中に飛翔する狀を刻す最雄麗なり。塔擦の銘文舍人親王の作といふ。

東院堂　本尊聖觀音立像銅造にして長七尺餘傳養老年中百濟國王貢獻する所といふ姿勢直立にして端嚴の趣あり。

佛足堂　有名なる佛足石あり高一尺八寸餘、上面縱横二尺五寸許、横三尺二寸五分、其上面に足跡を刻めり。後方に立てる佛足石碑は佛跡の傳來功德及呵嘖生死の和歌十七首を刻す、古雅愛すべし。

寶物には彫刻に十一面觀音立像、比丘尼八幡、神功皇后仲津姫等の坐像、乾漆菩薩の面部高麗犬等あり、繪畫に吉祥天畫像あり布に描きて長一尺八寸あり容姿優美着色華麗にして天平時代の珍品に屬す。慈恩大師畫幅あり賛は小野道風の賛と傳へらる、經卷に朝野魚養の筆と稱する大般若經、科野虫麿筆と稱する增壹阿含經あり。

寺の南に鎭守八幡宮あり其西方の大池は勝間田池なり。

大安寺

大安寺村大安寺奈良停車場より十五町

大安寺は奈良の西南にあり、もと七大寺の一にして高市郡より移され高僧道慈の建てたるものなりしが後廢頽して僅に小堂を存するのみ。緣記は嘗公の筆に係る今宮内省に入れり。彫刻に千手觀音、不空羂索觀音、楊柳觀音四天王、十一面觀音の諸像あり。南方鎭守八幡男山より勸請したるなり。

郡山城趾

郡山町奈良より一里半

郡山城は足利氏の末小田切宮内の居城たり豐臣秀長が筒井氏に代りて此國を領するに及び城地を修して和泉紀三州百万石の治所たりしが後屢城主を代へ享保以後柳澤氏十五万石の封邑となれり、彩畫に名高き柳里恭は實に此地の國老なり。今本丸に柳澤神社を祭る、風景絶佳なり。郡山町は二國内第二の都邑にして金魚を名産とす。南方一里の筒井村は筒井順慶の城地たりし處、其南方に願安寺あり、聖德太子の創立にして此地に生れたる道慈律師の興隆する處なり。

富小川附近

郡山の西南二十餘町に小泉あり今は片桐村に屬す。片桐氏一万石の城地たりき、石州流茶人の祖なる片桐宗關公は其二代の君なり。西南に法起寺あり、法隆寺と相望む。西方山腹に松尾寺あり、其北方に矢田寺あり。小泉の東を流るゝは富小川にして其上流は國初長髓彦の占據したりし處、靈山寺、王龍寺、長弓寺の諸寺あり。其水源は北倭村に屬する高山にして茶筅の産に名高し連歌抹茶に有名なる高山宗砌は此地の人にして實に其製の工夫をなしたる人といへり。

松尾寺（矢田村山田、矢田寺より半里眞言宗）舍人親王の御願によりて創立する處、松尾山の山腹にありて東方を眺望すべし本堂には千手觀音を安し大黑堂に大黑天を安す。寶物に山田道安筆市守長者像土藏筆受染畫像等あり。

矢田寺（矢田村矢田郡山の西二里、眞言宗）金剛山寺とよぶ、天武天皇の本願にして智通の開基に係る。金堂に本尊地藏（傳春日作）を安す、寶物に閻魔王坐像、小野篁滿米上人畫像の扉等あり。東明寺は其北方八町にあり、眞言宗にして舍人親王の創造に係り藥師如來を本尊とす、舍人親王御筆法華經日光月光佛畫扉あり。

塔内塑像

法隆寺塔

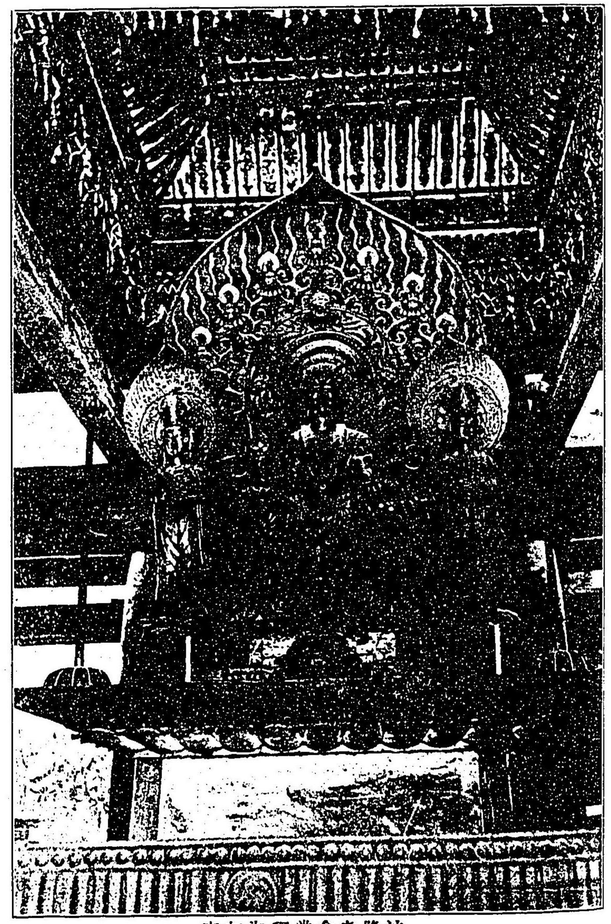
同中門

之れを要するに當代は佛寺建築旺盛の時代なり。而して其建築の規模は百濟の造寺工が盡瘁する所なりしが如く其のスタイルも亦百濟のスタイルと名づくべきものなるが如し。當代建築の形式を存するものは大和に法隆寺伽藍及び法輪寺の塔、法起寺の塔などあり、法隆寺は七堂悉く具備せる伽藍なり。而して其金堂、塔婆、中門の三今其の特徴を略言すれば柱は「エンタシス」なる曲線より成ること猶希臘式に於けるが如く雲形肘木及び雲形斗を賞用して普通の組物を用ゐず。高欄に卍形の組子を附し其の内に條を設けず、軒は「一ト軒」にして「垂木割」粗放に全体の形狀極めて莊重にして且つ奇拔の觀を呈せり。

（美術略史稿）

御佛の道をひろめしいかるがのさとみゝのみこやこゝにきしけむ　蔵庵

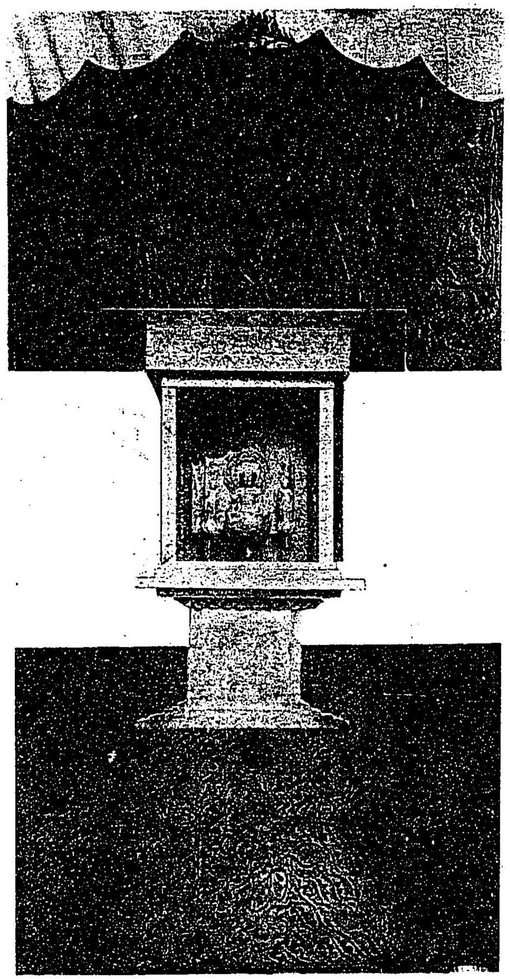
五重寶塔東面之塑像。文殊維摩不二法門之体相也。南面彌勒淨土變相。北面釋尊涅槃之處。西面釋尊荼毘所也。右四面之塔像。天竺唐土我朝三國之土ヲ以テ爲佛師塑之。殊勝無双之靈像也。（法隆寺舊記）



法隆寺金堂釋迦如來

法興元世一年歳次辛巳十二月
鬼前太后崩明年正月廿二日上
宮法皇枕病弗豫于食王后仍以
勞疾並著於床時王后王子等及
與諸臣深懷愁毒共相發願仰依
三寶當造釋像尺寸王身蒙此願
力轉病延壽安住世間若是定業
以背世者往登淨土早昇妙果二
月廿一日癸酉王后卽世翌日法
皇登遐癸未年三月中如願敬造
釋迦尊像並挾侍及莊嚴具竟乘
斯微福信道知識現存安穩出生
入死隨逐三主紹隆三寶遂共彼
岸普遍六道法界含識得脫苦緣
同趣菩提使司馬鞍首止利佛師
造　（釋迦如來後背銘）

銅鑄物にして本尊釋迦佛は鍍金を施し高さ四尺五寸あり……。此の像他の夢殿の觀音中宮寺の彌勒菩薩などに比ぶれば其の軀幹短小にして少し〳〵樣式の異なるを見る。是れ或は鞍作止利が傳へたる支那中國邀の樣式にはあらざるか。次の天智天皇時代に及び次第に支那より傳來せる佛像中に此の短小にして面相の小兒に似たる許多の佛像を見るなり。（美術畧史稿）



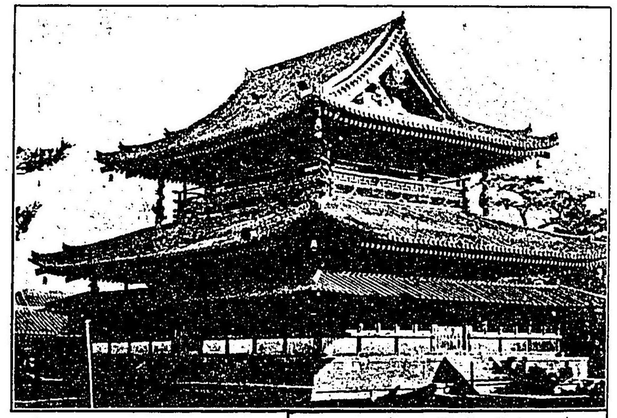
橘夫人念持佛厨子

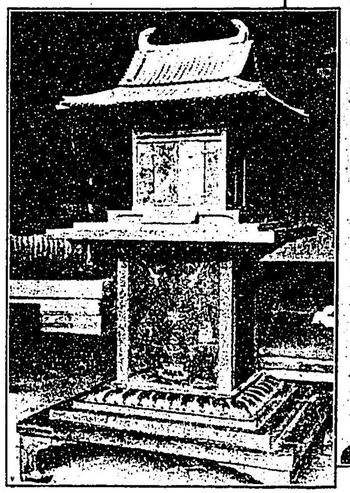
黄銅の鋳物にして阿彌陀像及び觀音勢至の二菩薩蓮池より抽でたる三蕚の蓮華上に座するの像にして後には光背と屏障もありその屏障には菩薩像を鋳出し又化佛として小佛像六個を點裝せり本尊は高さ一尺八分脇士は高さ九寸あり此の佛像は天智天皇の妃橘夫人の作らしめ給ひしものにても厨子の内に安置せしものなりその厨子は橘夫人の厨子として今も金堂にあり

此の像の製作意匠も巧にして技術精緻を極め日本風の優美なる樣自ら相貌の上に見はれ光背の如きも著しく模樣組織の發達を表はせり又屏障に鋳出したる菩薩像は頗る金堂壁畫の圖に類似せる點あり

（美術略史稿）

法隆寺金堂





同寺玉虫厨子

同寺九面觀音木像

弘安元年法隆寺寶物和歌　　慈山定圓

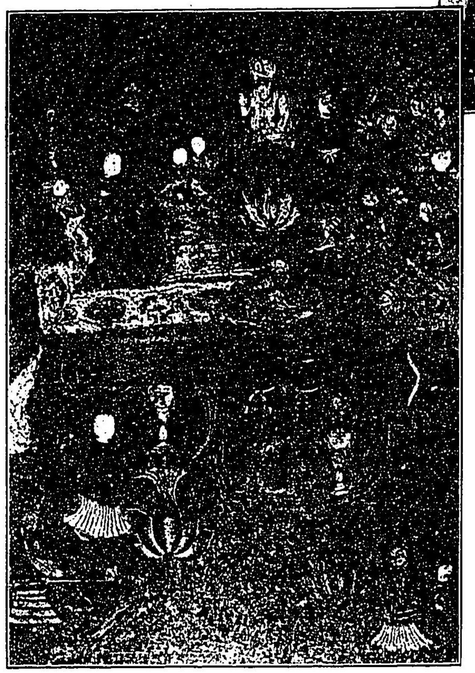
鷲の山法のこゝろをいかにして
　しるしをめけむいかるかの宮（法華經義疏御草本）

すかしなす佛のいますかさりまて
　さゝ玉蟲のひかりますらむ（玉蟲厨子）

次向東戸有厨子　推古天皇御厨子也其形腹細也、以玉虫羽以銅彫透唐草下臥之橘寺滅滅之時所送也内一万三千佛御丈七尺其内金銅阿彌陀三尊御、其盜人取、光二許所殘（古今目錄抄）

這御厨子者後三條院御宇承暦年中自當寺末寺所遷之也（古今一葉集）

中宮寺本尊如意輪觀音木像



同寺天蓋國曼荼羅

この繡張はもと二張にて各長さ一丈六尺ありしなり。繡の地は紫色の紗と黄色の綾との二種にて白赤青黄緑樺紫等の色糸にて佛像人像鬼形宮殿花鳥等を繡ひ又百個ばかりの龜形ありて其龜背に四字つゝ四百字ばかりの銘文を繡ひてこの曼荼羅を製せし由來を記されしなり。然るに漸次に朽損して今中宮寺には方二尺八寸ばかりの幅に佛像人物宮殿龜甲などの殘缺を貼り交ぜたるものを藏するに過ぎず。されども他の殘缺の世に傳はりしものあり。又古き模造もありて其舊形を窺ふことを得べし。もと其の圖樣は全く想像に出で然も多く裝飾的の意匠を加へしが故に佛の蓮座の如きは花より成り又寶形をして自在に座邊を繞らしめしなど奇異の觀少からず。

（美術略史稿）

法隆寺藥師如來木像

塔頂三寺起法

法名法琳寺東限法起寺塀南限鹿田池堤北限水至池堤西限板垣岑　（資財雜物帳）

十四年……皇太子亦勝法華經於岡本宮、天皇太喜之播磨國水田百町施于皇太子、因以納于斑鳩寺、（推古天皇紀）

君か代は富緒川の水澄みて　源　忠季
ちとせなふとも絶えじとぞ思ふ

社　神田　祇

三　田　祇

文武天皇御製

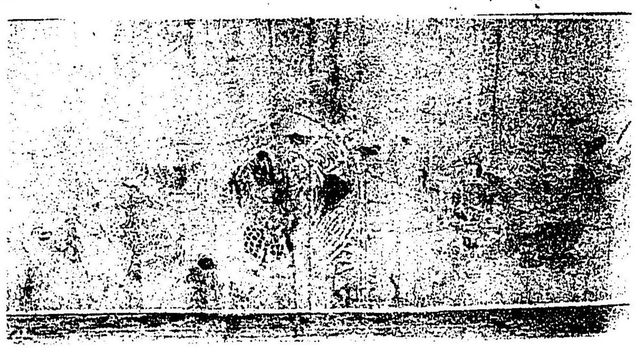
立田川紅葉亂れて流るめりわたらば錦中やたえなむ

春霞たつたの山の嶋に秋の色をも奪はれやせむ　久我根花作

冬かれや大根葉流る龍田川　宇鹿

さてまた龍田川といふは今の龍田の里より三町計り西にありて今も普く龍田川と呼ふなる川すなはち古歌どもに多く詠おきつる龍田川の事にして尙また今の官道に掛れる土橋より四五町ばかり下なるいはゆる御室山の東の山本を流れ廻りて其處より十町餘り下なる大輪田村といふ處にて廣瀬郡より流れくる廣瀬川に落合ひて船戸、勢野などいふ村を過て竜野にいたり龍田山の麓を流れ落ちて河内國に行なるを彼の廣瀬も此の龍田川の流れ合ひつる後は廣瀬川の名は無くなりて彼の土橋の邊りより河内の國にいたるまで凡二里ばかりが間をむかしは龍田川とぞいへりける（龍田考）

信貴山木堂



信貴山縁起繪卷

寶物は繪詞緣起四卷あり其内三卷は鳥羽僧正の筆いかにも疑なく見え侍り詞は行成卿といへども時代たがひぬればあらぬなるべしかの家にては伊行朝臣の比なり（道の幸）

大關　傳云覺鐵筆或云光長　和州信貴山藏　信貴山緣起
關脇　傳云覺鐵筆或云信實　栂尾高山寺藏　高山寺繪本
小結　傳云慶恩筆豐州家本　多家伊勢福島氏藏　平治物語繪

大關　傳云光長筆　酒井家藏　伴大納言繪詞
關脇　傳云覺鐵筆或云信實　栂尾高山寺藏　華嚴緣起
小結　傳云信實筆　佐竹家藏　三十六歌仙像

（大倭畫名卷號）

生駒山寶山寺境内

同寺不動明王木像

同寺聖天堂

湛海律師字は寶山寛永六年伊勢國安濃郡に生る、書畫を善くし又彫刻に巧に造像の技術に至りては眞に其の妙を究めたり。延寶七年大和國膳駒山に上り殿若窟を開き元和元年八月初めて不動尊像を彫刻せりこれより彌勒、虚空藏の尊像を鑄造して雲上閣に又聖天と役小角の像を鑄て之れを富洞中に納め又一刀三禮して十一面觀音の尊像を刻み常念觀音院を建てゝ之れに安置せり。總て湛海の作品の秀でたるものはおもに膳駒山寶山寺に藏せり其作頗る纖麗にして精巧なるもの少からず。

春風に伊駒の山の咲はれてへたてぬ雲や櫻なるらむ　　法印定爲

靈山寺（富雄村中奈良より二里餘郡山より五十町、眞言宗）行基菩薩開二僧正の開基に係り藥師如來（弘行基作）本尊とす。又三層塔あり、内部裝飾の模樣明瞭に見るを得べし。寶物に鑄製彌陀三尊像あり。塔頭地藏院に十一面觀音立像あり。

王龍寺（富雄村二名靈山寺の北五十町、禪宗）聖武帝の創立、本堂内に怪石あり。高さ一丈五尺其面に十一面觀音を鐫りて本尊とす。建武丙子三年の銘あり。

長弓寺（北倭村上王龍寺の東南半里、古義眞言宗）聖武天皇の勅を奉して行基の開基するとゝ、本堂に十一面觀音を安す。

法隆寺附近及生駒谷

矢田山脈南北に連りて富小川と龍田川との水脈を分つ。其山脈の南に盡くる處に法隆寺の伽藍あり。千三百年の建築を存して佛体器具亦優秀なるものを殘す少からず、其東北に三井の法輪寺、岡本の法起寺あり、共に古代の三重塔を有す、山背大兄王の墓といへるは法輪寺の前方にあり、嘗て伴林光平の住みし處なる駒塚

は法隆寺の東方にあり。其南方に廣瀬神社あり、更に南すれば箸尾を經て百濟に至るべし。百濟寺は聖德太子の創立なり。法隆寺の西方は龍田町にして、西端に龍田川あり、楓葉の名所なり、龍田神社は又其西方なる龍野にあり信貴山土方に聳え、毘沙門堂は、其山頂にあり、山、北に延いて生駒山となる、其中腹に寶山寺あり、共に世人の信仰淺からず。

法隆寺

（法隆寺村法隆寺停車場より北十二町、奈良を距る三里廿五町）

法隆寺は法相宗にして南都七大寺の一なり、聖德太子、用明天皇の勅によりて、新堂を創建し給ひ推古天皇元年より十五年に至りて、增築せられたる大伽藍なり。七大寺中或は既に荒廢せるものあり或は屢火災に罹りて舊時の規模を見るべからざるものあれども此伽藍は創建當時の建造物依然として存し太子在世の佛体器什儼然として今に見るべきもの多く歷史の材料美術の模範として名聲の內外に嘖々たるもの蓋當寺の右に出づるはなし。境內東西の二院に分れ、西院に金堂、講堂、五層塔ありて、步廊之を繞り正面に中門南大門あり、後に上御堂あり、西方に三經院、西圓堂あり、東に聖靈院、綱封藏、食堂等あり、東院には夢殿ありて繪殿、傳法堂其北にあり、中宮寺と相接す。

南大門は永享十一年再建する處これを入れば左に寺務所あり、（寺務所の北に新堂あり藥師如來兩脇士天王等の像を安す）其北方正面なるは中門にして桁行六間六尺、梁行四間二尺、和銅年間に作れる二王の塑像を安す。これ金堂五重塔と共に建築家の推古式と稱するものに屬し木造建築中最古のものとなす。

金堂　桁行九間二尺梁行七間四尺、內壁には寺傳鳥佛師（止利佛師とも稱す）と又曇徵の筆と稱する繪畫あり西壁なるは阿彌陀の淨土、東壁なるは資生佛の淨刹、北裏東脇は藥師の淨土、西脇は釋迦の國土を畫けり佛菩薩の像各丈七尺內外あり非凡の大作にして當代藝術の進步を見るべきものなり、南面中央なるは釋迦如來坐像（丈四尺五分）脇士藥王藥上菩薩聖德太子御生前の誓願により御母及び妃の冥福を祈らんため鳥佛師をして作らしめ給ひしもの東なるは藥師如來坐像（丈二尺五分）脇士日光月光菩薩これ太子の御父用明天皇の御爲に作らせ給ひし最初の本尊にして亦鳥佛師の作る所といふ皆金銅にして推古時代の特徵を具ふ。西なる彌陀如來坐像（長二尺六寸）は太子の御母の爲に造らせ給へるものなりしが

承德二年盜難に罹り今のは貞永元年佛師康勝銅工中國文の新造する所なり。此他堂内佛像の優秀なるもの多く傳百濟國渡來と稱する虛空藏立像（七尺四寸）の如きは最古のものなるべく四天王（各四尺一天光背の銘に曰く山口大口費上而次木閉二人作也又一天のに曰く藥師德保上而鐵師軍古二人作也と山口大口費は孝德天皇時代の人）は最奇古なり其他文殊普賢、日光月光、觀音勢至諸菩薩の像、觀音菩薩立像、彌勒菩薩坐像、地藏菩薩立像、普賢延命坐像、多門天吉祥天立像（他承曆二年造）の諸像あり玉蟲厨子は木造にして高七尺八寸傳推古天皇の御持佛と稱す（厨子の四方は密陀僧にて經說を描き鉸具は唐草の透彫にて其下に金花虫の羽を敷詰めて裝飾せり故に玉蟲の厨子と稱せるなり）橘夫人念持佛厨子高八尺八寸彌陀三尊を安す共に無類の名品とす。上方に釣る所の天蓋三蓋傳烏佛師作と稱す之を飾れる技樂天女鳳凰等最優美なり。

五層塔　高二十五間、四方各五間半東方文殊維摩坐像化菩薩あり南面に彌勒脇士眷屬等あり西面には釋迦金棺實塔羅漢等あり北面には釋迦涅槃像、菩薩、羅漢等あり何れも塑造にして鳥佛師の作と傳へらる。

講堂　延長三年雷火に燒失し今のは正曆元年京都法性寺内より移建したるもの本尊藥師如來、脇侍日光月光、四天王等を安す左右の回廊に鐘樓經藏あり。

上御堂（かみのみだう）　舍人親王の本願にて今のは應長元年の再造なり本尊釋迦、脇士、文殊普賢、四天王を安す

西圓堂（さいゑんだう）　八角造俗に峯の藥師といふ養老二年橘夫人の本願にて行基菩薩の創建する處、本尊藥師如來行基の作といふ。

聖靈院（しやうりやうゐん）　東方にあり中殿に聖德太子坐像、山背大兄王、殖栗王（えくり）、茨田王（まんだ）、惠慈（ゑじ）法師像、西間に如意輪觀音、東間に地藏の立像を安す。（西傍に勸勸堂あり推古の朝曆啓天文地理等の書を献したる百濟の勸勸僧正像を安す）

綱封藏（かうふうざう）　聖靈院の東にあり優秀の寶器を藏す。佛体は金銅なるに釋迦文殊像一座（後背に戊午年云々の銘あり）誕生釋迦佛、觀音菩薩數軀、蜂藥師胎内佛、槌製の三尊二面等あり、木造に九面觀音（沈香木、他太子作と稱す、高一尺二寸餘最精妙なり）善女龍王像、乾漆の彌勒像等あり繪畫に孔雀明王、妹子筆と稱する毘沙門天、星曼荼羅圖、五尊像、扇面古寫經（天王寺、西教寺にあるものと同じ）屏風なるに蓮花水鳥圖（他巨勢金岡筆或は云ふ曾禰好忠筆）十六羅漢圖（他顧輝筆）等あり其他舞樂面、銅の水瓶、鍍金の香水壺の如き紋錦裂、蜀江錦裂の如き珍什枚擧に遑あらず百萬塔は孝謙天皇の十大寺に寄附せられたるものなれど今當寺に存するのみ納ひる所の經卷四種あり本邦最古の印刷と稱す。

食堂は綱封蔵の後方にあり本尊薬師如來、脇士日光月光の木像、梵天帝釋四天王の塑像等あり

東院は上宮王院と號し聖德太子斑鳩宮の舊趾なりしを蘇我入鹿の爲に燒亡せられ後行信僧都の天平十一年に創立したるものなり、四方廻廊を繞らし西に四足門、南に禮堂、南門あり。

夢殿　八角造天平時代創立のまゝに存す本尊救世觀音長六尺五寸傳太子作と稱し古來秘佛として尊重せらる。前立聖觀音、行信僧都乾漆坐像、道詮律師塑像等を安す。

武殿院　其北方にあり繪殿ともいふ本尊金銅聖觀音鳥佛師作と稱し夢違觀音といふ、太子七歳の坐像聖觀音像あり本殿の繪障子は秦致眞の筆なりしもの、明治二十年宮内省に献納せり、今のは天明四年吉村周圭の畫く所、其東並に舍利殿あり南無佛の舍利を本尊とす、武殿院の北方に傳法堂あり天平十一年の建立にして九品彌陀三尊の乾漆像梵天帝釋天等の像を安置す。其西に鐘樓あり。

中宮寺

中宮寺は初め法相宗なりしが今は眞言律宗なり、聖德太子御母の爲に創立する所、本堂如意輪觀音像長五尺二寸あり等身半跏趺の像にして傳聖德太子作といふ實は法相宗の本尊彌勒菩薩なり、寶物に天壽國曼荼羅刺繍掛幅あり之れ推古天皇の采女に勅して刺繍せしめ給ひしものにして下繪は東漢末賢、高麗加西溢、漢奴加已利の畫く所といふ。本邦最古の織物なり。

法輪寺

宮郷村三井、法隆寺の東北八町

法輪寺は古義眞言宗推古天皇聖德太子に造立なりしを御子山背大兄王太子の遺命によりて成就せしめしものといふ。本堂に本尊觀音立像（傳聖德太子作）彌勒菩薩立像（傳同上）地藏菩薩立像、四天王像あり、金堂には本尊薬師如來坐像木造にして其式法隆寺の本尊に同じ夢違觀音、吉祥天、楊柳觀音皆鳥佛師の作と稱し虚空藏菩薩傳印度作といふ。三重塔は創立のまゝにして推古式と稱するもの、

法起寺

宮郷村岡本、法輪寺の東六町、小泉の西八町

法起寺は法相宗、聖德太子岡本宮の跡にして推古天皇の草創し給へる所。本堂に十一

面觀音像を安す。三重塔は高十一間半方三間半創立のまゝにして推古式に屬す。寶物に如意輪觀音銅像、虚空藏菩薩銅像等あり。

廣瀬神社

河合村河合法隆寺停車場の東南二十町

廣瀬神社史には天武天皇の朝に龍田廣瀬二社を祭るとあるは初見なるも創始は崇神天皇の頃なるべし。中央は和加宇加乃賣命（豐宇氣姫一名保食神）にして水穀を守護し且天照太神の御饌を掌る。左は櫛玉姫神右は瑞穗雷神を祭る。古は三神社殿を異にせしを後兵燹に罹り本殿に左右二神を合殿として祭れり。官幣大社なり。

龍田川

法隆寺停車場より廿五町

龍田町に龍田新宮あり龍田川は町の西端を南に流る文武天皇始めて龍田川の紅葉を詠じ給ひしより詠歌最多く久しく紅葉の名所として天下に知らる、龍田橋の近傍楓樹最多く影を渕流に涵して風光頗佳なり。少し下流の右岸に神南備三室山あり、左岸に磐瀬森、毛無岡あり皆名所なり。

達磨寺

王寺村、王寺停車場の南方八町、眞言宗

達磨寺は片岡山下にあり、傳ふる所によれば聖德太子路傍に臥せる飢者を憐み衣食を給し給ひしに翌日其死せるを悲み厚く葬りしがこの飢者こそ達磨の化身ならめとて墓を築きて達磨塚と名け草堂をも建てゝ達磨を本尊としたるものこれ當寺の草創なり。後大に廢頽したるを笠置の解脫再興して三層の塔婆を塚上に建て始めて達磨寺と稱したりといふ。名所片岡の朝原はこの邊にして昔時の大伽藍放光寺また近傍にありしなり。西方の山間に孝靈天皇陵あり。

龍田神社

三郷村龍野、王寺停車場より廿町、龍田より廿五町、信貴山へ廿町

龍田神社は官幣大社にして風の神なる天御柱神、國御柱神を祭り龍田の本宮と稱す。龍田町にある新宮に對して云ふなり。崇神天皇の朝の創立なるべし。

信貴山朝護孫子寺

平群村信貴畑、王寺停車場より一里眞言宗

河内と境せる連山中聳えて男嶽女嶽の二峯をなせるは信貴山にして毘沙門天を安置せる朝護孫子寺は其山上にあり。聖德太子守屋を討たんとせる時勝利を祈りて伽藍を創立し給へるものといふ。楠公はこゝに祈りて生れたれば幼時の名を多聞といへり。戰

國の頃。松永久秀、信貴城を築きしが織田氏と戰ひて敗れ城陷り伽藍亦兵燹に罹りぬ。今の堂宇は慶長年間豐臣秀頼の再建せる所なり。本堂は舞臺あり。本尊毘沙門天を安す、建物多く塔頭五院あり。寶物に繪卷物中の名品なる傳鳥羽僧正筆の信貴山緣起、武器類（兜袖、喉輪）等あり。

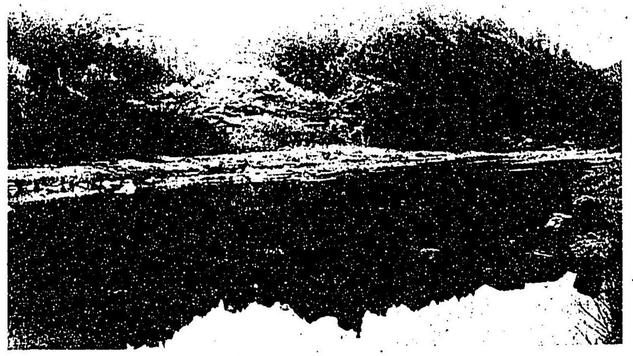
生駒山寶山寺

北生駒村茶畑奈良より三里餘、王寺より二里餘眞言律宗

寶山寺は生駒山腹にあり麓より上るには八丁ばかり本堂の西北に巉巖の聳もるを般若窟といふ。役行者の捷みし處、空海もまた、こゝに居たりといふ。延寶六年寶山和尚湛海始めて大伽藍を創始したるに世人の信仰最深し本堂は元祿年間の建立不動明王を本尊とす聖天堂奥之院共に多く湛海作の佛像を安す。寶物彌勒菩薩畫像を最優秀とす、其他寺什頗多し。

寶山寺の北方廿町俵口に長福寺あり聖武天皇朝の創立にして本堂内鎌倉時代の裝飾の模樣あり。其南方一分には生駒神社あり、古、神宮寺十一院ありて頗盛大なりき。西南鳴川に千光寺あり元山上と稱し役行者の開ける所なり。

月瀧（其一）



（其二）

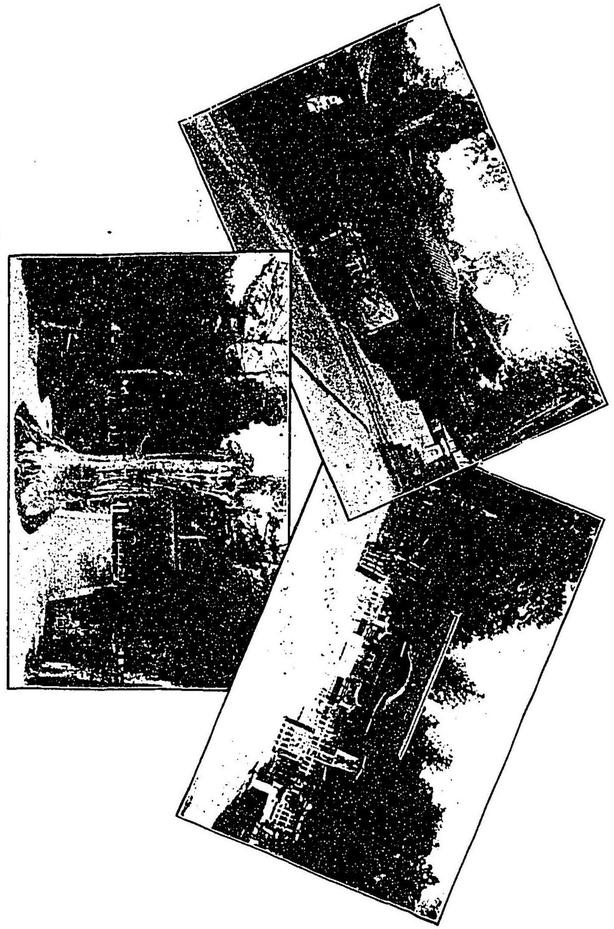
時將二更、月色清朗、步抵眞福寺、枝々帶月、玲瓏透徹、影疎横斜、寶鈿玉釵、錯落滿地、水流其下、鏘然有聲、覺非人境、傍岸西行、前望月瀨、水清如寒玉漾月影、空作與鱗、而両山之花、倒醮其上、隱約可見、一棹中流、山水俱動、

齋藤拙堂

谷川の水上あさし舟すてゝ　高崎正風
君かねつたひ梅の花みん

梅か香のかなりみちたる山影を　伴林光平
くもりはてつもおもひけるかな

杳然別是一乾坤。峯轉溪回果得村。
曾見城西漁隱説。梅花亦自有仙源。　梁川星巖



大和神社　大神神社　石上神社

後嵯峨天皇御製

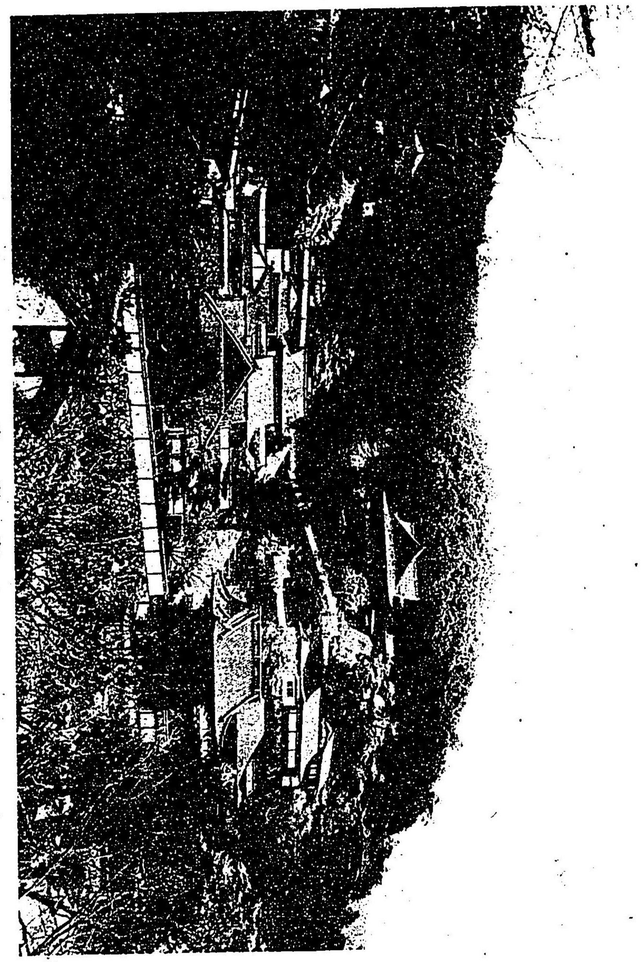
いまは又行きても見はや石上ふるの瀧つせ跡をたづねて

宮居せしその初にも石上ふるの社と人やいひけむ　經家

味酒の三輪の祝の山てらす秋のもみちのちらまくをしも　長屋王

みしめ引三輪の杉むら古にけりこれや神代のしるしなるらん　爲家

我庵は三輪の山もと繼しくはとふらひきませ杉たてる門　讀人しらず



芋瀬初

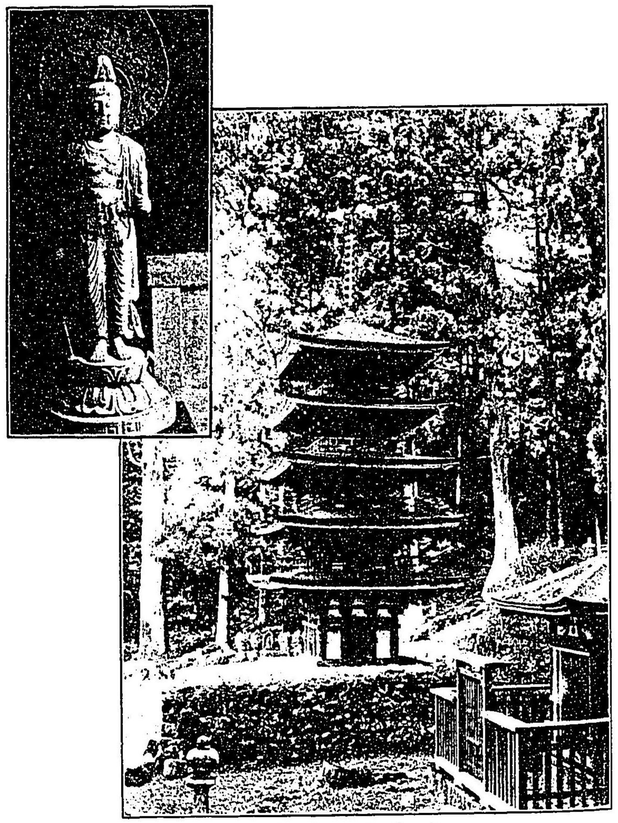
遥哉上覺至矣大仙理歸絶妙
事通感緣釋天眞緣降茲豐山
鷲峰寶塔涌此心泉貢錫來遊
調琴練行披林晏坐寧枕熟定
乘斯勝善同歸實相立授賢劫
俱値千聖嚴次降斐深蒐上句
道明牽引捌拾許人奉爲飛鳥
浦御原大宮治天下天皇敬造
（千体釋迦板佛銘）

はつせにまうづるとにやどりける人の家に
久しくやどらでほどへて後にいたりければ家
のあるじかくさだかになむやどりはあるとい
ひ出して侍りければそこにたてりける梅の花
をなりてよめる　貫之

人はいさ心もしらずふるさとは
花ぞむかしの香に匂ひける

紅のうす雲櫻ほの〳〵と　家隆
朝日いさよふ小初瀬の山

うかれける人やはつせの山さくら　芭蕉
笈摺に卯の花袈裟はつせ山　去來



室生寺五重塔

室生寺彌勒菩薩

抑此山は杉松巷なつゝみて青天につらなり巖石樹をもれて黒雲かと疑はれ蔭にめぐる川涙は春の雪のくづるゝにこそならず地にみだるゝ落葉は秋の雨のふるかとあやまたれ橋をふみゆけば廬山のさびしきをおもひ山路をよぢ登れば鷄足のしづけささながらかくやとこそおもひやられけれ弘法大師の住みたまひし慈尊院は桁ちやらずして山僧すめり護摩を修せられし巖窟は苔のみむして風こそ宿り侍れ伽藍堂をならべて露しげく寶鐸響ありて嵐冷し斯る靈區なればとて世の人女人の高野ともいへりけり

（大和名所圖會）

來てみれはこゝも櫻の樹つゝき　　雅章

よしの初瀬の花のなかやと

回合圍巒氣勢壓、　煙熄金碧廟廊暦、　山陽

風雲一體若臣樂、　山背誰諳天智陵、

藤かつらたえぬ根さしたゝめけり　　資芳

跡もかしこき多武のやまてら

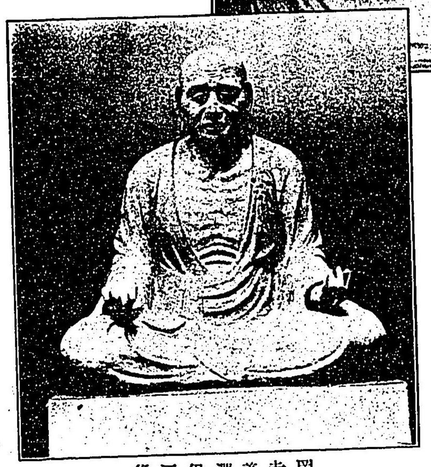
園城寺古袈裟少、　飛鳥宮空鬼佩閑、　鐵兜

唯有談峰神德在、　夕陽金碧照寒山、

多武の山みたにの杉のすきし世を　　光平

しのふたもとに花そこほるゝ

橘寺聖德太子像



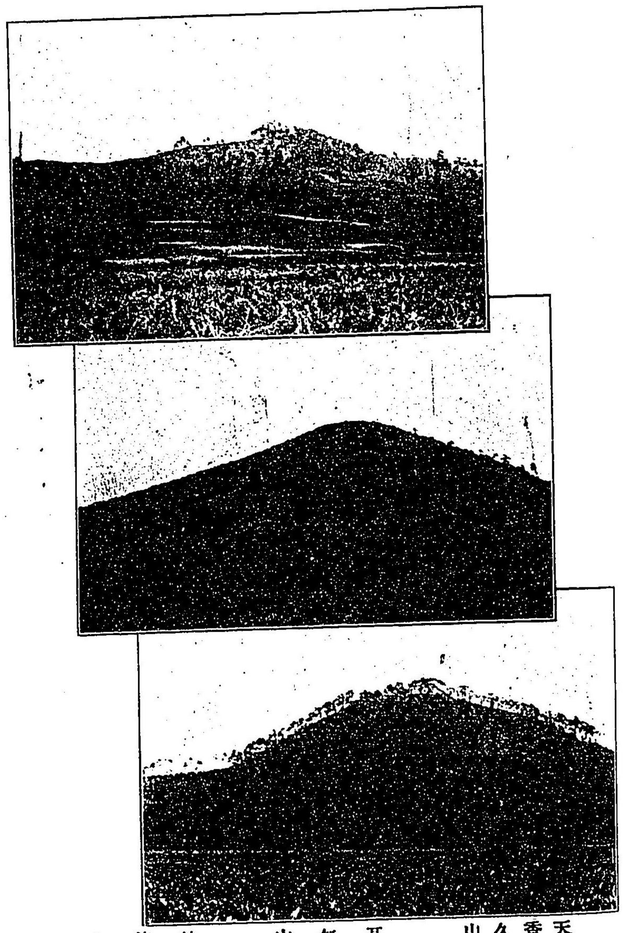
岡寺義淵僧正像

明日香川逝回岳の秋萩は　　丹比眞人

けふふる雨にちりかすぎなん

釋義淵。世姓阿氏。和州高市郡人。……天智帝聞之。同皇子御育國本宮。後出家從智鳳學唯識。又入唐覆智周法師相宗之訣。……歸朝盛傳相宗。受其業者。行基道慈玄昉眞辨宣教隆尊等也。（元亨釋書）

寺寂し花橘に昔の香　　湘夕



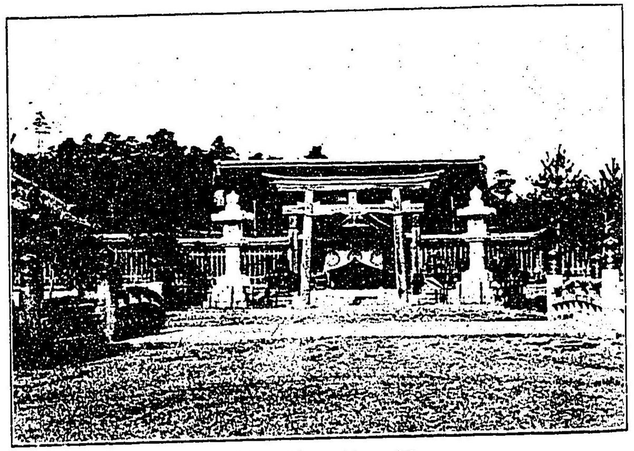
天香久山　　耳無山　　畝傍山

いにしへの事はしらぬを我見ても　（萬葉）
久しくなりぬ天のかぐ山

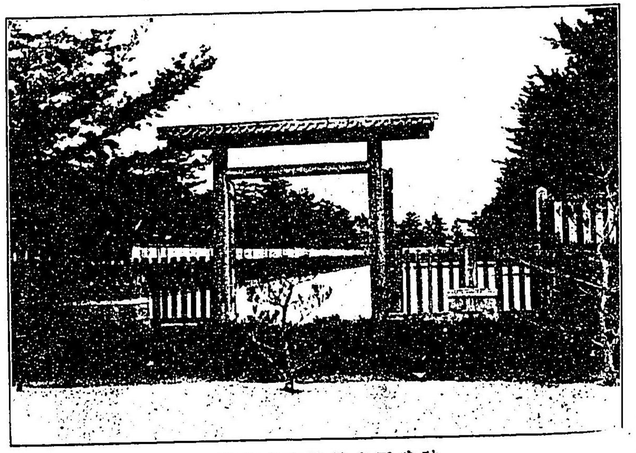
君が代は天の香ぐ山出づる日の　大宮前太政大臣
照らむかぎりはつきじとぞ思ふ

耳なしの山のくちなし得てしがな　（萬葉）
思の色の下をめにせむ

神代なほかけてそしのぶたまだすき　富士谷成章
畝火の山をけふし見つれば



橿原神宮



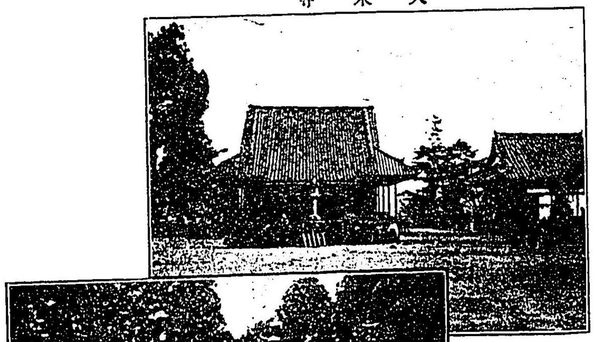
神武天皇畝傍山東北陵

夫畝傍山東南橿原地
者。畝國之奥區乎。可
治之。卽命有司。經始
帝宅。卽位於橿原宮。
是歲爲天皇元年。
（日本書紀）

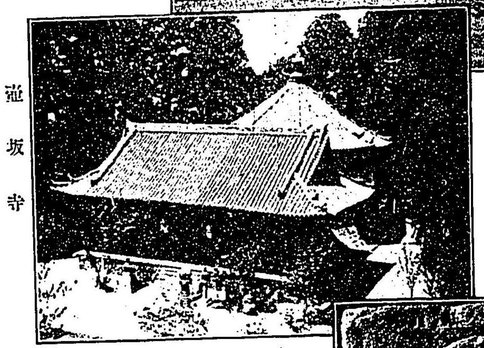
壬子冬奉使入大和　柴野邦彦
行經神武陵
泯陵樵問里氏求　半死孤松數畝丘
非有聖神開帝統　誰教品庶脫夷流
脫主像設尊金闕　藤相墳塋層寶樓
百代本支施不億　幾人來此一回頭

後村上天皇御製
たかみくらとばりかゝげてかし原の
宮の昔もしるき春哉

うねび山見れはかしこし橿原の
ひじりの御世の大宮所　本居宣長



久米寺



竜坂寺

夫畝傍山東南橿原地
者。蓋國之奥區乎。可
治之。卽命有司。經始
帝宅。卽位於橿原宮。
是歲爲天皇元年。
（日本書紀）

壬子冬奉使入大和　柴野邦彦
行經神武陵

遺陵縱向里民求　半死孤松數畝丘
非有聖神開帝統　誰教品庶脫夷流
脫士像殿尊金闕　藤相墳塋層寶樓
百代本支施不盡　幾人來此一回頭

後村上天皇御製

たかみくらとばりかゝげてかし原の
宮の昔もしるき春哉

うねび山見れはかしこし橿原の　本居宣長
ひじりの御世の大宮所

久米寺

壺坂寺

壺坂寺碑

久米仙者和州上郡人、入深山學仙法、食松葉服蒔蕊、一旦騰空過故里、會婦人以足踏浣衣、其脛甚白、愈生染心、卽時墜落、（元亨釋書）

秋寒しおしほふ石の佛達　　嶽　醉

寺　原　峰

和州路上

頼山陽

小市平橋路幾叉
法隆寺遥接當麻
行人買醉和州路
滿野東風黄菜花

二上山當麻寺に詣で庭上の松を見るに凡そ千年も經たるならん大きさ牛を隠すともいふべけん彼の非情と雖も佛縁にひかれて斧斤の罪なきぬかれたるぞ幸にして尊し

僧朝かほいく死かへる法の松　（野さらし紀行）

教へうれしき法の門、開くる道に出でうよ」是は念佛の行者にて候ふ、我此度三熊野に參り下向道に趣きて候ふ、又是より大和路にかゝり當麻の御寺に參らばやと思ひ候ふ」程もなく歸り紀の路の關越えてこや三熊野の岩田川、波も敢るなり朝日影、夜昼わかぬ心地して、雲もそなたに遠かりし二上山の麓なる當麻の寺に著きにけり、（謡曲）

月瀬

月瀬は梅花の多きを以て天下の第一勝たり。奈良より至るに數條の道路あり、其最近きは春日山の南なる瀧阪、石切峠を越え水間、峯寺等を過ぐるものにして途中光仁天皇陵（田原村日笠）を拜すべし、行程六里半許。車を通ずるものは奈良阪より東して忍辱山柳生等を過ぐ、道路甚迂回せり。其最便なるは鐵路によりて加茂、笠置（岩山にして奇勝あり元弘の亂後醍醐天皇の行在所たりし所）を經、大河原（もしくは嶋ケ原）より入るなり（島ケ原より石打を經て尾山に至る二里車を通ず。大河原より桃香野に至る亦二里）地大和の東北隅に位して添上郡に屬し今桃香野、月瀬、長引、尾山、石打の五大字を併せて月瀬村と稱す。名張川東南より來りて村の中央を貫流し（両岸杜鵑花多きを以て杜鵑花川の稱あり）一帶の風色尤常にあらず、加ふるに両岸の諸村梅樹最多く花時の光景美言ふべからず、或は山巓に攀ぢ或は溪流に棹して一日の清遊を縱にするを得べし。中にも尾山の如きは八個の溪谷ありて一目千本、大谷等の絶景あり。山陽の「和州の香世界を觀るに非んば此生何ぞ梅花を説くべき」と咏したるもの宜なりといふべし。普通賞觀する所は桃香野よ

り月瀬、長引を經て尾山に至る一里餘の間なれども梅花の領分は廣く二國三郡に跨り遲瀬、廣瀬、嵩の如きは月瀬村の東南に接して山邊郡波多野村に屬し白樫、治田の如きは梅溪の東口に連りて伊賀國名賀郡の花垣村に屬せり。此地方にかく多くの梅樹を栽培したるものは其實より烏梅といへる染料を取らんとてなりしなり。近時染色の方一變して其需用を失ひしより保勝會を設けて之が維持を圖れり。

圓成寺大柳生村、忍辱山、奈良より二里、眞言宗　忍辱山と號す。天平勝寶八年聖武天皇の祈願により唐僧盧瀧の開基する所ともいひ後白河天皇の御世寛辨僧正の開基ともいふ。本堂桂に彩畫あり多寶塔皆文明年間の再建に係る今頗る頽廢せり。

柳生は奈良を距る三里柳生氏一万石の城地たりき。柳生氏世々此地に住み新陰流劍法の祖柳生但馬守宗嚴に至りて織田氏に仕へ其子但馬守宗矩德川氏に仕へたり。

月瀬の南方豐原村に神野寺小觀音銅像を藏すあり神龜元年行基の創建に係る山中躑躅は非常の美觀なり。其西南都介野村神八井耳命の子孫の國造に任せられし處に來迎寺亞茶羅閻魔王を藏す都祈水分神社あり。

上街道（奈良榛原間）

奈良より三輪を經て榛原に至り伊賀の名張に出づるもの之を上街道といふ櫟本、丹波市、柳本を經て三輪に至る間東に春日高圓山より纒向、三輪山に至る連山あり。三輪より東に折れて溪間に入り初瀬を經て榛原に至る、此間神社に石上、大和、大神の三大社寺院に長谷寺を拜すべし。柳本崇神天皇陵は櫻花の多きを以て名あり。長谷は櫻楓牡丹共に賞すべし。

帶解今市に帶解寺あり地藏院と號し地藏尊を本尊とす。相傳ふ染殿皇后文德皇后御懷胎ありて三十三月に及びしをこの地藏尊に祈りて惟仁親王淸和天皇御平產ありしかばその御願として當寺を御建立ありしものなりと。其南方に龍象寺あり亦地藏尊を本尊とし帶解寺の奥の院とよべり。東方十六町に圓照寺あり寛文年間後水尾天皇第一皇女の御創立にして爾來代々皇族の尼公を住職とせられたり。

櫟本に柿本寺あり人麿塚其近傍にあり。東方廿五町に弘仁寺あり本尊の名に因りて

常に虚空藏とよぶ、空海の建立する處、今の本堂は寛永六年の再建なり。明星堂は本堂の南に連り傳空海作明星菩薩立像を安す、其東北廿五町に菩提山正暦寺あり今頗頽廢せり。

丹波市附近古は廣く石上とよべり布留の枕詞の地名とはなれるなり、東方十町の布留に官幣大社石上神宮あり、其東の山を布留山といひ其北を流れて丹波市に入るものを布留川といひ上流（石上神宮の東一里許）にある瀑布を布留瀧又桃尾瀧といふ高七丈幅五尺夏期涼を納るゝによし。天理教會本部は三島（石上神宮の西北八町）にあり。

石上神宮（丹波市町布留、丹波市の東方十町）

石上神宮は一に布留神社ともいひ官幣大社にして布都御魂を祭る。これ太古武甕槌神の中州を平定せる時帶びたる所の靈劍にして神武天皇東征に當り熊野の高倉下獻進して毒氣を攘ひ皇軍を振起せしことあり。後帝室の鎮護として可美眞手命の献納せる十種神寶と共に宮中に奉齋せしが可美眞手命の忠誠を嘉して之を托し給ひしより爾後長く物部氏祀典を掌りき。崇神天皇七年に至り神威を瀆さんことを恐れ伊香色雄命をして之に祭らしめ給ひぬ。後素戔嗚命の八岐大蛇を斬りしとふ十握劍をも合せ祭れり本社の後に高庭とて禁足の地あり之には布都御魂劍、十握劍、十種神寶を齋藏してこれを神宮の正體としたるものなるが明治七年教部省の許可を得發掘して靈劍一口と勾玉等の古物數點を得たり、この寶劍は即ち今の神体に祭り奉る所なり。本社は鎌倉時代の建築に係る、例祭は九月十七日。寶物に發掘したる勾玉類十一個と色々威腹巻（兜蓋袖付）等あり。

大和神社（朝和村新泉、丹波市の南三十町、柳本の北十町）

大和神社は官幣大社にして大國魂、八千戈、御歳の三神を祭る、大國魂神は大己貴神の荒魂なり。孝昭天皇以來天照大神と共に禁中に奉齋せられしを崇神天皇六年其夢濱を恐れ豐鍬入姫をして天照大神を笠縫邑に祭らしむると同時に淳名城入姫をして此神を今の處に祭らしめたるは即ち當社の創始なり。時に此地に神武天皇の時功績によりて大倭國造に封せられたる椎根津彦の末裔長尾市といふものありしかば創立の翌年之を神主に補して祭祀を掌らしめき、これ神主補任の始なり。例祭は四月一日、ちやん

〻祭といへり。

柳本　はもと織田氏一萬石の城地たり。東南五町に崇神天皇の陵あり、周邊多く櫻樹を植ゑ花時美觀なり、其南にあるは景行天皇の陵なり。柳本の東方釜口に長岳寺あり、天長年間空海の創始する處、昔は宏大なる伽藍なりしが今は大に衰微せり、門は鎌倉時代の建築に係れり、途中にある眞而堂は長岳寺の飛地境内にして方一間半の小堂の中央に柱を建て四方に梵字の額を掲げたり、もと養老年中唐僧善無畏の創設する所といへり。

纒向　垂仁天皇景行天皇の皇居ありし處にして纒向山其東に聳え纒向川穴師の邊を西に流れて初瀬川に入る。穴師兵主神社（景行陵の東南九町）は兵主神を祭り崇神天皇の朝の創立なり。二鳥居より二町許西方の右側に「かたやきし」と字する處これ野見宿禰、當麻蹴速角力の舊蹟なりといふ。

三輪　附近一帶古の磯城の地にして神武天皇の頃兄磯城弟磯城の據りたる處なり。三輪山東に聳えて官幣大社大神神社其麓に鎮坐ます。其北方檜原谷に玄賓庵あり弘仁中學識德行共に高かりし名僧玄賓僧都が名聲を厭ひて隱棲したる處、其北に檜原神社の跡ありこれ崇神天皇の天照大神を祭り給へる笠縫邑の舊地ならんかといふ。往昔繁華なる物品交易の市場にして「初瀬に參る人必ずそこに泊りける海柘榴市は金屋の海柘榴市觀音（三輪の東南五町）とそれより山崎に至る三輪山に沿へる處の海柘榴谷に名殘を留めたり。又此近傍は崇神天皇欽明天皇皇居のありし所なり。三輪は古來索麵を名産とす。

大神神社　（三輪町、奈良より）

三輪山は三輪の東方に聳えて御室山、神奈備山等の別稱あり綠樹蓊鬱として森嚴なる名山なり。大和の一宮なる官幣大社大神神社は其麓に鎮坐ましまして大物主神を祭り古來この山を神體として別に寶殿の設けあらず。其由來を尋ぬるに大古大己貴神豐葦原中國を經營し給ひ其功成るに及びて自ら其幸魂奇魂を此處に祭り給ひしもの是則ち大物主神にして神社中最古きものと稱せらる。崇神天皇の世疫病大に行はれ人多く死亡せしが天皇之を大物主神の祟となし七年其子孫太田田根子を神主とし神地神戸を置き殊に尊敬を加へられたり、太田田根子の子孫は永く其職を襲ひて大神公を氏姓

とし數派に分れたる氏族の長となりて祭祀を掌り兼て族政を行ひ王室に盡す所ありき。有名なる印の杉は雷火に燒かれて今は古幹を存するのみ、一鳥居の北なる緒環塚は大已貴神、活玉依姫の許に通ひましゝ時姫は神の行方を知らんとて苧環の糸を着けたる針を大神の裳にさして跡をとめさせ給ふに其糸三諸山に留り其綰ぬる所の糸三丸殘れるを埋めたる所にして三輪の名の由て起る所なりといふ、一説には「みわ」は神酒の古語にしてもと酒を盛る土器をいへれば神を祭るに數多の御甕を居ゑて奉りたるより出でたる名稱ならんともいへり。二鳥居の北方に大御輪寺の趾あり、こゝに若宮大直禰子神社あり、本社の北方に狹井社ありこれを廻りて流るゝものは狹井川なり神武皇后の御家は此河邊にありしなり。

長谷寺

三輪より東する街道は初瀬川に沿ひ爪先上りに進むこと五十町、驛路自ら幽淸を加へて所謂籠り口の初瀬に至る、長谷寺は泊瀬山の山腹にあり、初瀬の市街を行きつめて左に上るなり。朱鳥元年弘福寺の僧道明上人天武天皇の御願によりて建立したるものは最初の伽藍にして神龜四年聖武天皇德道上人に勅して本堂を創立し十一面觀音を本尊としたるものは新長谷寺なり。爾後寺運益盛にして嘉祥年間定額寺に編入せられる。新義眞言宗の本山にして西國三十三番札所の第八番に當り世間の信仰最深し。二王門を入れば長廊を山腹に架して本堂に至る左右前後山に倚りて數十宇の堂院學寮を構へ規模最宏壯なり。山光嵐色殊に淸秀なる處櫻花楓葉の時に美觀を添ふるあり、長廊の左右に多く植ゑたる牡丹の賞すべきあり。賽客四時群り至りて梵唄の聲晝夜絶えず。

本堂は南面、桁行十五間梁行十四間半、崖に倚りて舞臺を架せり、幕府の命によりて慶安三年造立する所、本尊は十一面觀音にして高二丈六尺あり天文年間東大寺の佛工良學及丹後の作る所といへり。小池坊は天正十一年根來より移したるものにして今の堂は寛文七年家綱の建立する處なり。寶物に銅盤法華說相圖あり千体釋迦板佛ともいふ堅二尺五寸幅二尺厚六分朱鳥元年開山道明の造りて本初瀬寺の本尊としたるもの佛像の雄健なる技術の精妙を見るべきのみならず明に年月を記せるは證徵上最珍とすべ

し。其他玉葛内侍念持佛と稱する觀音銅像、菅公の筆に係る長谷寺緣起、土佐光茂の筆なる長谷寺繪緣起、聖武天皇御納物の經卷及梨子地蒔繪の經箱、香爐、鼠燈樂（油盞は鼠の口より油を補給するやう作れるもの）彌陀來迎圖等珍什多し

宇陀地方

初瀬より東すること五十町古の墨阪なる西峠を越ゆれば即其名の既に神武紀に見えたる榛原なり、神武天皇が天神を祭り給ひし島見山の靈時の趾は今詳ならざれども古此邊より櫻井の東方なる外山の邊にわたれる一帶島見の名ありしが如し（墨阪神社は今榛原の東方にあれど古は西峠にありき、これ靈時の趾に設けたるものなりとの他説あり）榛原は山間の小市にして（宗祐寺に温泉の名湯を湧す）道路之より二條に分岐す、一は大野三本松より伊賀の名張を經て伊勢に出づべく一は高井、上田口（神武天皇兄猾を誅し給ひし血原の地なりと或は云ふ宇賀志其所なりと）神末（御杖神社あり倭姫命の天照大神を奉して暫く駐蹕し給へる處）を經て直に伊勢の御嶽（一志郡伊勢路村）に出づべし、御嶽は櫻花の勝地なり。松山は榛原の南方にあり亦山間の小都邑にして葛粉を名産とす。道路の櫻井より通ずるもの半阪を過ぐ古の男坂是なり。宮奥は女阪なりといふ。松山には伊勢の北畠氏に屬せし宇陀三將（秋山、澤、芳野）の一なる秋山氏の城趾あり、其西方なる阿紀神社は倭姫命が天照大神を藏る宮所を索め給へる時暫く鎭坐し給ひし舊趾にして今縣社に列す。東南守道に高倉山あり神武天皇の國内の賊勢を望み給ひし處（或云桃俣の上方なる高見山）又其東南に宇賀志村あり、神武天皇の始めて宇陀に入り給ひし穿邑は即此處なり。

室生寺

室生寺は室生村にあり榛原を距ること三里許、一は大野より入るべく一は高井より入るべし。其地山に圍まれ擂鉢の底の如き處にあるを以て其何れよりするも一里餘の山路を登降せざるべからず。大野に大野寺あり室生の北門と稱す天長年間空海自作の彌勒像を安置したるもの其創建なりといふ、寺の對岸には巨巖並び立ち最大なるものに彌勒立像を筋彫にせり（長五丈四尺）傳へ云ふ土御門天皇の御願によりて承元年間春日佛師の作る所と。高井より左に入れば途中に佛隆寺あり室生の西門と稱す嘉祥三年空海の高足にして室生初代の住僧たる堅惠大德の創立に係る。

室生寺は鬱蒼森嚴なる室生山の麓にありて一水其前を流る。室生山はもと噴火山にして龍穴といへるは噴火孔を殘せるなり傍に龍穴神社あり古來雨を祈るといふ、山内の岩窟總て九穴と稱し近傍の淵池八海と稱す皆名勝なり。本堂は灌頂堂といひ空海作と傳ふる本尊如意輪觀音坐像を安し彌勒堂亦同作と稱する優美の彌勒菩薩立像を安す。金堂は弘仁時代に屬する建築にして後方の板壁には創建當時の帝釋曼荼羅圖を殘せり。安する處釋迦、文殊、藥師（以上佛、空海作）地藏、十一面觀音（以上佛、太子作）十二神將（佛運作）等あり。五重塔亦傳へて空海の作といふ、弘仁時代に屬する貴重の建築なり、寶物に空海將來といふ銅鍍金皆具の両部佛器を藏す。山上の奥院は頗幽森にして大師堂護摩堂等あり。

室生の東北に曾爾村あり、其上に聳もる山は古の國見岳にして神武天皇の八十梟帥を誅し給ひし處、又此邊古漆部郷と稱す、漆部の一族の住ひし所なり、日本武尊が始めて漆液を發見して器玩を塗らしめ給ひしことあるは此郡の阿紀山に遊獵し給ひし時の事なりとす。（或は云ふ孝安天皇の時三見宿禰といふ者あり漆部連の祖なりと。されどもこの姓を賜はりしもの其人なるか其子孫なるかを詳にせず）

櫻井、飛鳥、畝傍附近

櫻井は三輪の南方十四町にあり交通の要衝に當り市況繁盛なり。其西方一帶天香久山附近に亘りて古の磐余の地にして繼體天皇以後屢皇居を奠め給ひし處なり。東松山街道に忍阪あり神武天皇の大室を作りて八十梟帥を誅し給ひし處にして舒明天皇陵あり。（南方聖林寺に乾漆高一丈の十一面觀音を安すもと大御輪寺のものにして優秀なり）

安倍文殊院（安倍村、櫻井の西南八町）

安倍文殊院は崇敬寺と稱し大化中阿部倉橋麿の創始する所にして十五大寺の一に列せり。本尊文殊菩薩は丹後切戸、奥州永井のものと共に日本三文殊と稱せらる、脇士優塡王、佛陀利三藏、善哉童子皆承久二年安阿彌の作る所なり。此邊石窟多く本堂の左手にあるは高八尺廣七尺五寸奥行三丈九尺あり、大日堂の左傍なるは高さ七尺廣六尺五寸奥行二丈六尺あり、文殊院の東三町許なるは奥行三丈あり窟中に高四尺長六尺横三尺八寸の石棺あり。

談山神社

（多武峰、櫻井、岡寺より各五十町上市を經て吉野に至る四里）

櫻井を南して一の鳥居を過ぐ路之より山間に入りて溪山の風光漸く清爽なり、倉橋は崇峻天皇の皇居ありし處にして其陵溪間にあり。（東南三十町に音羽山あり、山中音羽觀音を安す、）

談山神社は多武峰の北面にあり屋形橋を渡りて上れば前面亦山近く繞り一山綠樹蓊鬱として幽閑清寂の一境なり殊に櫻楓多く春秋の眺望最佳なり。藤原鎌足公の長男定慧大唐歸朝の後公が遺志に從ひ攝津の阿威山より移して此所に葬り墓所に就きて寺塔を建てたるものこれ當社の創立にして藤氏の盛大なると共に一門の尊敬を集め漸次繁榮したるなり。其後時に盛衰なきにあらざれども社殿の壯麗なるは今に關西の日光の稱あり、祠堂數十山腹に並びて規模最宏大なり、舊社祿三千石あり、今別格官幣社に列す。神殿は大寶元年定慧の創立より改築既に十三回に及べり。神殿の前なる拜殿は千鳥唐破風四棟造にして神寶を展列せり。十三重塔は高七間方一間半、寶物は繪緣起に土佐光茂筆一條兼良詞書のもの四卷、住吉如慶具慶畫二條光平詞書のもの二卷、狩野永德筆と稱する三十六歌仙扁額、粟原寺の銅鑑盤等あり。

鎌足公墓は談山の後方にして御破祭山と稱し天下事變ある時は墓山鳴動し神像破裂すといふ。其南方に不比等墳といふ十三重石塔婆あり

飛鳥附近

古は今の飛鳥、岡の邊總稱して飛鳥といひさ、淵瀨定めなき譬に引かれたる飛鳥川は源を天武の朝に樹木の伐採を禁ぜられたる南淵山に發し岡橘の間より甘橿丘の東麓を繞りて西北に折れ今井八木の間に至る。允恭顯宗推古舒明皇極天武の諸帝皆この附近に都し給ひしかば史跡最多し。

岡寺

（高市村岡、多武峰櫻井より五十町八木より一里餘）

岡寺龍蓋寺と稱す、西國第七番の札所にして眞言宗なり。天智天皇の御願にして義淵僧正の開基に係る。義淵は本郡の人、天智天皇、日並知皇子と共に岡宮に收養し給ひしが後名僧となり法門に行基道慈等の碩德を出せり。本堂に本尊如意輪觀音坐像を安す丈六の塑像にして傳空海の作といふ。開山堂に傳自作と稱する乾漆の義淵僧正坐像及び釋迦涅槃像を安す。此處逝回の丘とよび岡宮の趾に就きて伽藍を構へられたるなり寶物に如意輪觀音小銅像（俗稱文會作）天人浮刻磚（俗稱岡本宮殿瓦方一尺三寸二分厚二寸）等を藏す。其下方に岡本寺あり

欽明天皇岡本寺の趾なり、或は云ふ岡寺其處なりも。多武峯街道の近傍島の庄に瓦礫あり、土全く取れて唯大石の重れるを見るのみ。南方阪田には橘俘天皇の時始めて我國に佛法を傳へたる南梁の司馬達等の孫鳥佛師が聖德太子の上宮を賜りて創立せる金剛寺の跡に小堂を殘し又其南方稻淵（岡寺より廿町）には天智天皇藤原鎌足の師たりし南淵先生の墓あり。

橘　寺

高市村橘岡寺より五町、樫原神宮より平田を經て三十町

橘寺は菩提寺といひ太子創立七寺の一なり。推古天皇十四年太子勝鬘經を宮中に講讃し給ひしに蓮花の降りたる奇瑞ありしよりそこに伽藍を造りたるもの當寺の創始なりといへり。金堂は太子殿と稱し聖德太子の像を安す。拜殿に日羅上人立像あり、觀音堂に如意輪觀音立像を安す。境内に畝割塚とて方六間の敷石あり、一反三百六十坪の十分一を象りしものといふ。又橘形石燈籠、二面石等あり。寶物に聖德太子繪傳（傳土佐光信筆）を藏す。

弘福寺　高市村川原　橘寺の北方二町にあり古の川原寺の名殘にして當時の礎石を存せり。堂内に持國多聞二天の立像を安す弘仁時代傑作の一なり。

飛鳥大佛は岡の北方なる飛鳥の安居院に安する丈六の銅像にして鳥佛師の作に係り堂宇を毀たずして大像を容れたる奇巧は史上に明記する所のものなれども今大に破損せり。これ實に崇峻天皇の朝蘇我馬子と聖德太子と議りて創立せられたる元興寺の形見なり、當時法興寺とも飛鳥寺とも稱し規模頗る宏大なりしが其平城に移されしより衰頽して今日に及べり。（中大兄皇子が中臣鎌足と蹴鞠の遊びをなし給ひし處即この寺なり）大官大寺は平城大安寺の本寺にして古川原寺、飛鳥寺と共に三大寺と稱せられしもの北方十町に礎石を存す。

●●●●飛鳥神社　飛鳥寺の東方なる鳥形山に鎮坐す境内に大小社八十六社ましますといふ。其南三町許、岡寺より來る路の上方字酒谷山に酒樽石といふあり、高三尺五寸、平面長一丈三尺七寸幅六尺あり。水溜り溝等を刻し往古神酒を作りたる所といへり。又社の東方三町許の小原に鎌足の邸趾といふあり。之より櫻井に出づる時は路山田を過ぐ山田に石川麻の建立したる山田寺の趾あり。

向原寺　飛鳥村豐浦　は飛鳥神社より西して飛鳥川を渡り猶二町許西したる處にあり欽明天皇十三年に蘇我稻目、向原の地を捨てゝ寺となしたるものこれ當寺の創始にして實に我國寺院の嚆矢なりしなり。後推古天皇の都し給ひしも亦此處なり。こゝに甘樫坐神社あり、允恭天皇の時姓氏の混亂を正さんとて探湯をなしたる古跡とす。之より西南に孝元帝陵あり。（甘樫丘は蘇我入鹿の邸宅を構へし處、北方雷は雄略天皇の朝小子部栖軽が雷を捕へしといふ雷丘の地なり）

天香久山

天香久山、畝傍山、耳成山を合せて三山といふ平野の間に鼎立せり。天香久山は神代より尊き山にして天上に山あり地に下りて一片は伊豫國にあり一片は大和國にあるものとも記され、天照大神の岩戸隠りし給ひし處なりとも記され、神武天皇の時にも此山の土を取りて祭器を作らせ給ひぬ其山容の優れたるは「畝傍を人しと耳成と女を爭ひしとの譬あり「やまとにはむちやまあれどとりよろふ天のかく山」の歌あり、山巓に天香久山神社鎮坐し南麓に天之磐戸神社あり。埴安池は此山の北麓にありて大池なりしなるべけれど今所を知らず、持統文武両帝の都たりし藤原宮は其西方鴨公村高殿にありしなりこれより八木に至る十八町あり。

耳成山

耳成山は耳高山とも山梶子山ともいひ俗には天神山といふ、天香久山の北方十五町の所に孤立し樹木鬱茂山容愛すべし、もと火山なり。

耳成山の西北方に田原本●●●あり其西南多に多坐彌志理都比古神社ありもと十市郡の大社にて朝廷厚く禮を加へたり。此地は神武天皇の皇子神八井耳命の來り住ひ給ひし處にして子孫相繼ぎてこゝに住み多氏を稱せり。北方八尾に鏡作坐天照御魂神社あり石凝姥命外二神を祭れり。されど元は石凝姥命の子孫鏡作氏が崇神天皇の世に此地に於て鏡造せしめたる内侍所神鏡の試鑄のものを祭れるならんといふ。

八木は田原本の南方一里にあり、中街道初瀬街道の要衝に當りて市況繁盛に小房觀音南端にあり今井の西方に忌部其西方なる今井と共に多く大和木綿を産す。畝傍停車場は両町の中間にあり。

神社あり中臣氏と共に朝廷の祭祀を崇りたる忌部氏の住へる處にして其祖神を祭り其北なる曽我は蘇我氏の住ひし處、又其西なる曲川は安閑天皇宮趾のある處なり

畝傍山

今井の南方にあり亦是一個の火山にして平野の間に孤立し山容最雄壯に其東南麓は實に皇祖建國の靈蹟たり。稜威の山と共に高きを仰いで誰か崇敬の念を起さゝらんや。

神武天皇畝傍山東北陵　白橿村畝傍驛より十町

神武天皇陵は兆域周圍四百七十間繞らすに二重壕を以てし綠樹鬱々として頗壯大森嚴なるを仰ぐ、殊に近時神苑を開き境愈清靈を加へんとす。しかも中世乾綱紐を解くに方りてや所在の陵墓荒壞に任せ皇祖の陵さへ其處を知らざるに至り元祿以後久しく綏靖天皇陵を以て之に擬せられ異說亦頗多かりしが文久年間戸田大和守の調査によりて

始めて其兆域を封せられ維新後益規模を擴大して今日の壯殿を見るに至れり。

綏靖天皇陵は其北方三町に孝元天皇陵は東方十二町にあり、安寧天皇陵は畝傍山の西方に（橿原宮より）六七町、懿德天皇陵（安寧陵の南四町）、宣化天皇及其皇后橘皇女陵（懿德陵の東南六町）倭彦命墓（宣化陵の南三町）等は其南方にあり。

橿原神宮（白橿村、神武帝陵の南方九町）

畝傍山の東南麓にあり皇祖神武天皇の底磐根に宮柱太しく立てゝ天地と共に動きなき高御座に即かせ給ひし靈地にして神社は明治廿三年の創建に係り。祭る所は神武天皇及其皇后にして官幣大社に列す、神殿は京都内裏の内侍所、拜殿は神嘉殿を賜りて移し建てたるものなり。千古の靈蹟久しく湮沒して人の知るなかりしに今は淨潔の境を開き宏壯の殿を構へ皇祖の威靈を仰ぐを得るに至れるもの亦明治聖世の餘光なりと謂ふべし。

久米寺（白橿村、久米、橿原神宮の西南四丁）

久米寺は嘗て神武天皇の率ゐましゝ久米部の住へる所なりし久米にあり、聖德太子の弟久目皇子の願によりて創建したるものといへり。養老年中唐僧善無畏こゝに留錫して佛法を弘め延曆中空海亦こゝに住せしことあり。本堂藥師如來を本尊とし、觀音堂には十一面觀音と女の脛の白きを見て墮落せりといふ久米仙人の坐像を安す。此寺の多寶塔は善無畏の本邦にて始めて建てたるものといふ、今のは寛政年間京都仁和寺のを移したるなり境内に益田池碑を摸したるものあり。

益田岩船（倭彦墓より東南六町見瀬の南端より西南七町）益田池は弘仁年間旱害を除かん爲に築かれたる大池にして畝傍山の南方一帶を籠めたりしが今は其趾を留めず、南妙法寺の山頭空しく空海の撰文なりし碑石の臺石を殘せり。高さ二丈許、縱二丈五尺、横一丈三尺許ありて上方に三尺角許の穴二つを堀れるは碑石の脚を嵌めたるなり。碑石今見るを得ず或は云ふ碎きて高取の城壘に用ゐたりと。

見瀬平田邊　見瀬は久米の東南にあり古の牟佐の轉訛したるものといふ、其北に接せる大輕は懿德孝元應神諸帝の都し給ひし輕の地名を殘せるなり。（見瀬の南端に圓山あり（れたるものにして玄室の大なる羨道の長き大和殿陵中の第一に居るといふ）もと天武天皇陵と呼ばれ）南方平田に欽明天皇陵（見瀬より十町）あり其東に並べる欽明皇

孫吉備姫王墓には畸形の石像四軀あり俗に猿石とよぶ、元祿年中欽明陵邊の田より掘出したるものなり。（欽明陵の東二町許道の南邊に鬼の雪隱とよぶ石あり昔石棺の壞れたるもの、高貴の人のなるべきをあらぬ名を負せたる畏しといふ）東方に天武持統両帝合葬陵（欽明陵の東八町）あり、其南方に文武天皇陵（天武陵の南十八町）あり、此邊一帶宣化天皇皇居ありし古の檜隈の地にして今猶檜前の地名を存す。天武陵の東方は即橘寺にして相距る僅に五町のみ。

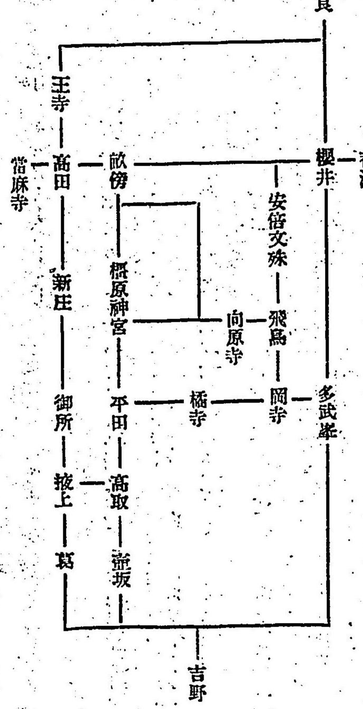
高取平田より南すれば道路二條に分れ右するものは崗宮天皇陵齊明天皇陵を右に見て拔上に出づべく左するものは觀覺寺（千壽院に紫綾金銀泥繪両界曼荼羅圖を藏す）を過ぎて高取に入るべし。高取は幕府の世植村氏四万石の城地たりし所にして高取城趾は其東南なる高取山上にあり、嘗て越智氏の據りて南朝の爲に北軍を防禦したる所なり。（高取は平城朝以前國府のありし所にして今國府神社を存す）

壺阪寺

（高取町壺阪、畝傍驛より二里拔上驛より一里半）

壺阪寺は高取より清水谷を越して山路を上ること十餘町の上にあり、南法華寺を本名とす西國三十三番第六の札所なり。大寶年間南都の僧道基の開創に係り本堂は八角造にして千手觀音を安す。三層塔、二王門は永久三年の再造とす。寶物に浮刻鳳凰磚あり。五百羅漢石は奥の院と稱し吉野街道を二町許上りて左に三町許入りたる處にあり、山腹處々に佛像羅漢等を刻す頗奇古なり。

之より南に下れば一里半にして直に吉野の口なる六田の少し東方に出づべし途中比曾寺（大淀村）の前を過ぐ比曾寺は欽明天皇の朝茅渟海に得たる樟木を以て造れる釋迦如來、及び十一面觀音等の佛像を安せる古寺なり。



高田御所附近

高田は八木の西方一里半にありて郡山より五條に通ずる下街道と河内の國分及び古市より來る両路の衝に當り交通頻繁市況繁盛なり。南方に式内多久豆玉神社あり西方一帯の山脈は總稱して葛城山脈といふ、北方に男女二峰の並び立てるものは詞藻に巧なりし大津皇子の墓ある二上山にして二子山とも稱し南に連りて金剛山となる。二上山の麓に當麻寺あり堂塔最宏壯なり當麻蹶速此地に出でゝ空しく腰折田蹶速の領地を野見宿禰に賜ひてしかよべるなり。の遺趾を良福寺に留め惠心僧都は其近傍狐井下田の南五町に生れて小堂に遺物を藏せり。

下田の北方は一帯に古の片岡の地にして王寺の邊に及ぶ顯宗天皇陵下田の西武烈天皇陵の北方八町志都美神社武烈陵の南二町のあり。

當麻寺

當麻村下田、高田より一里弱

當麻寺は二上山の麓なる麻呂古山の下にありて眞言淨土の両宗たり。此地はもと役行者練行の地なりしが天武天皇白鳳年間河内の山田郷にありし聖德太子弟麻呂子皇子の建立なる禪林寺を皇子の孫當麻國見のこゝに移し建てたるものにして藤原豐成の女中將姫こゝに剃髪せられたり。東方正門より入れば金堂講堂南面じて相並べり金堂は正中三年の修理にして本尊彌勒坐像四天王等傳行者作を安し講堂は乾元二年の建築にして本尊阿彌陀、聖觀音、毘沙門等を安す。

東塔西塔は其南方の丘上にあり寺傳白鳳年間遷造のまゝといへども建築家は之を天平初期に屬せり、九輪の高さと其八輪なるとは他と其例を異にするのみならず雙塔の並び存するもの亦類を見ざる所となす。

曼荼羅堂は金堂の西方にありて東面し元千手觀音を安置せしが天平寶字年間曼荼羅を納めしよりこれを本尊とせり、厨子は高一丈六尺四寸正面一丈六尺左右各三枚の扉あり、仁治三年源頼朝の遺願により將軍頼經の建立する所、所謂鎌倉塗にして金銀蓮華の蒔繪あり、獨當時漆工の術を見るべきのみならず、其下方に記せる結緣衆名簿は史家の參考に資すべきなり。須彌壇は黒漆螺鈿にして唐草模様あり、高三尺三寸五分、正面幅三丈、奥行一丈五尺四寸金物に寛元元年の銘あり。淨土曼荼羅長一丈二尺九寸

幅一丈三尺其第一は所謂中將姫（はせいと）絲の曼荼羅と稱するもの實に天平時代のものに屬す、第二は（順德天皇保延年間焚焼する所）畠山の亂に紛失して今傳らず、第三は繪所法橋慶舜、法橋專慶の筆（明正四年十月起筆永正二年十月成就）文龜曼荼羅と稱し（文龜三年後柏原天皇御母の爲に銘文を勅寫し給ふ）第四は法橋良慶の筆（延寶六年起筆同七年成就）貞享曼荼羅と稱す（銘文貞享四年墨元天皇宸翰）此他寶物後方の寶庫に藏む。法然上人行狀繪卷土佐光外數人の筆に成り詞書は伏見、後伏見、後二條諸帝の宸翰に係る智恩院のと共に四十八卷御傳と稱して世に喧傳する所なり、當麻寺繪緣起三卷土佐光茂の筆、詞書は後奈良天皇の宸翰を始め尊鎭親王外七人の筆に成る。十界圖（佛惡心僧都筆）十王圖の屏風、倶利加羅龍蒔繪錫杖筥（梨子地唐出焚線）等皆優秀なり。奥の院西方にあり大師堂圓光大師像を安す。

新庄は高田の西南に當り近傍に飯豐青天皇陵あり忍海（おしみ）は其角刺宮（つのさしのみや）のありし所、

御所（ごせ）は高田を距る南方一里廿町下街道と下市街道の會せる所、多く木綿を産す、此地古の意富葦古原（おほあしはら）の地にして東南披上の地は孝昭天皇の都たりし處南方室（秋津村に屬す）は孝安帝の都ありし處西南森脇（吐田郷村に屬す）綏靖天皇の都ありし處なり。近く茅原寺（ちはらでら）、鴨都波（かもつは）神社（南方三町）を拜し孝昭天皇陵（御所より八町）孝安天皇陵（御所より十七町）に詣るべく遠く一言主神社（御所より三十町）

高鴨神社（御所より一里三十町、北字智より二十町）に詣り又櫛羅瀧の勝を探り金剛山登攀の壯遊を試むべし。

櫛羅瀧は御所の西方三十町、櫛羅まで車を通すべし、櫛羅は永井氏一萬石の陣營ありし所なり、瀧は葛城山中にあり、高五丈八尺、幅一丈八尺許谿谷幽邃なり。

金剛山　葛城山脈中の高峯にして高さ四千尺、役行者山中に修行しけるより道士絶もることなく修驗宗の靈場たりき。これより楠氏の孤軍を以て北條百萬の軍を防禦したる千劍破（ちはや）の城趾に下るべし。路嶮峻なれども僅に二十五町あるのみ。此山の名を負へ金剛砂は此地の産最著れ今も二上山下の穴虫等にはこれを産せり官奴が大阪（今の穴虫邊）にこれを得て玉を造りしことは天平の昔既に史に記せる所なり。

一言主神社（吐田郷村森脇）一言主神一名味鉏高彦根命（あぢすきたかひこねのみこと）に雄略天皇を配祀す、此神雄略天皇御獵の時現れ給ひ共に馳せめぐり給ひて帝を久米川まで奉送し給ひしも不遜の罪ありて土佐に遷され給ひぬ天平寶字八年氏人の奏請によりて本國に復り給ふに及び初めて一言主の名を以て現れ給ひしなり。今縣社に列す。

高鴨神社（葛城村鴨神）一言主神社と同神にして紀元前よりこゝに鎭祭し孝昭帝の御世に神

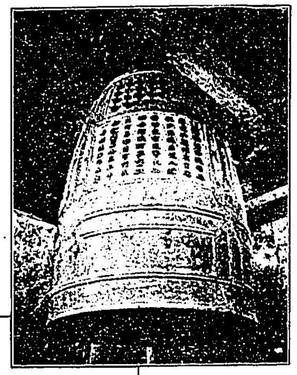
殿を造りて奉祭せられしものといふ。亦照祉なり。

茅原寺（はらでら）即吉祥草寺は御所の東方にあり（停車場なる距る十町）役行者誕生の處といふ其南方に玉手岡あり孝安天皇陵のある所（其南方十町に日本武尊埴原陵あり南すれば直に戸毛驛に出づべし）其東方に國見山あり掖上驛の西南に當り神武天皇の國中を一望し給ひし掖上嶺間丘（わきかみのはいとのをか）は即是なり。

葛（くず）は戸毛（とうげ）驛の西南にあり炭酸泉を湧出し浴舍の設あり内服浴用両つながら有効なりといふ此邊一帶巨勢（こせ）の舊地にして古巨勢氏の住ひし處山を巨勢山とよび川を巨勢川とよび寺院に巨勢寺ありき、今大字に古瀬を存せり。古瀬の西南水泥（みどろ）に蘇我蝦夷（えみし）入鹿（いるか）の雙墓（ふたつづか）といふがあり。

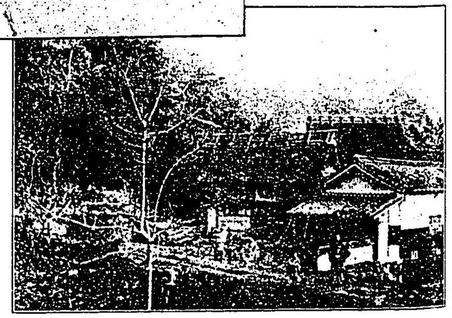
阿田（あだ）桃園

葛より南する十七八町、新田より左に上ること十町餘にして阿田の桃園に至るべし又北宇智よりするも距離相若けり、古の阿陀大野の地にして園は明治の初めに開く所年月猶幾けれども面積二百餘町東西五十町の廣きに亘り實に一個の新桃源なり。花時の清賞漸く世人の傳稱する所とならんとす。



榮山寺鐘

榮山寺



殿を造りて奉祭せられしものといふ。亦熙祉なり。

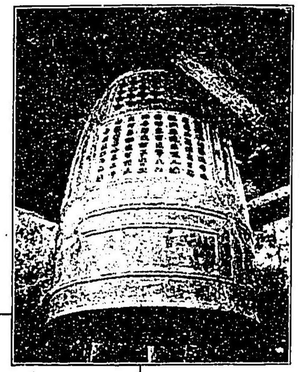
茅原寺（はらでら）即吉祥草寺は御所の東方にあり（啓東坂を距る十町）役行者誕生の處といふ其南方に玉手岡あり孝安天皇陵のある所（其南方十町に日本武尊琴弧原陵あり南すれば直に戸毛驛に出づべし）其東方に國見山あり掖上驛の西南に當り神武天皇の國中を一望し給ひし掖上鳶間丘（おさかみのとびいおのをか）は即是なり。

葛（くず）は戸毛驛（とけうまうまや）の西南にあり炭酸泉を湧出し浴舍の設あり内服浴用両つながら有効なりといふ此邊一帶巨勢（こせ）の舊地にして古巨勢氏の住ひし處山を巨勢山とよび川を巨勢川とよび寺院に巨勢寺ありき、今大字に古瀬を存せり。古瀬の西南水泥（みどろ）に蘇我蝦夷（そがえみし）入鹿（いるか）の雙墓（ふたつづか）といふがあり。

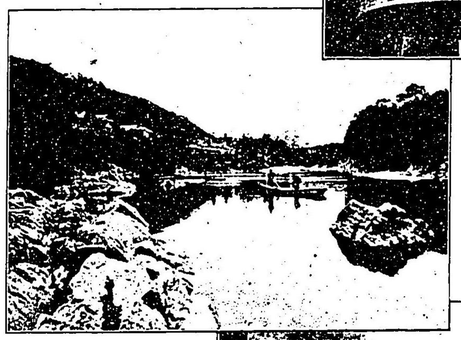
阿田（あだ）桃園

葛より南する十七八町、新田より左に上ること十町餘にして阿田の桃園に至るべし又北宇智よりするも距離相若けり、古の阿陀大野の地にして園は明治の初めに開く所年月猶淺けれども面積二百餘町東西五十町の廣きに亘り實に一個の新桃源なり。花時の清賞漸く世人の傳稱する所とならんとす。

榮山寺鐘



榮山寺



賀名生皇居

北闕當年兇賊滿。九重宮殿委塵埃。數間茅屋愚慮崖下。
曾作金城鐵壁來。　　大蹇　詩佛

大和國賀名生郷堀孫太郎居宅地卽往昔
後醍醐天皇　　みやひとのあゆひふれけんあとならし
後村上天皇　　清けになひく園のさゝ原　伴林光平

後龜山天皇爲行在所而祖先忠臣之由ヲ
以テ右繪圖面中六石六斗三升ノ租稅此
度被免候事

慶應四辰年五月朔
大和國鎭撫總督府

阿陁基

附太政大臣藤原朝臣其孫ニ
木根子推國高彦尊天皇外祖
父在大和國宇知郡兆城西東
十五町南北十五町守戸一烟

後阿陁基

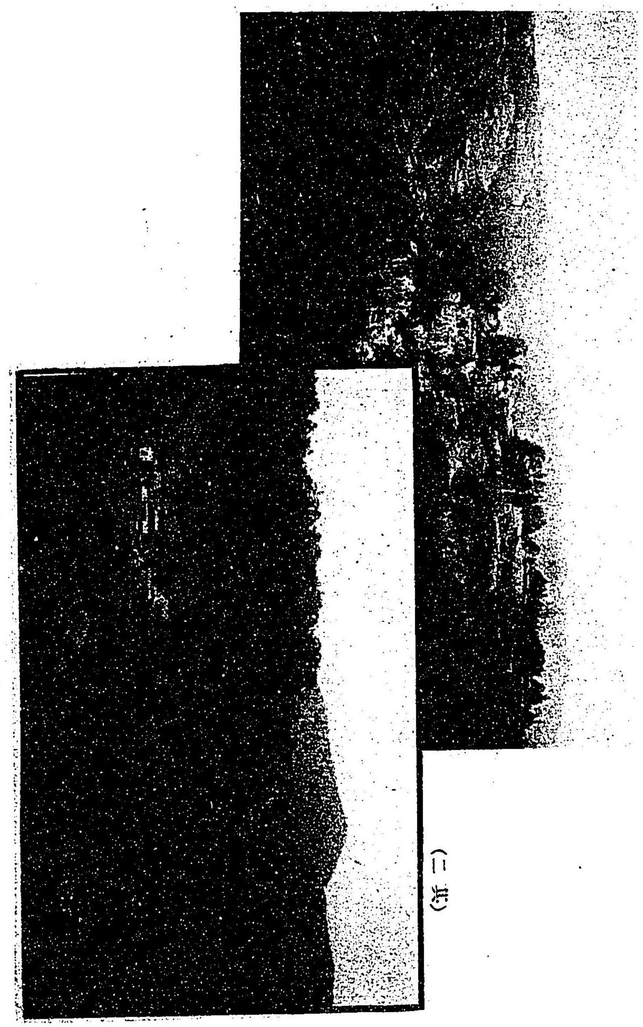
附太政大臣正一位藤原朝臣
武智麻呂在大和國宇智郡兆域
東西十五町南北十五町守戸
一烟

（延喜式）

一阪といふ所の櫻一木道の
行手に盛なれば
見よしのゝ櫻一木に先見せて　飛鳥井雅章
山中うるゝ匂ふ春かぜ

凡此地は金峯山の尾の長く出たる高岡の背の上に民家有故に左右共にかけ作りにて三階の屋なり但上の第三級の客舍は道なみにて常の平屋のごとし三階の閣とは見えず其次の第二級は主の居宅也かまどあり上の座敷より主の居る所に下る其口は穴に入がごとく梯より下る是は二階なり其下に又梯より下れば土座の屋有是は雜物薪等を積置所也浴所厠もこゝに有客舍は左右みな谷上に臨めり東方の客舍に景好所多し　（貝原益軒大和めぐりの記）

疊々春山別有天
花開花落鎮依然
羊腸險惡君休怒
曾護南朝五十年
賴山陽



（二五）　吉野山

一目千株花離開、滿前唯見白皚皚、
近聞人語不知處、聲自香雲關裏來、　菅　茶山

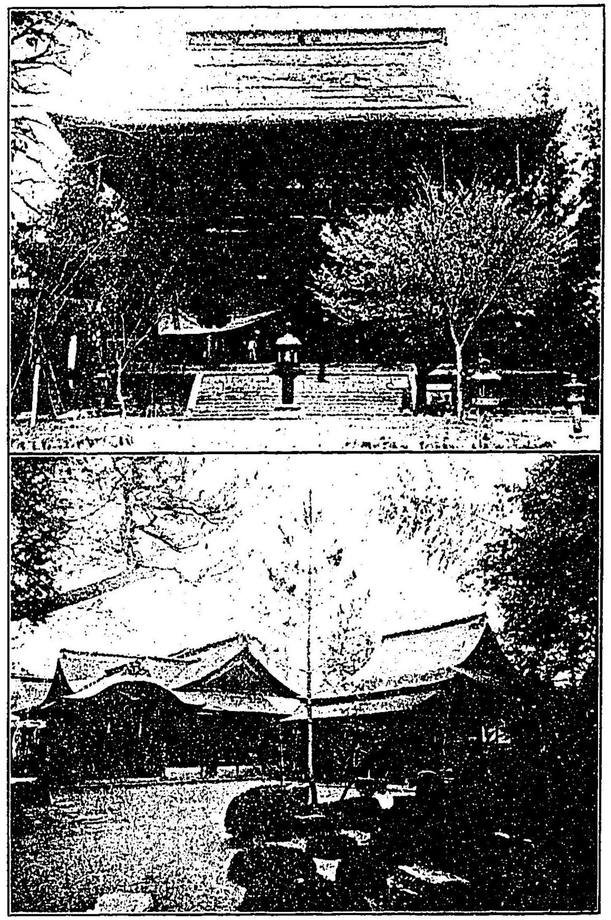
吉野山霞の奥は知らねども
　みゆる限は櫻なりけり　八田知紀

吉野山去年の栞を見ちがへて
　うろつくほどの花盛かな　紀　定丸

雪を花花を雲ぞとみよしの丶
　うそはいまだにやまさくら花　市　人

人は武士花は吉野の山さへも
　腰にはしやんとさいてこそなれ　宿屋飯盛

これはくとばかり花の吉野山　安原貞室



藏王堂

吉水院

後醍醐天皇御製

花にねてよしや吉野の吉水の
　枕の下に石はしる音

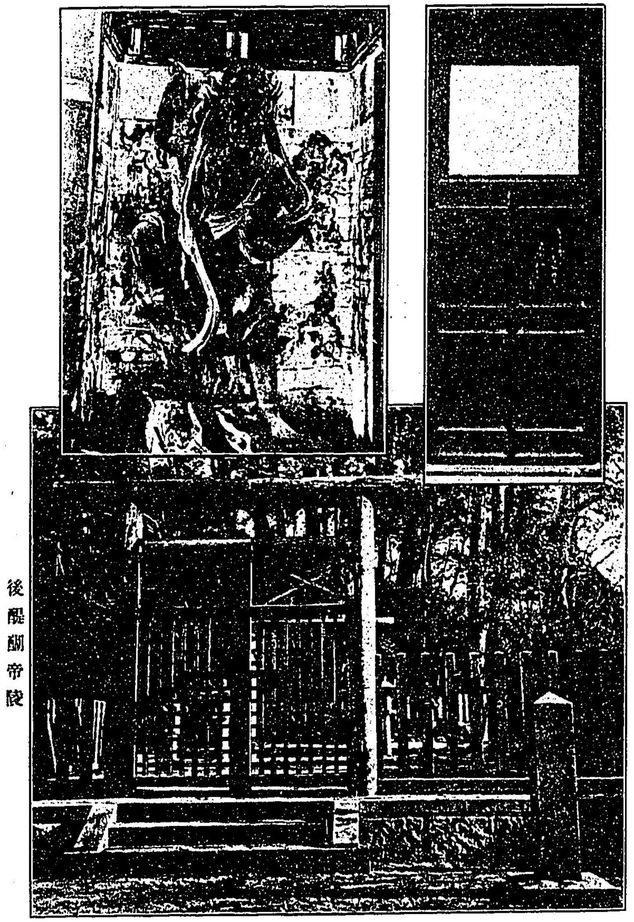
都だに淋しかりしを雲はれぬ
　吉野の奥の五月雨の空

藏王堂外彩霞蒸　如意輪湯香霧凝
花似有心巡幸處　翠紅千幄護山陵　　篠崎小竹

よしの丶山にいりにける、人はゆく
へも白雪に、こひしき人をしたひて　本居宣長
も、いつこを春と尋ねまし。

さかば先ゆきてこそ見め我やとゝ　宗良親王
たのむよしの丶花の下蔭

欲書よりも軍書に悲し吉野山　　支考



如意輪堂扉

同藏王權現像

後醍醐帝陵